
真チート転生～麻帆良学園戦争～

ガルガンチュアY

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真チート転生〜麻帆良学園戦争〜

【Nコード】

N6320W

【作者名】

ガルガンチュアY

【あらすじ】

ある神のせいで死んでしまった少年が少し安全な非日常を求めて転生を要求し、第二の人生をあるゲームの能力を使って生きていく物語。運命に翻弄され続ける彼の人生は果たして女神の喜劇か、悪魔の悲劇か。

この物語にはチート、鬱、微グロ、アンチなどを含んでおります。これらの要素が苦手な方はブラウザのバックボタンで戻った方が良いかも知れません。また、作者は文才が無く遅筆ですのでしばらく更新できない時期がある場合があります。 9/21、2話から9

話を修正版と差し替えました。

第1話 はじまり（前書き）

初めまして、当小説を開いていただき誠にありがとうございます。

あまり文才は有りませんが、生暖かい目で見ただけだと嬉しいです。

第1話 はじまり

はあ、やっと今日のバイトが終わった。えーと、今月の給料は…
…107100円か。

これですばらくは缶詰とは顔を合わせなくて良さそうだ。課題も終わっているし、帰ったら久々にじっくりゲームが出来そうだ。

高校生本田仁也はゲーマーである。彼は某メーカーの有名RPGを一日最低三時間プレイすることを日課とし、一種の廃人として生きている。彼はニートではない。しかし高校生活三年目にして未だ進路が決まらずにいた。理由は簡単、彼はこの世界に夢を持てないのだ。

ケタケタ笑う悪魔も空飛ぶ巨大ロボも胡散臭い天使も地球人にそっくりの異星人もないこの世界は彼の興味を引かないのだ。昔は居たのかも知れないが彼の生きる時代に居なければ一緒である。だから彼は進路が決まっていけないのだ、と自己弁解してみる。

ふと空を見ると星が妙によく見えた。一瞬きらりと瞬いた光を見て俺は何かいいことがありそうだと思って浮かれ、次の瞬間まぶしさに包まれた。

次に目を覚ますとそこは白い部屋だった。俺が座っている椅子以外には特に何も置かれず、窓が一つもない。長く一人で居ると発狂しそうな光景だが、一つだけ現実ではまずあり得ない存在が俺を迎えた。

それは巨大な顔だった。首から下は無くただ顔だけが宙に浮いて

いる。うつすらと感じる程度に威圧感を放つその存在に俺は見覚えがあった。そしてつい変な調子で訪ねてしまった。

「あなたは……ヤハウエですか？」

しばしの静寂の後、我に返った俺は死を覚悟したが、

——そうだ人の子よ。私はヤハウエ。万物の父であり全知全能たる神だ——

威厳と自信の塊のような声からなる返答に安堵と共に一抹の疑問を感じた。そしてその疑問は次の瞬間口から飛び出した。

「……すいません、俺はもしかして死にましたか？」

——ああ、汝は死んだ。故に我が前に居る——

穏やかな雰囲気で行われたその言葉について心の中で突っ込みを入れてしまった。なぜユダヤ教徒でもない俺がユダヤ教の神の前に連れてこられるのか。というかヤハウエは人が死ぬとそいつをわざわざ自分の前に連れてくるのか。そういうことは配下の天使に任せておけばいいだろうに。突っ込みどころは挙げればきりがなしの意味もないのでそこで思考を中断すると、思いがけない言葉が飛んできた。

——人の子よ、此度はすまなかった——

はあ？

「ちょっと待ってください、なぜ謝るのですか？俺にはいまいち状

況が飲み込めないのですが」

——此度の汝が死は我が力によってなされたのだ——

正直この展開が来るかなとは思っていた。だがまさかこんなベタな展開になるとは考えたくなかった。

「つまり、俺はあなたに殺されたと言うことですか」

——そうだ。私が戦っているときの流れ弾が汝に当たったのだ——

「なら、おまえに礼儀は必要ないな。で、これから俺はどうなるんだ」

あからさまに態度を変えた俺を見たヤハウエは少し驚いていたように見えたが、すぐに元の表情に戻ってこう言った。

——本来であれば汝を蘇生させ記憶を改竄し、失踪していたとするところであるが、此度はそれが出来ぬ——

ヤハウエはそう言っただけで俺の死が確定したことを告げた。
俺は憤慨した。

「何故だ、理由を言え」

——……命中した際汝の左腕が残ってしまい、汝の死は人の子の知るところとなった。故に汝の死を無かったことにすることが出来ぬのだ——

俺の肩幅よりでかい口から出た理由は予想の斜め上に全速力で飛

んでいった。

しょぼい。しょぼ過ぎる。何だその理由、人をおちよくってるのか。悪魔でももっとマシな冗談を言っぞ。

「時間操作でもして俺が死ぬ前に流れ弾を処理すればいいんじゃないのか？」

——私は時間操作が出来ぬから無理だ——

「……全知全能じゃないのかよ、お前。本当に本物のヤハウエか？」

色んな意味で顔だけの「神様（笑）」に俺は皮肉たっぷりにつてやった。

——……今問題なのはそこでは無かるう——

適当にはぐらかされた。仕方ない、話を聞こう。

「……で結局俺はどうなるってんだ、ヤハウエ？」

——本来ならこのままこの世界で転生し新たな命となるべきだが——

ヤハウエはそこで区切り、ため息をついてから

——……神の不幸で死んだ者には何かしらの詫びをするのが通例となっている——

来たな、と思った。やはり定番中の定番、チート転生。これを利用すれば俺はあの退屈で代わり映えのしない世界から晴れて非日常の世界へと足を踏み出すことになる。もっとも、この状況ですでに

半分くらいは踏み込んでいる気もするが。

——汝の望みはなんだ？どんな願いも出来うる限りは叶えようぞ——

「そのできる限りはどのくらいまでならいいんだ？」

ヤハウエは少し考えてから、

——……そうだな、無限の富や規格外の戦闘力、後は異世界への転生と言ったところか。条件付けは三つまでとしよう——

言質は取った。後は実行に移すだけだ。

「それじゃあ、異世界への転生を頼む」

——……良からう、詳しい転生内容は別室の部下と話し合って決めてくれ——

やった！勝ち取った、勝ち取ったぞ！俺は非日常行きの切符を手に入れたんだ！これが喜ばずにいられるか。今このとき俺はヤハウエ以外の神に感謝を述べた。（さすがに加害者に感謝はしないからな）

こうして俺は念願の非日常（しかも条件設定可能な）というまず手に入らない幸福を手に入れた。

——……言い忘れたが、たとえ異世界に転生しても死ぬときは死ぬ。それだけは覚えておけ——

「わかっているさ、うかつに行動してせっかくの機会を無駄にはしたくないからな」

釘を刺されてしまった。まあ仕方あるまい、どうにも浮かれて見えていたらしい。

不意に後方から重苦しくギギイと音がした。……どうやら後ろに扉があつたようだ。俺は振り返り、そして絶句した。

扉の先には黄金の鎧を身にまとい、槍を掲げた短髪の男性が立っていた。それだけなら騎士か何かに見えるがその男性は背中につつすらと輝く大きな翼があつた。そう、男性は天使だつた。そして俺はまたそんな男性に見覚えがあつたのだ。俺は無意識にその天使の名前を口にしていた。

「……ミカエル」

「四大天使筆頭ミカエル、参上いたしました。主よ何かご用ですか」

どうやら俺のつぶやきは聞こえてないらしいが、ミカエルはまるで汚い物を見るように俺を見ていた。

——おお、ミカエルよ。この人間をラジエルの執務室に連れて行くのだ——

「……主よ、何故汚らしい人間なぞが此処に居るのですか。此処はあなた様の部屋であつて拷問室ではありませんし、ラジエルの執務室も拘留所ではありません。断罪するのであれば処刑台に連れて行くべきでしょう。何ならこの場で私が処刑しましょうか？」

……何故かはわからないが一方的に罵倒された。それも彼は当然のようにこれから俺を断罪すると言つてのけた。それが彼にとってありふれた事だと思うとだいたい気分が悪くなつた。確かに人は生まれながらにして罪を背負うと何かに書かれているがそれでもこの

態度はないだろう。ヤハウエは嫌悪感全開で俺を見るミカエルに思
い出させるように言った。

——先の戦いで私の攻撃を受け死んだ人間が居たであろう——

「ああ、そんな奴も居ましたね。まったくのろまな奴です。もう少
し身を右に捻つていれば全部消えて後処理もしやすくなったのに、
仕事をするこちらのことを考えて欲しかったですね。人間なんて所
詮は神のための家畜のような物なのだから、死んでまで迷惑をかけ
ないで欲しいですよ」

これは酷い。完璧に人間を見下している。ここまで言われるとい
つそ清々しくさえ感じられる。脳内では何故か邪悪な笑みをしたオ
レンジ色の髪の青年が浮かんだが、今はそんな事はどうでもいい。
重要な事じゃない。というかこいつこんなに性格悪かったのか。

——この者がその人間だ。今回の一件は私の責任であるが故、詫び
をすることとした——

「……主よ、四月一日は過ぎました。悪質な冗談は止めていただき
たい。あのような有象無象の言うことなぞ聞く必要はないのです。
何が通例ですか、私より霊格の低い者が神を名乗るとは罪深き事こ
の上ないですし、人間に詫び？懺悔されるならともかくそのような
こととする事自体間違っています」

正直聞くのもつらい。上司から仕事を言い渡されたのだから何も
言わずに仕事しろと思うのは俺が日本人だからだろうか。少しずつ
沸き上がる怒りに理性を総動員して鎮圧にかかる。

——ミカエルよ、これは私の意思なのだ。汝が口を出すことではな

い――

「……わかりました、主よ。ラジエルの執務室ですね」

――道中、何か聞かれれば答えるようにな――

ヤハウエはこう言うが別に聞きたい事は無く、こいつに聞かなくてもこれから行くところにも天使は居る。そちらに聞いた方が有義な答えが帰ってくるはずだ……こいつ以上の狂信者でもない限りは。

「はっ！……ついてこい人間」

ミカエルはヤハウエに一礼すると歩き出した。……最初から素直に案内すればいいのになあ。

第2話 転生 修正版（前書き）

最初なんで連続投稿です

9 / 2 1、修正版に差し替えました。

第2話 転生 修正版

「ではこの者を頼むぞ、ラジエル。……人間に情けなど要らんからな」

「はっ。ミカエル様、忠告痛み入ります」

マジかよ、このラジエルって奴も狂信者……それもミカエルに友好的な奴か？こりやもう夢がどうか言ってられんな。できるだけ機嫌を損ねないようにしないと。じゃなきゃ処刑されちまうかも知れん。

ミカエルが出て行き俺はラジエルと二人きりになった。恰幅がよく無機質な兜を身につけた赤い羽根の天使で、ミカエルに様付けしていた事から階級はあいつより下だろう事が伺える。手には辞典のように分厚い一冊の本を持っている。この天使がミカエルの部下だと考えると気が重くて仕方がない。

「……本田仁也殿でよろしいか？」

「はい」

「この度は誠に申し訳ございません！今回の一件はすべてこちらの不手際です！主より事情は聞いております、何なりとお申し付けください！」

……驚いた。ここまできつちりと謝罪されるとは思わなかった。先にミカエルを見たからすごく安心する。

しかも腰の角度は45度でびたりと固定されている。何か懐かしい

気分になったのは内緒だ。

「……誠意が足りませんでしたか？」

「い、いえ、十分ですから土下座はしないでください」

かなり真面目な性格なのか俺の沈黙を誤解して土下座しようとしていた。やはり天使にも個性があり、性格もピンからキリまであるようだ。

「立ったままというのなんでですから、どうぞお掛けください」

「ありがとうございます」

奥に置かれているソファに腰掛け、俺はようやくまとまな話し相手を見つけた。ここまで来るのに時間がかかりすぎている気がする。とりあえず質問タイムだな。

「あの、聞きたい事があるんですが」

「どうぞ何でも聞いてください」

「……天使ってみんなあんな感じなんですか？」

「あんな……ああ、ミカエルの事ですか。そうですね、大体半分くらいはそうでしょう」

「半分……ですか」

「ええ、天使は下級であるほど人間の近くで仕事をしますので、下

級の者ほど人を理解しています。逆に上級天使はほとんどが人間を見下しています。もつとも、すべてがすべてその傾向に当てはまる訳ではありません。上級天使でも人間に偏見を持たず普通に接する者も居ます」

俺の中で天使達のイメージが変わった。やっぱり第一印象は大事だ。

「ちなみにあなたは偉いのですか？」

「一応は座天使の長と言うことになっていますが、同僚と比べると閑職に回されたと見ていいでしょう」

何それ怖い、座天使って天使階級第三位なのにそれで閑職って。同僚すごすぎね？

「ちなみに私の同僚は大体熾天使なんですよ、ミカエルとかメタトロンとか」

「……彼らの階級は大天使だった気がするのですが」

「大天使は階級を表す時と一部の天使を指す時があります。彼らの場合は後者で、神に意見できる数少ない天使のことを天使の上位者、大天使としています。誰が呼び始めたのかは知りませんが一種の通例みたいなものです。ちなみに階級で呼ぶ場合普通は漢字読みでは呼ばないですね」

「なるほどなー」

「さて、そろそろ転生内容を決めましょうか」

「あ、はい」

「まず転生する世界ですが、何か希望はありますか？」

「あー、適度に安全な非日常のある世界がいいです。それと魔法とか悪魔とかロボとかの居る世界」

「……その条件に一番当てはまるのはネギまの世界ですね」

「それじゃあそこをお願いします」

ネギまの世界か、まあそれなりにいい世界だな。

「原作に関わりますか？関わる場合は生徒、教師、完全なる世界な
どが選べますが」

「教師として関わりたいですね。年齢は原作開始時30歳ぐらいで」

まあ教師以外としても動くかも知れないが。

「わかりました。能力設定などはどうしますか？」

「……ゲームの能力でもいいですか？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「ゲームの経験値を俺に上乗せするのは？」

「問題ありません」

ついにこの時が来た。俺は高鳴る胸を落ち着けるために深呼吸してからはっきりと言った。

「俺がこれまでやった女神転生およびそれに準ずるゲームでの主人公の能力を引き継ぎたいです」

「……ええと、つまりあなたがやったそれらのゲームの主人公の経験値および能力が欲しいと？」

「はい、そうです」

ラジエルは一瞬考えるように手を顎に着け、部屋の隅にある電話のようなものに手をかけた。

「……主よ、ラジエルです。……ええ、実は、……なのですが……はい、わかりました」

ラジエルは電話のようなものから離れこちらに戻ってきた。

「確認したところ許可ができました。ただし一定年齢までは能力制限を掛けさせてもらい、さらに代償が付きます。また、主にこの力を向けないようお願いします」

だいぶ図々しいお願いをしているなあ、俺。正直この要求が通るとは思ってなかったけど、口約束でいいのかな？

「わかりました。……転生時の容姿は決められますか？」

「はい、大丈夫です。どのような姿がよいですか？」

「ペルソナ3の主人公の姿がいいです」

「それは原作開始時で、ですか？」

「高校の時から老けないって感じで」

「わかりました。では転生内容の確認をいたします」

ラジエルはペンを取り何かを紙に書き、それを渡してきた。そこには転生内容が事細かに書かれていた。

一、女神転生およびそれに準ずるゲームでの主人公の能力の引き継ぎ
この結果あなたのLvは547となります。又、記憶や経験、
取得アイテムも引き継がれます。

二、特殊悪魔全書の搭載

この悪魔全書は通常と違い悪魔の召喚だけでなく、アイテム・
資産の貯蔵、ペルソナ・マガタマの設定、悪魔合体、アイテムの売
買等多数の機能を実装しています。ただしこの全書は物理的に破壊
された場合、最低でも三十分程使用不可になります。

三、容姿の変更

ペルソナ3の主人公の若々しい姿になります。又、魅力のパラ
メータが高いため男女問わず好印象を与えられます。

四、イメージによる補正

あなたの能力に関わるものにはあなたが持つイメージによる補

正が入ります。

五、能力の制限

これらの能力を未熟なうちに使うのは危険なため、経験・記憶・能力を15歳以降使用可能等の制限を掛けます。アイテムも一部の物は制限を掛けます。

六、代償

あなたがこの内容で転生した場合、一つ大きな不幸があなたに降りかかります。この不幸があなたの命を奪うことはありませんのでどうかご了承ください。また、この不幸は回避することが出来ません。

代償と制限の部分が気にはなるが他は概ね問題ないし、これでいいか。

「はい、確認しました」

「それではこちらの転生内容でよろしいでしょうか？」

「この内容でお願いします」

正直これ以上は無いんじゃないかと思えるほど好条件である。断る理由がない。

「そういえば一つ注意点があります」

「？　なんですか？」

「蘇生についてですが、悪魔ならともかく人間に使う場合死後三分以上経った者には効果がありませんし、死が確定した人間や寿命で死んだ人間は何をしても蘇生は出来ません。その点だけは伝えておこうかと。」

ラジエルがかなり重要な事をさらりと話す。流石に生死に関わる内容なので、ちゃんと聞いておくことにしよう。

「その場合、死んだ状態や死が確定したというのはどういう状態を指すんですか？」

「『心肺停止且つ呼吸が止まっている者』は死んでいると定義されますね。要は心肺停止から三分以内なら蘇生可能という訳です。死んでから三分以上経っている場合、死が確定して蘇生が不可能となります。まあ大昔に死んだ人間や自然的に死んだ人間は生き返らすことができない事と、三分で蘇生不可になる事を憶えておけば良いでしょう。それと、四肢などの欠損は死んでなければソーマで修復可能です」

つまり死んだら早く蘇生しないと手遅れになって、腕とかは無くなっても治せるってことか。結構何でもありだが、この辺りはちゃんと気を付けないと不味そうだ。

「では少し移動しますから、付いて来ててください」

そう言うラジエルは立ち上がり部屋の外に出た。俺はその後が続いて外に出て、ラジエルの背中を追った。途中、何人かの天使がラジエルを見て敬礼をしていた。やはり座天使の長というのは凄い事だ。

しばらく歩いて自分は先ほどまで宮殿のようなところに居たのだと初めて認識した。そして今は巨大な門の前に立っている。門の横には動きやすそうな鎧とフルフェイスタイプの兜を身につけ、剣を携えた赤い羽根の天使が門番の様に立っている。ラジエルはその門番となにやら話しているようだ。

「お勤めご苦労様です、アークエンジェル」

「はっ、ラジエル様、何かご用ですか？」

「転生者です。これから転生させるので門を開いてください」

「人間ですか……おいそこの人間」

「ん？」

「今回は災難だったな。本当なら酒の一杯でもおごりたいが俺にそんな権限は無いからな。次の人生は幸せに暮らせよ」

こいつはかなりいい奴らしい。狂信者じゃないってだけでこんなに変わるのか。途中凄い目で見てた天使とかいたからなあ。

そうこうしているうちに門が開かれた。中はよくわからない色で渦を巻いており、まさしくワープするためのものだと思感的にわかった。

「この門をくぐるとあなたは転生します。まあ今後何かあれば私が応対しますのでもう会えないと言うことは無いでしょうが、しばらくは会わないでしょう」

すぐに会うのだけは勘弁してもらいたい。ここに来ると言うことはつまり死んだと言うことで、俺はもう死にたくは無いからな。

「それと銭別代わりにこれを」

そう言ってラジエルは無骨な腕輪を渡してきた。

「これは一体？」

「気や魔力を抑える効果のある腕輪です。身分を隠すときなどに使ってください」

「……なんかラジエルには世話になりっぱなしな気がする。次にこれたら何か礼をしよう。」

「ありがとうございます。……それじゃ行ってきます」

「……ええ、良き第二の人生を」

そして俺は門をくぐった。

第2話 転生 修正版（後書き）

修正点：

- ・ 悪魔全書の機能に新項目を追加
- ・ 制限の部分を追加
- ・ 代償の部分を捕捉
- ・ 蘇生についての注意点を追加

制限について：何が言いたいかと言うと、チート展開は15歳まで待つて欲しいと言うことを伝えたかったんです。

第3話 誕生 修正版（前書き）

しばらくは書きためが有るので投稿頻度を高くします。

9 / 2 1、修正版に差し替えました。

第3話 誕生 修正版

目が覚めると俺は赤ん坊になっていた。ちょうど生まれた瞬間で産声を上げることしかできないが、何故か思考はすっきりとしておりじっくり物思いにふける事が出来た。俺の傍らには眼鏡を掛けた男性が立ち、ベッドにはポニーテールの美女が横になっていた。恐らく俺の両親だろう。

へその緒を切り、母親の横に寝かされる。母親は疲れたのかぐっすりと寝ている。俺も母親に倣って目を閉じ、寝始める。

映像が浮かんでくる。幾重にも重なりながら俺を卵の様に包みこんでいく。

それは記憶。

無数の人の記憶。

時を超え、荒廃した東京を生きる記憶。

管理された人生に反旗を翻した記憶。

創世に巻き込まれ、半人半魔となった記憶。

軍人として南極を調査した記憶。

一人の男のエゴを友と共に壊した記憶。

ある探偵と魂を取り替えた記憶。

都市に戦いを挑んだハッカーの記憶。

帝都の闇を払った少年の記憶。

電子世界の抗争と救済の記憶。

一つの儀式から数々の事件に巻き込まれる記憶。

噂が現実になり過去の自分と向き合う記憶。

死を超越し、礎となり続ける記憶。

TVの中の真相を己が目で確かめた記憶。

封鎖された東京を生き抜いた記憶。

友との縁で世界を変えた記憶。

悪魔を従えた半魔の子供達の記憶。

終わることのない戦いの記憶。記憶は感覚を伴って俺に浸食する。
無数に存在する記憶は姿を変え、人の形を取り俺に呼びかけてくる。

「「「「「お前は俺か？お前は誰だ？」「「「「「

俺は目を覚ました。何か恐ろしい夢を見た気がするが、どんな夢を見たのか思い出せない。寝た時と感触が違うから、ここは病院では無いと判断し周りを見る。今自分はベビーベッドの中に寝かされていた。当然だ、今は赤ん坊なのだから。畳のにおいがすることからこの部屋は和室なのだとわかり、現状周辺に危険は無いと判断すると、唐突に空腹感が襲ってきた。今は何時かと思い壁に掛けられた時計を見ると、今は朝の5時半だった。

（微妙な時間だな、親は起きているだろうか）

30分も経つと父親が起きてきた。俺が必死に空腹をアピールしたためか、父親はすぐに哺乳瓶を持ってきた。慣れない手つきで粉末ミルクを溶かす父親は、とても優しくそんな雰囲気を出していた。

「ほうら仁也、ミルクだぞ〜」

どうやら俺の名前は这个世界でも仁也らしい。まあ、別に名前を変えたかった訳じゃないしいいか。

俺がミルクを飲み終わると母親も起きてきた。まだ眠いのかしきりにあくびをしている。

「あなた、おはよう。……今日の仕事は何だったかしら」

「銀座のクラブの怪事件の調査だったかな。悪魔が関わっている可能性があるって」

「面倒くさいわね、どうしてこつも仕事が来るのかしら。産休取りたいわ」

「貧乏暇なし、退魔師なら尚更つてね。今週は後三件は仕事があるよ」

「全部あなた一人でやることはできないの？」

「報酬と信用を失ってもいいなら」

「……はあ、これじゃ息子とふれあう時間も無いじゃないの」

……此処は本当にネギまの世界か？なんかもっとハードな世界なんじゃ……

「まあまあ、麻帆良からの仕事だからすぐに終わるさ。後でたつぷり文句を言つてやろうよ」

「それもそうね」

良かった、此処はネギまの世界だ。どうにも両親は退魔師の仕事をしているらしい。

「さて、仁也を預けて仕事に行きましようか」

「待ち合わせは代々木公園に9時だよ」

「さっさと終わらせて仁也の服でも買いに行きましよう」

「了解」

そう言つて父は俺を抱き上げ、保育園に連れて行った。・・・と
りあえず無事に帰つてくることを祈ろう。

なんやかんやあつて早くも三年もの月日が経過した。その間俺は何度も不気味な夢を見た。朝になると思い出せないが、うなされて全身に汗をかいている事からおそらくは悪夢なのだろう。起きた時に手に変な感触が残っていたりもしたし、吐き気がしたこともあった。最近はいぶ頻度が少なくなっている……が、それでも月に一回はうなされていた。

「……まあ、マシになった方が」

最初の頃は酷いうなされようで、両親に心配を掛けたりもしていた。なんだかわからない恐怖感が俺の心を不安にさせる。恐ろしい感覚は日に日に弱くなっているのだが……

それと自分が妙に身体能力が高いと言うことが最近わかった。同世代の子供に比べてほぼ三倍程度の運動能力を持っているらしく、凄く体が軽い。制限が掛かっているはずなので、恐らくこれからさらに上がっていくだろうから気を付けないといけないな。

「仁也、おやつだぞ」

「今行きまーす」

父親に呼ばれたので居間に向かう。ちなみに我が家はすべて父が家事をしている。これは母が家事をするとういうわけが失敗するためだ。洗濯をすれば洗濯機から泡があふれ、料理をすれば黒い何かができる。掃除はできるが父の方が早くきれいになるのでこれも任せる。結果、父がすべての家事を行う事になっているのだ。

「今日のおやつはロールケーキだよ」

「あら、おいしそうね。これも手作り？」

「ああ、もちろん！」

この通り、父は大体の料理は作れてしまうのでうちは基本外食しない。したとしてもそれは父が疲れているかその店の味に興味がある時ぐらいだ。

「さあ、仁也もどんどん食べていいよ。まだおかわりはあるからね」

「美味しいわよ、仁也」

「うん、いただきます！」

両親の仕事が休みの時は大体こんな感じに過ごしている。たまに遊園地に行ったり、デパートに買い物に行ったりとごく普通の核家族の生活を送っている。結構頻繁に京都の方から親戚が来たりもするが、親戚の目的はほとんどが金策だけだった。

さて、ここまで徹底的に日常を見てきたがやはり此处は非日常の世界、非日常の側面を鑑みるとうちの両親は関東で結構名の知れた退魔師だと言ったことがわかった。なぜなら定期的に依頼が来るし、その依頼もかなり重要なものだったからだ。両親に直接会いに来る客は大体が藁にすぎる様な顔をしているし、その後入る報酬も大抵7桁を超えていた。

その客達は両親がどんな戦い方をするのかを教えてくれた。父・秋成は強力な魔力を用いた符術師、母・奏は銃とナイフで戦う元軍人。二人の仕事の成功率は80%を超えと言う。残りの20%は単独での失敗をあわせているからだそうで、つまり俺の両親はコンビで戦えば負け無しだと言うことだ。

二人の主な仕事は悪魔の殲滅。最近悪魔が多くなってきており、猫の手を借りるほど忙しいらしい。

これは間違いでなく、父の符術で猫又などの妖怪を使役している現状を指している。今も横で猫又が算盤片手に仕事をしている。猫又がスーツ着て書類を作るとかまずあり得ない光景だな。

「いや、仕事三つで残高の桁が一つ上がるとは今月も恐ろしいほどの利益率。旦那も姉御も金使わないからなあ。このままだと国家予算規模になるんじゃないかねえ」

猫又の又吉が呟いた。この猫又は父が呼び出すデスクワーク用の妖怪で、算盤が得意で帳簿の黒字が何よりも好きな変わった奴だ。ちなみに戦闘力は皆無である。

「坊ちゃんの方からも少しは使うよう言ってくださいな。坊ちゃんも欲しいものとかあるっしょ、メンコとかベーゴマとか」

「……それはだいぶ古いよ又吉。せめて人生ゲームぐらいじゃないと」

「あつしにや最近の遊びはわかりませんで」

今は1976年。近代的な遊びなぞあるはずもない。正直TVゲ

ームが懐かしい。……超合金は買ってもらったが。

「……そういつ又吉は何か欲しいものは無いの？」

「あつしは帳簿の黒字が見ればそれでじゅうぶんでさあ」

「恋人とかは？」

「それは言わねえ約束ですぜ、坊ちゃん」

ちなみに又吉は女（雌）である。口調が安定しないし割とでかいから男と間違われることが多いらしい。

「あつしは坊ちゃんが立派になるまで安心出来ませんよ」

「又吉、それはいいとこの世話係の人がよく言う台詞だよ。それじゃ婚期逃すよ」

「……坊ちゃんは辛口ですな」

「又吉を心配してるんだよ」

「何、いざとなったら坊ちゃんに嫁入りますよ」

「冗談、早くいい人見つけなよ」

「……坊ちゃんのいけず」

なんか聞き捨てならない台詞が聞こえた気がするがそんな事は無かったぜ。

「又吉、前の仕事の分の帳簿に間違いが……」

「む、旦那に呼ばれている。それでは坊ちゃん、また後で」

「うん、頑張つてね又吉」

俺は又吉を見送る。俺の中で又吉はすでに日常の一部になりつつある。俺はこんな日常が恐らく末永く続いていくと思った。

第3話 誕生 修正版（後書き）

修正点：

- ・両親の容姿設定を追加
- ・記憶・経験引き継ぎに制限がついた為、記憶の部分を夢に変更
- ・身体能力が制限に伴い少々低下
- ・親戚に設定を追加
- ・超合金の話を追加

第4話 召喚 修正版（前書き）

少し時間飛びすぎですかね？

9 / 21、修正版に差し替えました。

第4話 召喚 修正版

俺が生まれて今日で四年目だが、俺は今まで一度も能力を使おうとは考えなかった。正確には使う必要がなかったのだ。今のところ命の危険にさらされたこともなく、またさらされたとしても両親が全力で助けに来てくれるだろうから俺自身が力を持つ必要が無かったのだ。

しかし両親に教えられて、俺はどうにもチート級の魔力と気を将来的に手に入れるかも知れない事がわかった。このままだと極東最強の称号を奪いかねないので、俺は今のうちにラジエルにもらった腕輪を使うことにした。

だが、この腕輪は俺の悪魔全書の中に保管されているらしく、一度全書を起動しなければならぬらしい。ここに来てようやく能力を解放する理由が出来た訳だ。使い方とかいつの間にか頭にたたき込まれてたけど、正直設定とか面倒だから起動しなかったんだよね。

「さて、両親も仕事で居ないし早速呼び出してみるか」

ラジエルに因ってたたき込まれたとも言わべき全書の起動方法を思い出す。呼び出すという明確な意思を持ち、意識を集中して手元に現れる書の形をつつすらとイメージする。段々と形が現れ、次の瞬間その全容が見えた。

「……これが、俺の悪魔全書……」

出てきたのは厚さ10?ほどの辞典のような本。装飾はほとんどされていないがそれがかえって本に箔をつけている気がする。ちな

みに今この本はふよふよと宙に浮いている状態である。

「内容はどんなだ？」

まず表紙をめくる。するとそこには小さなスピーカーの様なものがある。触つてみると凹凸はなく、俺はそれを絵だと思った。しかし何故こんなものがあるんだ？

>…… 本体の起動を確認。ナビゲートシステム起動開始<

凄く機械的な台詞が飛んできた。まさかこれ本物のスピーカーで
すか？

>初めましてマイマスター。私は疑似人格内蔵型ナビゲートシステム
のスタンスと申します<

「ナビゲートシステム？」

>マスターが快適にこの全書を使用できるように造られたプログラ
ムのことです。機能の説明や設定などを行います<

プログラムにしては随分とフレンドリーでフランクだな。まあそ
んな事より本来の目的を優先しないと。

「じゃあ早速質問。転生前にラジエルから腕輪もらったんだけど、
今取り出せる？」

>はい、アイテムの出し入れ・使用に関しては一部を除いて制限が
かかっていません<

「じゃあ出し方教えてくれ」

> 取り出しの場合、目的のものをイメージしてどこに出したいかを考えそこに意識を集中し……<

「……結構面倒だな、もっと楽な方法は無いのか？」

> その場合は設定を変えて使いやすくするしかありませんね<

「……仕方ない、今度時間があるときでも設定をいじるか。とりあえず今回はその方法でいい」

> Yes , my master <

しばらくしてようやく手の中に腕輪が現れた。この間実に10分もかかっている。

(こりゃきつちりと設定しなくちゃ実戦で使えんな)

> 他に何かありますかマスター<

「とりあえずこの腕輪の名前」

> ……名前わからずに出したのですか？<

「仕方ないだろ、転生直前で聞ける雰囲気じゃなかったんだから」

今思えばあのときもつといろいろ聞いておくべきだったかな。

> 登録された名称にはフェイクリングとありますが、同様の物が後

五つあります<

なんか多いな……まあサービスみたいな物だろうし別に良いか。

「そうか。それと悪魔召喚はできるか？」

>召還制限のかかっている悪魔以外なら可能です<

今回の目的その2、俺の本領と呼べる悪魔召喚の練習だ。一体どこまで強い悪魔を召喚出来るのかを確認しておくことは生死につながる重大な内容だ。

「まずはどれほど強力な悪魔を呼べるか教えてくれ」

>最も強力な悪魔を呼ぶことが出来ます<

「……パードウン？」

>最も強力な悪魔を呼ぶことが出来ます<

「……具体的には何Lvくらい？」

>すべての経験値を換算した結果、495となります<

三桁半ばとか。俺がそこまで経験値稼いだのって主人公以外だと一体しか思い浮かばない。

「名前は？」

>魔神オーデインです<

やっぱりか。俺オーデインが大好きだったんだよ。何故かと聞かれると答えにくいけど、たぶんあの生き様が好きだったんだろう。ああ、無常って感じで。

「召還にかかるコストはいくらだ？」

>この全書は召還にコストが必要ありません<

「……マジで!？」

>マジです<

召還にコストが必要ないって、呼び出し放題かよ!いいのかよこんな緩い設定で!

「維持コストは？」

>必要ありません<

「……わーお」

>呆けないでください、マスター<

なんか今更だけど超便利アイテムだよこの本。召還コストどころか維持コストも必要ないとか……っかさっきから俺驚き過ぎじゃね？

>召還コストがないのはこの全書の機能、維持コストがないのはこの世界に満ちている魔力の作用です<

「なるほど……ちなみに呼び出した瞬間殺されるとかないだろうな」

>その点に関しましてはまったく問題ありません<

「？　どういうことだ？」

>一度仲魔にした悪魔はあなたに対する忠誠度および好感度がMA
Xになっています<

「……そんなとこまで完璧とはな。反逆の心配はしなくてもいいの
か」

>そんな不完全なものと与えるわけがない、とのこと<

「まあ何にしても一度召還を経験しておいた方がいいか。召還方法
はどうすればいいんだ？」

>悪魔の名前を呼んで召還するものと悪魔の絵に触れて召還するもの
があります。今回は前者が良いかと思われ<

さて、いよいよ俺の仲魔がこの世界に足を踏み入れる。恐らく頑
張れば世界征服ぐらいできるほどの力を持つて。まあそんな気はさ
らさら無いけど。

俺は手を全書に向け深呼吸をして、ゆっくりと呟いた。

「……オーデイン！」

瞬間、俺の目の前に光の柱が現れた。約二十分程眩しく輝いてい

たそれは段々とその輝きを失い、その中に居た存在の姿を示す。

そこに居たのは一人の男。二本の角のある兜を被り、全身を隠すほど丈の長い純白のマントを翻す。その手にはルーンの刻まれた銀色の槍を持ち、マントの下は腰布一枚着けているだけ。だがそれは彼に鎧など必要ないことを顕著に表している。左目に眼帯をし、その艶やかな髪は胸のあたりまで伸びていた。その身から溢れ出る威圧感のかのやハウエが赤子同然に見えるほどだった。そして男は俺の前で片膝を立て俺に跪いていた。

「隻眼の高座、魔神オーディン、召還に従い参上した次第・・・今後ともよろしくお願いします、我が主」

その声は俺を極限まで安心させ、同時に背筋を震わせた。なんと凛々しい声だろう。

「俺は本田仁也、お前の主だ。まず一つ命令。その呼び方は他人行儀な気がするから却下。呼称の変更を要求する」

「わかりました。……仁也殿でよろしいか？」

「うむ、それでいい。で、お前に質問だが、お前は人に化ける事は可能か？」

「はい、問題ありません。あなたの望む姿になりましょう」

「なら第二の命令。若手のエリートビジネスマンに見える姿になれ」

「わかりました、仁也殿」

オーデインはそう言うつと魔力を込め、オールバックのスーツ姿になった。どこと無く漂う高貴な雰囲気はまるで名家の次期当主のように見える。これなら富豪として紹介しても問題なさそうだ。

「今後俺の許可が出るまでその姿で居ること。できるだけ富豪らしく振る舞え。それとその姿でこの家の隣の土地を買ってこい。金は俺が全額出す。」

「……何が目的で？」

「近所づきあいとしてなら外で話しても不審には思われんだろう。そうして俺の両親の信用を得る作戦だ」

「なるほど……そうすると従者が居た方が富豪らしく見えますね。侍従用の悪魔を召還した方が良いでしょう」

「そうだな、考えておく。それと外で会うときは呼び方を変えてくれ」

「近所づきあいで年下に殿は無いですからね。わかりました」

それにしても恐ろしいほどの魔力がオーデインの体から吹き上がっている。俺は将来的にこれを超えるのかと考えるとどうなるのか想像したくない。

「っと、忘れてた。スタンス、今俺の意思で自由に出来る金は日本円でいくらくらいだ」

>この全書に登録されているものでは約十三億五千万円です<

「えっ」

十三億って何それ怖い。

> どうかしましたかマスター？<

「……いや、何でもない。よしオーデイン、お前は大体2カ月後に引越してこい」

「はっ、了解しました」

「よし、もう戻ってていいぞ。作戦の準備まで後最低1ヶ月かかるからな」

「では、失礼します」

そう言つてオーデインは消えた。用が無くなったから全書に戻つたのだらう。

「スタンス、今から全書の設定の変更を始めるぞ」

>？ 暇が出来たらじゃないんですか？<

「今出来たら、暇」

>……なるほど<

今のうちにしっかりと設定しておいた方が後々便利だしな。せめてもう少し早く出せるようにしておかないと不味いだらう。この後俺は地獄の様に長い作業に終始振り回された。今後の事を考えると

絶対必要だとわかっているのだが、面倒なものは面倒である。

結局この日、俺は寝ることが出来なかった。

第4話 召喚 修正版（後書き）

フェイクリングには能力を抑え一般魔法使いに近づける効果があります。また悪魔の魔力を人間のものに近づける機能もあります。

修正点：

- ・能力制限等の変更に伴う文章の変更
- ・使い方を憶えていた設定をより詳しく描写
- ・フェイクリングの個数変更
- ・悪魔召喚に掛かる時間の大幅増加

第5話 日常 修正版（前書き）

今回ちょっと意味深です。

9 / 2 1、修正版に差し替えました。

第5話 日常 修正版

初の全書起動から三ヶ月経った。あの後設定をいじったためアイテムは脳内に目録が出るようになり、そこから選んで取り出せる様になった。しかし一部のアイテムと武器はまだ使用制限が掛かっていて、取り出すことができなかった。全書の中に制限の確認という項目が有ったので確認してみたところ、おびただしい数の制限が目録に表れた。そのほとんどが年齢制限：15歳となっており、俺が転生したときにもらった能力は15歳までほとんど使えないらしい。解除方法が隠されている物もあり、面倒くさい事この上ない。

悪魔召喚は脳内に目録が出るようにしたのと全書の検索機能を使えるようにし、なおかつ検索した悪魔のページを自動で開いてくれる機能を見つけたので有効にしておいたのだが、どうにも召喚速度はもう少し年齢を重ねないと速くならないようだ。それとなんか武器の項目が酷く多かったのでそれぞれ区分けしておくことにした。これで実戦でも全書の機能が使いやすくなったと思う……まだ武器出せないけど。

それとスタンスに聞いてみた所、もし今この全書が物理的に破壊された場合、修復が終了して再使用出来るようにする為には1時間もかかるとのこと。破壊されたらその戦闘中は使えないと考えた方が良さそうだ。

隣に越して来た（来させた）オーディンは両親に気に入られ、最近では両親が仕事に行っているときはここに預けられるようになった。

「今日も勉強ですか、仁也殿」

「両親が少しスパルタでね、このドリルを今日中に終わらせないといけないんだ」

「少し手伝いましょうか、仁也様」

「大丈夫だよシルキー、こんなの後一時間もあれば十分だよ」

「坊、美味しい煎餅があるが食うか？」

「ドリル終わったら食べるよ、ビフロンス」

「本日はいつまでこちらにいらっしゃいますか、仁也様」

「いつも通り7時までだよ、メルコム」

さて、この間オーディンは従者用の悪魔が欲しいと言っていたので、俺はそれらしく見える数体の悪魔を召喚した。メイドの妖精シルキー、執事の墮天使ビフロンスに帳簿係の墮天使メルコム、それと上の会話にはいないがコックの墮天使ニスロクの四体だ。みんなそこまで強くないため、人間に化ければばれにくいのだ。……それでも普通の魔法使い程度にはまず負けないだろうが。

ちなみにメイドのシルキーは妙に俺の世話を焼くし、ビフロンスはことあるごとに菓子を勧めてくる。メルコムは何故か小遣いを渡してくるし、ニスロクは俺が食べたいと言うと地獄からでも食材を取ってくる。これが好感度・忠誠度MAXの力か。

「ヒトナリ、今夜は何食べたいデス力？」

「辛口タイカレー」

「OKデース、一番いい材料買ってきマース」

ニスロクは口調が特徴的で、似非アメリカンって感じで話しかけてくる。しかしこいつはアメリカンな要素なんてなかったはずだが……これもイメージ補正の効果か？

隣に越してきた珍集団は予想外な早さでうちの両親に気に入られた。特にニスロクとシルキーが最も早く気に入られ、父はニスロクと共に料理を作り、母はシルキーに手際のいい掃除の仕方を教えてもらっている。こういうところから潤滑な人間関係ができるのだと実感した出来事である。

「仁也殿、今後我々は何をすれば？」

「6年後までは確定した大きなイベントは無いから、基本はここで近所づきあいをしていくことになるね。何か不満でもあるの？」

「……正直暇でして……」

「じゃあ株でもやってみるか？五百万までなら好きに使っていいぞ」

「株式ですか、それはいい暇つぶしになりそうです。……しかし仁也殿、口調が安定しませんね」

「ああ、転生の時に何か有ったのかな？」

俺は何故かはわからないが口調が安定していないのだ。転生の弊害なのかも知れない。それでも今日はだいぶマシな方なのだが。

「よし、ドリル終わり！さて何かしようかな」

「坊、そろそろ終わると思ってチョコ買ってきたぞ、食え」

「ありがとう、ビフロンス」

「……ビフロンス、出費は報告してくださいね」

「ああ、チョコは315円じゃったぞ」

「少し高いの買ってきたんですね。仁也様、私にも少し分けてくださいまし」

「別にいいよ、はい」

何この仲良し家族（？）、かなり和むんですけど。

「ただいまデース、今日は最高のタイカレー作りマース。」

「ニスロク、今日の出費はいくらでしたか？」

「買いだめしたけど特売だったから材料全部あわせて2480円デース」

「ふむ、グッジョブです」

ああ、これが日常か。おかしいな、こいつら全員悪魔のはずなのに凄く和気藹々としている。

この時俺はふと世界にはとても重要で深刻な問題を思い出した。別に今動く必要は無いが、今のうちに予防線を張っておくのも後が楽でいいかもしれない。面倒だけど。

「なあオーデイン、悪魔は酸素が無くても動くことはできるか？」

「ええ、魔力さえあれば問題無いでしょう。……どうかしたのですか？」

「いやなに、少し火星を調べて欲しいだけだ」

「……一体何をするんですか？」

「現状では何とも言えないが、何か将来に悪影響を及ぼしそうなものがある気がするんだ。……頼むぞ」

「では何体かの悪魔を連れて転移、探索をしてきます。シルキー、私は少し出張に出たと仁也殿のご両親に言っておいてくれ」

「わかりましたわ」

俺は適当そうな悪魔を選んで召還した。そこまで強くはないが作業をするのに良さそうな悪魔を選んでおいた。ちゃんと転移魔法が使える奴も選んである。

「悪魔を20体程召還した。全部連れて行くといい」

「……仁也殿、私が居ない時に出かける場合は護衛を付けてくださいね」

「ああ、わかった」

「行ってきます、仁也殿。吉報をお待ちください」

そう言つてオーデイン達は火星へと転移していった。何かのフラグが立った気がするが気にしない。

火星は魔法世界が存在するための依り代だ。もしかしたら魔法世界消滅を防ぐための何かがあるかも知れない。もしあるのなら今のうちに対処しておいて後顧の憂いを断つことができるだろうし、無ければ無いでまた他の対策を練ればいい。今後の事を考えると火星の調査はほぼ必須だろう。

ちなみにニスロクの作ったタイカレーは絶品だった。……オーデインを調査に出すのをもっと後にすれば良かったかも知れない。

そんな事があつてからさらに二カ月が経過した。今のところ特に怪しいところは無いらしく、今回の調査で何も無いとわかったら火星には何も無い事になるらしい。オーデインの報告があるまで何をしようかと思つていた俺に又吉が声をかけてきた。

「どうかしたの又吉？」

「坊ちゃん坊ちゃん、旅行に行くならどこか行きたいところありますかい？」

「へ？旅行？行くの？」

「旦那に何かしたいこと無いか聞いたんでさあ。で旅行に行きたいと」

旅行か……どこに行くか次第だよな。とりあえずどこに行くか聞かないと。

「又吉、旅行にはどこに行くんだい？」

「国内ならどこでもいいそうなんで、坊ちゃんにどこ行きたいか聞いたんですが」

範囲広いなおい、それじゃまだほとんど決まっていけないものじゃないか。まあ、好きに行きたいところを指定できると考えればいいか。さて、日本で俺が行きたい場所というと……京都、青森、東京くらいか。

まず古都京都、ここに行くメリットは関西呪術協会に干渉できる可能性があることだ。今のうちにリョウメンスクナノカミを消滅させておくことも可能だし、著名な妖怪がごろごろしている一種の特異点だ。しかしリョウメンスクナを今倒すと物語に狂いが出るだろうし、妖怪もわざわざ出向く程の必要性は感じないのでここは却下。

次に青森だが強力な魔力のたまり場である恐山が最大のメリット。強大な霊的存在が居るわけではないが、この恐山に行けば霊的汚染の有無で少しは現状の確認になる。もし霊的な汚れがあったならそれは何者かの陰謀の可能性があるからで、その何者かはこちらに干渉してくるかも知れない。だがこれは完全な推測でしか無く、空振りする可能性の方がよっぽど高いため此処も却下。

最後に東京だが、ここは俺がこの世界に転生した影響が恐ろしい

事になっており、メガテンの東京になっているのだ。俺が転生してからどうやら世界的に召還がしやすくなっているらしいのだが、東京はその中でも異常で、呼ばれていないのに現れるという直視したくない状況となっている。さすがに霊格の高い神をまつる神社等には現れないが他の場所には結構頻繁に出てくる、というのが現在の東京の実態だ。幸い魔力の多い場所を優先して召還されるため、基本魔法使いや退魔師の近くに現れるので魔法がばれるという事態にはなっていない。

ここでの最大のメリットは将門塚にいけると言うことだ。全書の召還制限および使用制限がかかっているものの中に、将門塚を参拝し将門公に許しを得るのが制限解除の条件となっているものがいくつかある。今回の件で行ければかなりお得な話だ。デメリットはいきなり現れた悪魔に襲われる可能性があることだが、その辺の雑魚なら両親が倒してくれるだろうし、密かに悪魔を護衛に付けるのも良い。となるとここが一番リスクが少なく見返りも大きい。ここに決めよう。

「又吉、僕東京に行って将門塚っていうのを見たいな」

「なるほど、歴史の勉強になるしいいかも知れませんが。旦那に提案してみませう」

「本当！ありがとうございます！」

「ぼ、坊ちゃん！いきなり抱きつくのは止めてくださいえ！」

「う、ごめん又吉」

（い、いきなりだと心の準備が出来取りませんよ坊ちゃん……）

少し子供みたいに振る舞ったけど抱きつくのはやり過ぎだったか。しかし又吉って以外に胸あるなあ・・・と、いかんいかん。今後はこんなこと無いよう気を付けよう。

「そ、それじゃあ旦那のところ行つてきます！」

「あ、行つてらっしゃい」

まあたぶんこのまま東京行きに決定するだろう。うちの両親、少し甘いし欲が無いから俺の行きたい場所があつたらそっち優先するだろうし。

俺はそんな事を考え後に自分がどんな目に遭うのかなど予想もしていなかった。

その夜、TVのニュースで火星に動く何かが居ると特集していた気がするが、多分気のせいだろう。

第5話 日常 修正版（後書き）

又吉が動揺してましたが、まだ仁也はこう言った事には疎いです。

……まあ、好意に敏感な四歳児はちょっと嫌ですけど。

修正点：

- ・ 各種制限内容の増加に関連する説明の増加
- ・ 全書破壊の説明
- ・ 実力設定の変更
- ・ 引継に制限が掛かった事による文章の変更
- ・ オーデインの護衛についての進言を追加
- ・ 最後の三行の消去

第6話 接触 修正版（前書き）

もうPV一万突破……だと？

今回からしばらくは続き物です。

9/21、修正版に差し替えました。

第6話 接触 修正版

結局旅行の行き先は東京になった。両親に行きたいところは無いかと聞いてみたが、両親曰く

「仁也が行きたいんだったらそこでいいじゃない」

「社会勉強にもなるしいいじゃないか」

とのことだった。……本当に欲のない人達だな。これじゃまだまだ貯金は増え続けるだろう。

そんな話を話し合った次の日には東京に向かっていた。俺は姿の見えなくすることの出来る悪魔を護衛として召喚して付いてこさせたが、両親がすぐに気づいて消してしまった。……気配に敏感なのは仕事上仕方ないし良いことだから別に良いのだが、護衛無しで大丈夫だろうか？

スケジュールは昼に将門塚に行った後デパートに行き、夕食を食べてから帰る事になっている。しかしこれじゃ旅行というよりドライブと言ったものに近い気がするのだが……まあ別にいいか。

「にしても仁也、なんで将門塚が見たいんだ？ぶっちゃけあれただの石だぞ」

「本で読んで気になったから」

「……お前の考え方は四歳児らしくないな。まあ別にいいが」

「それだけ仁也が賢いってことよ。これは親として喜ぶべき事よ。いいじゃない、人と違っても」

「それだけじゃない気がするが……」

「気にしない気にしない」

……まあこんなにしつかりした四歳児は他に居ないと思うけど。つか居て欲しくない。俺はあまり調子の良くない我が家の愛車に揺られながらそんなたわいもない事を考えていた。

それからしばらく車に揺られて、ようやく将門塚に到着した。そこは荘厳な雰囲気にも包まれた場所だった。周辺には蛙の置物がいくつか置いてあり、中央の塚からは少しではあるものの魔力が発生している。此処に朝廷に背いた英雄が眠っていると考えたと震えが来るほどだった。俺は震える心をなだめて将門塚に向かって念話を試みた。

（平将門様！）

——……小童よ、我に何か用か——

（私は本田仁也と申します。実は私は……）

——……なんだ、お主か。言わずともよい。大体の事情はわかっておる——

（……わかっているとは？）

——ヤハウエの部下から話を聞いておる。こちらに一人転生者が来るとな。お主が今日此処に来たのは大方我に助力を求めるためだろ
う——

（その通りでございます。どうかこの私に貴方様の力をお貸しください）

——我は元よりそのつもりよ。まったく、制限など設ける必要など無いと言つに——

（ありがとうございます、将門様！）

——お主に力を貸すのは良いが、我を失望させるなよ——

（はい！）

そうして将門の気配は消えた。オーデインほどではないが恐ろしい威圧感だった。その証拠に手がじつとりと汗ばみ、体が小刻みに震えている。隣に居る両親はいきなり現れまたいきなり消えた威圧感を不審に思っているのか周辺を警戒している。両親は俺を守るためか俺を挟む様に立っていた。

「ねえお父さん、もうデパートに行こうよ」

「ん？……ああそうだな、そろそろ行こうか」

「仁也、お昼ご飯は何が食べたい？」

「……オムライスかな」

「それじゃあ、オムライスのあるレストランを探さない」と

そう言っただけで両親は俺を車に押し込んだ。まるで何かから守るように押し込まれた俺は少しの違和感と不可解な行動についての疑問を持ったが、すぐにさっきの護衛の事で神経質になっているだけだろうと頭の片隅へと追いやった。

将門塚から移動してデパートに着いた頃には正午を過ぎていた。

そろそろお昼時で店はどこも混み合うことがたやすく予想できるが、マイペースで割と面倒臭がりな両親はそいつはごめんとばかりに子供服売り場に駆け込んだ。

「お父さん、なんでご飯食べないの？」

「いいか仁也、今はどこのお店も混み合っているから人が少なくなつた頃に行くんだ。そっちの方が待ち時間を少なくできるからね」

「まあ大体2時過ぎぐらいには食べられると思うわよ」

そう言っただけで両親は俺を2時間ほど着せ替え人形にしているながら周囲を警戒していた。その間俺は空腹に耐えながらよくこんな事をしながら集中力が2時間も持つなとあきれながら感心していた。

「この色が良さそうだな」

「あら、それだったらこっちの方が……」

(どうしてもいいから早く飯をくれえ……)

結局そこで二十万ほど買い込んだ。子供服に使う値段じゃねえと心の底から思った。

「さて、そろそろ食べに行くか」

「おなか空いた……」

「好きなだけ食べなさい、仁也」

それから十数分歩きようやくお目当ての店に着いた。小さなこぢんまりとした店で、来ている客はランチタイムが過ぎたためか少なかった。もし満腹ゲージみたいなものがあつたなら恐らくこの瞬間俺のゲージは全力でマイナス方向に振り切れていただろう。

この店は言えば何でも出してくれるらしいので食べたいと思ったものを全部頼んだ。どんどん運ばれてくる料理は一つ一つがすべて出来たてのものばかりで時間を忘れて食べ続けた。1時間ほどしてようやく最後の注文が来て、それを食べ終わると俺はようやく通常思考に戻った。両親が言うにはまるで冬眠前の熊の様な食っぷりだったそうだ。少し恥ずかしかったので今後は気を付けよう。

「おーい、お勘定」

「……あ、はい！あ、ありがとうございました」

店員はあきれていたらしく父に呼ばれると飛び跳ねるようにお辞儀をした。まあ、大食い大会でもないのにこれだけ食べばそうなるだろう。

「しめて281578円になります」

「じゃあ、はい。釣り銭はいらないから」

父は290000円を手渡した。ここまで来ると金銭感覚が狂ってるんじゃないかと不安になるよ。・・・もう狂ってるか。

「え、ちょ、お客様!？」

「結構美味しかったし、また来たいわね」

「そうだな、今度暇が出来たらまた来ようか」

これだけの食材を食いきっておいでまた来たりしたら店としてはかなり迷惑だろう。すでに後ろの方では

「え、また来るの」「嘘だと言ってくれ……」「あたしこのバイト止めるわ」「み、三日分の食材が……」「う、腕が……腕があああ!」「気を確かに料理長!」「ええい、奴らの胃は化け物か!」「落ち着いてください店長!」等と凄く力オスな状況になっている。……もし次来たら自重しよう。

俺はそんな力オスな店内から逃げ出すように外に出た。朝は晴れていた空にどんよりとした黒っぽい雲がかかっていて、日光が途切れたせいか少し寒く感じた。

少し強い風が不穏な雰囲気をもたらしてきたのか、何か恐ろしいものが居るような気分になり辺りを見渡す。周辺に不審なものが無いと確認はしたが、辺りに人が見当たらない。幹線道路に面したこの店の前で通行人も車も見当たらないと言うこの状況は少々異常だ。そ

して俺はこの雰囲気はどこかで知っている様な気がした。

店から出てきた両親もこの不穏な雰囲気を感じたのか、二人とも目が仕事用だ。父が俺を抱き上げ、少し急いで駐車場に向かう。車に乗り込み、慌ただしくエンジンを吹かしている両親の顔は少々焦っているように見える。俺はこの違和感は何か、何が原因かを必死に考えていた。

「仁也、少し飛ばすから舌嚙まないように気をつけてな」

父の静かな声が聞こえ、すぐに車が急激な加速を始めた。ダッシュボードの中身がガチャガチャと鳴りだし、カーブのたびに五月蠅く騒いでいる。ふとスピードメーターを見ると時速100?近くに なっていた。サイドミラーに目をやるとほぼ同じ速度で追ってくる車が三台。幹線道路を走っているのに、何故か全く他の車とすれ違う事が無い。

父は橋を目指して車を走らせている。追ってくる車は距離を変えずに迫って来て居たが、しばらくすると銃を取り出してこちらに向かって撃ちだした。

「くそっ、こんなところで仕掛けてくるなんて連中何考えてるんだ!?!」

「ご丁寧にこの辺り一帯、人払いの術式が展開されているわ。一体どこの誰かしら……」

そう言いながら手持ちの拳銃で相手の車を狙う母。タイヤを狙うも、防弾処理が施されていて余り効果を出せていない。

「とにかく橋を越えよう。橋を越えれば麻帆良の領地だし、いくら何でも関東魔法協会と事は起こさないだろうし」

「麻帆良に借りを作る事になるわね……また低報酬でこき使われちゃうのかしら」

「まあ、今はここを切り抜ける事が最優先だし」

両親はこの後のことを考えて状況を分析している。まあこれまでの実績を考えたら大丈夫だろう。今まで二人がそろって仕事をしたときは100%成功しているのだから、たかが銃を持った十数人の集団に遅れを取るはずが無いだろうし。俺も何かやばい状況だと思いはするが、両親さえ居れば問題ないと思っている。この二人は強い。そう信じているから。

幹線道路を時速100?オーバーで走っている車に、それを狙う三台の車。四台の車の銃撃戦は唐突に終わりを告げた。車のタイヤに銃弾が撃ち込まれ、走れなくなったのだ。父は仕方なく車の速度を落とし、端に寄せるように車を止めた。追ってきていた車はうちの車の周囲に距離をおいて止まった。恐らく牽制のつもりだろう。父は一枚の符を発動し、又吉を召喚した。

「又吉、仁也を頼むぞ。護衛を置くが合図したら仁也を抱えて走り出せ」

「……わかりやした、旦那。死なねえでくだせえよ」

又吉は父に向かってそう言う俺を力の限り抱きしめた。両親が外に出ると三台の車に乗っていた奴らも車から出てきた。ほとんどが四十代ほどで全員が全員黒一色の狩衣を纏っている。その中から

一際若い少年が一人出てきた。

年の頃はおおよそ十代前半、背は150?程でだいぶ痩せている。なかなか整った顔立ちをしているが目は血走り大きく見開いている。憤怒とも悲壮とも思える表情からは殺意が渦巻いているようにすら見え、その視線はこちらを射貫いている。少年はゆっくりと口を開けて、しっかりとこう言った。

「……殺してやるぞ、化け物夫婦」

第6話 接触 修正版（後書き）

もうすぐ初めての戦闘です！

……でも仁也はまだ戦いませんよ。

修正点：

- ・ 護衛についての会話を追加
- ・ 記憶関係の変更に伴う文章の変更
- ・ 警戒している描写を追加
- ・ 店の描写を追加
- ・ 食材の量の変更
- ・ カーチェイスを銃撃戦に変更
- ・ 待ち伏せ設定の消去

第7話 邪教 修正版（前書き）

9 / 21、修正版に差し替えました。

第7話 邪教 修正版

「……殺してやるぞ、化け物夫婦」

他の者より一歩前にいる少年が両親に向かってそういった。人の親を捕まえていきなり化け物扱いとはいいい度胸だな。何様だこいつ。

「……人をいきなり化け物呼ばわりはどうかと思うぞ少年」

「化け物を化け物と言って何が悪いか！」

「……教育のなっていない子供ねえ。こういうのが一番面倒くさいのよ」

「黙れ化け物！我ら『神言宗』が貴様らのような化け物の血を許すと思うな！」

神言宗？化け物の血？状況がよくわからない……こういうときはわかりそうな人に聞いてみよう。

「又吉、神言宗ってなに？化け物の血って？」

「……神言宗ってのは少しやばい宗教団体でさあ。神の言葉と書いて神言宗と読むそう。あいつらの崇める神が異端と見なしたものを排除して最終的にその神がいいと言ったものだけの素晴らしい世界を作ろうとか言ってる狂った奴らでして、少し前に旦那達が依頼を受けてぶっ潰したはずですぜ。血のことは……実は旦那も姉御も人外との混血なんすよ。旦那が五尾の仙弧の息子で、姉御は狗族の捨て子でして、奴らが言ってるのはこのことですよ」

又吉はそう言って口を閉じた。ってことは何か、俺には仙弧と狗族の血が流れてるのか！？……今後差別された場合を考えておかないと厳しいな。しかし両親に人外的特徴は見当たらないのは何故だ？

「……又吉、それ本当？」

「坊ちゃんに嘘は言いません。あの二人外見は普通の人間そのものだからハーフと言っても信じてもらえない事が多いですけど、その分内面が化け物じみてるからすぐわかりますよ」

「内面って？」

「旦那は仙弧譲りの膨大な魔力を、姉御は狗族の圧倒的運動神経をそれぞれ持つてるんでさあ」

「……魔力って何？」

「へ……まさか旦那達、坊ちゃんには魔法の事とか教えてない？やばい、後でお仕置きされるかも……」

あまり秘匿を考えていなかったので少し釘を刺しておく。軽く震える又吉を無視して外の光景を見る。神言宗の連中が数十体の鬼を出し、それに対抗するために父が何体かの悪魔を召喚している。右の悪魔は一つ目一本足で手に金槌を持っている。左の奴は蒼い鎧を身につけ槍を持った武人のような姿をしている。

「モムノフは後ろの二人の護衛、イッポングダラは奏と一緒に前衛を頼む。後ろの子供は息子だから、特に気を付けてくれ」

「わかったぜご主人」

「任せろ、そうそれは私に」

「奏、少し時間を稼いでくれ。でかい奴を出す」

「わかったわ、どのくらいかかるかしら？」

「二十分で用意できる」

「楽勝！」

母の一言で戦闘が始まった。母は拳銃と大型ナイフを持って敵陣に突っ込む。驚異的なスピードで召還された鬼を吹っ飛ばしている。あの早さでは鬼の鈍重な動きで攻撃が当たるはずもない。その端ではイツポングタラが鬼を金槌で攻撃している。後ろで控えていた神言宗の符術師が術を放ち、自分達が召喚した鬼ごと攻撃している。その後ろでは他の術師が追加の鬼を召還している。・・・これで二十分も持つのだろうか？

そう思っていた時期が俺にもありました。すでに五十体近く鬼を倒しているが未だに母は息も上がっていない。むしろ悪魔のイツポングタラの方が疲れているように見える。しかし鬼達の数はこれだけ倒しても最初より増えていると言っただから恐ろしい。

途中俺も援護しようと悪魔全書を出そうと試みたが、初戦闘ということで心が昂ぶっているのか上手く集中出来ず呼び出すことが出来なかった。

約束の二十分まで後一分となった。ようやく召喚陣を完成させたいらしい父は召喚の邪魔をさせないためもう一体モムノフを召還した。父は詠唱を始める。

「千の雷束ねあげ 魔の理知る大なる獣よ 盟約に従い我が敵を滅ぼす一助となれ

現れよ 妖獣又エ！」

詠唱が終わると共に光の柱が現れる。その中に居たのは一体の獣。猿の頭にたてがみを生やし、虎の手足が大地を踏みしめ、尾の蛇は足下の鬼に威嚇をしている。その獣は5mほどの大きさだった。

「蹴散らせ、又エよ！」

「フオオオオオオオオオオオ！」

耳が痛くなるほどの咆哮の後、無数の雷が鬼達に落ちていく。雷を食らった鬼は炭化し、その場でぱらぱらと崩れ出す。又エが腕をふるい数体の鬼をただの肉塊に変えた。圧倒的な差だった。ものの数分もせずに鬼達はただの血と肉の山になり、鬼を又エがなぎ払っている間に神言宗のほとんどが母によって殺されていた。

「さて、残ったのはあなただけよ、坊や」

母が余裕を持って言う。これほど圧倒的な差があれば余裕になるのも仕方がない気がする。

「くそ、こんな奴まで呼び出すとは……」

「おとなしく罰を受ければ殺しはしないが、どうする？」

あくまで降伏を呼びかける父に対し、少年はその口を大きく歪めながらこう言った。

「……ハハハハハ、何を勝った気でいる！我らには偉大なる主上がついているのだぞ！」

少年は懷から折れた長剣を引つ張り出した。相当古い物らしく、錆びきつて黒ずんでいる。

「お前達は幸せだぞ？主上がわざわざ手にかける事なぞ普通はあり得んのだからな！」

「っ、まさか！」

「おお、偉大なる我らが主上よ、我らの命を触媒とし、罪深き異端の化け物に鉄槌を！」

そう言つて少年は長剣を腹に突き刺した。剣が血を吸つて鈍く光る。それを見てしまった俺は胃の中身がひっくり返るような感覚を覚えた。

「な、何をするつもりなの！？」

「離れる奏！こいつ自分を生け贄に悪魔を呼ぶつもりだ！恐らくあの剣に縁のある悪魔が現れるぞ！」

母が何が起こるのかわからず動揺しているのを父が説明する。

「今更気づいてももう遅い！この時のためにご神体の剣を持つてきたのだ！クヒヤヒヤヒヤ、主上よ、我が敵にその力をお見せください！我が主上、バフォメット様ああ！」

そのとき、橋に衝撃が走った。震度5程度の揺れの中、巨大な物体が少年の目の前に落下していた。煙が落下地点から立ち上り、その場は緊張に包まれた。

「バフォメット様ああ！その化け物の一家を皆殺しにしてください！！」

男が叫んだとき、又エの首が落ちた。ゴトンという音の後又エの巨体が前のめりに倒れ込み、その動きによって起きた風で煙が消えた。

「……あ？おかしいなあ、主上はどこだあ？」

少年は煙の中に居た存在が予想と違う事に呆然としていた。

煙の中に立っていたのは髑髏頭の闘牛士だった。緑色の力ポータに身を包み、血のように赤い布を翻している。手に持つ長剣は中程で折れれば少年が腹に刺した物とまったく同じだった。その顔に表情は無く、ただ強大な殺意と殺気をまき散らしているだけだった。

「私はマタドール。魔人マタドール。血と我が剣の盟約に因りて召喚に応じた。……どうしたサマナー」

「違う、お前じゃない！俺は我が主上、バフォメット様を呼んだのだっ！」

「と、言われても……私の剣を使えば縁によって私が呼ばれるのは当然だと思うが？」

さも当然と言いたげに首をかしげるマタドールはまるで戯けて遊んで居るように見えるが、俺はその何も無い目を怖いと感じた。

「馬鹿な、ばかなバカナ馬鹿なあ！」

「第一あんな者を呼んでもどうしようもなかったがな。又エはお前の神様よりも強いぞ？」

「嘘だ……う……そ………」

段々と小さくなっていく声に連動するように少年の体が傾き、ついにドシャリと言う音を立てながら倒れた。それきり彼は動かなくなった。

「……逝ったか。まあ、呼び出されたのだから役目は果たさねばなるまい」

そう言っマタドールは両親を見た。圧倒的な殺意が車の中に居る俺にも届く。怖い、こわい、コワイ。段々冷静な思考が出来なくなっていく。

「確かこの一家を皆殺しにするのだったか。なかなか出来るようだし、楽しませてもらおうか」

マタドールの一言を受け、すぐに両親は戦闘態勢に移った。イツポングダラが殴りかかるが、一瞬ではばらに切り裂かれる。父は数十体の悪魔を召喚して攻撃させるが、あまりにも実力が違うのか

触れることも出来ずにただの肉片へと変わっていく。唯一対抗しているのが母だが、それもほとんど防戦一方に近い。

「どうしたどうした、守るだけでは勝負にならんぞ！」

「くっ、秋成、こいつ、凄く、強いわ！」

「見ればわかる！今援護する！」

父は符を使い大きな火球を作り出す。その大きさは人の胴体ほどで、神言宗の符術師のものとは比べものにならないほど大きかった。

「喰らえええええ！」

父が火球を打ち出す。母は命中直前に避け、マタドールの顔に命中する。爆音が夜の空に響き、煙が晴れたとき見えたのは力ポーターが焦げたことを気にするマタドールだった。その余裕が醸し出されている姿に俺は恐怖した。瞬間、頭の中が真っ白になった。

「又吉、逃げろ！こいつは不味い！麻帆良に応援を頼むんだ！」

「わ、わかりやした！」

又吉は俺を抱いて一気に走り出した。両親が時間を稼いでいる間に麻帆良に行き、応援をよこしてもらったために。俺は何かに取り憑かれたようにガクガクと震えている。頭が上手く働かない、何も考えられない。又吉が俺を見て心配そうな顔をしていたが、すぐに仕事用の顔に戻った。

「むう、逃がしてしまうと面倒だな。さっさと片付けた方がいいか

「？」

「そんな事させるわけ無いでしょ！」

追撃を試みるマタドールの前に両親が立ちふさがる。

「お前は危険過ぎる……ここで確実に止める！」

汝反逆者の烙印を受けし者 刃を交え神をも殺す凶鳥よ 盟約に従い我が敵を滅ぼす一助となれ

現れよ 凶鳥カマソツソ！」

現れたのは2mほどのコウモリだった。翼の端に手があり、フツクのような剣を持っている。二足歩行する姿は良くあるコウモリ怪人と言った感じだった。

「食い止めるぞ、カマソツソ！」

「オレサマ、オマエ、キリキザム！」

「……まだまだ楽しめそうだな」

そこで戦場は見えなくなった。

第7話 邪教 修正版（後書き）

あっさり過ぎるかな？

もうちょっとだけ続くんじゃ

なんか凄い勢いで評価が…… あばばば

修正点：

- ・主人公の心情描写の追加
- ・車を使わなくなったことによる文章の変更
- ・状況描写の追加

第8話 覚醒 修正版（前書き）

9 / 21、修正版に差し替えました。

第8話 覚醒 修正版

走り出した又吉は驚異的な速さで屋根の上を駆け抜けている。戦闘用では無いにしても悪魔は悪魔、通常ではあり得ない速度にもすぐに到達し、麻帆良の街の外郭まで後数km程となった。すでにマタドールが召喚されて三十分程経ったが、奴がこちらに来ないところを見るとまだ両親は生きているようだ。又吉がこの速度で走り続ければ麻帆良まで後五分といったところか。

「坊ちゃん、気持ち悪かったりしませんか？もつと速度緩めますか？」

「ただ、大丈夫だよ又吉、もつと速くてもいいよ」

俺はカタカタと小刻みに震えている。少しは和らいだが、未だにマタドールから受けた殺気に恐怖している。

「なら良いっすけど……」

「……ねえ又吉、お父さん達大丈夫かな？」

静かに又吉に聞いてみる。又吉は一瞬顔を険しくしたが、すぐに優しく笑った。

「大丈夫っすよ、規格外二人に化け物級の悪魔を召喚したんですから」

又吉はそう言って口を閉ざした。又吉も恐らく気づいているだろう、あの悪魔もまた規格外の存在だと。そしてその実力はあの二人

を同時に相手にしても問題無く殺せる程だと。俺が悪魔全書を使えば勝てるかも知れないが、今は心が乱れすぎて全書を出すこともできない。恐怖に飲まれたせいか体も上手く動かず、その上俺の最強の武器が使えない。今の俺はただの足手まといだ。

そうこう考えているうちに麻帆良との境界線の橋が目の前まで迫っていた。やはり人外、恐ろしい脚力である。又吉は安心したように顔を綻ばせ、心なしか速度を少し落とした。そしてそれは俺たちの命を救う結果に繋がった。

なぜなら、橋が目の前で横に切断されたからだ。中程まで走っていた又吉は急ブレーキをかけ、橋の断裂部の直前で停止した。対岸までの距離と下の川に落ちている橋の一部分から、その部分を切り取ったということがわかる。又吉は周辺の警戒を始めていたが、俺は空に浮かぶ赤い布を見てしまった。

「あ、あ、アアアアアアアアア」

壊れてしまったかのように声を上げる俺を気にせず、少しずつ降りてくる影。又吉が俺の声に驚きその影を見る。

「ご機嫌いかがかな、少年……っと、どうにも最悪の気分らしいな」

空に浮かぶ満月を背に、髑髏の鬨牛士はあざ笑うかのようにこちらを見ている。ゆっくりと高度を下げこちらに近づいてくるそれは、まるで死そのものに見えた。俺は恐怖と混乱で齒をガチガチと鳴らすだけだった。

「君のご両親は少々やっかいだね、君を人質にした方が効率が良さそうなのだよ。何怖がることはない、死は誰にでも平等に訪れるも

ノだ。遅いか早いかの違いだけだ。両親と一緒になら寂しくはあるまい？」

マタドールはただ淡々と喋っている、それだけのことだ。なのに全身から冷や汗が吹き出てくる。小刻みな震えは収まらず、逃げようと足が動かない。体が冷たくなるような錯覚が脳裏を走り、思考を手放さないようにするので精一杯だ。俺はその場でペタンと座り込んでしまった。

「一緒に来てくれるかな？君さえいればご両親はもう苦しまなくて済むんだ。ご両親のことを考えるなら私と行く方が良いと思うが？」

マタドールが手を出す。俺は反射的にその手を取りそうになるが、又吉が俺の前に立ちふさがった。

「坊ちゃんは渡しません、絶対に！」

「……猫又よ、貴様では私に傷一つつけられぬとわかって言っているのか？」

「こちとらそういう命令を受けてるんでね。引くわけにはいかんのだよ」

哀れむような視線を送るマタドールの言葉に、又吉は自分に言い聞かせるように啖呵を切る。

「面倒な……まあいい。貴様を殺してから連れて行けばいいか」

「その必要はないぞ？」

瞬間、又吉が俺を抱えて後ろに飛び退いた。マタドールが何かを感じて剣を抜いたとき、空から弾丸と火球の雨が降り注いだ。空を見上げると両親がカマソツソに乗りながら攻撃している。

「又吉！そいつから距離を取り過ぎるな！こいつ転移魔法も使うぞ！」

「わかりやしたぜ、旦那！」

降りてきた両親はすでに満身創痍、カマソツソに至っては足が一本無い。しかしその目は諦める気には見えず、何か勝機は無いか必死に探しているようだった。

「……いきなり攻撃とは礼儀がなっていないな」

「貴様が礼節を持って対応したら考えよう」

父は一瞬で三十体ほどの鬼を召喚した。一体一体強さがばらついてはいるが、それでもこの数は脅威になり得る。

「その消耗でこの数とは……少々見くびっていたかな」

「お前達、総攻撃だ！骨も残さず殲滅しろ！」

「オレサマ、オマエ、ユルサナイ！グルルルル！」

カマソツソを中心に全員で仕掛ける。大量の鬼の攻撃はほとんど効かないがそれでも動きを制限するぐらいの事はできる。そうして動きが止まったところに両親が集中砲火を仕掛け、カマソツソが斬

りかかる。マタドールも動きを制限され、段々と余裕が無くなってきているように見える。その姿に恐怖が少し和らぎ、何とか全書を出せないかと考えていると、

「……どうやら全力を出さねばならぬらしいな。まあ、幸いクライマックスも近くなってきたようだし、宴もここまでか」

そう言つてマタドールは奇妙な構えを取った。右腕を大きく前に出し、左腕を体に這わせるように腰に着ける。一見居合抜きのようなその構えは少し滑稽で、殺意と気を剣に込めているようにも見えた。

「！ 伏せろ！」

「受けよ

『デスバウンド』！」

マタドールはそう叫び、左腕の剣で空を切った。次の瞬間、伏せなかった悪魔達が無数の肉片となり、ほとんどの悪魔が殺された。俺の顔にベシヤリと悪魔達の血が付着し、俺は気を失いそうになった。残ったのは数体の鬼と両親、俺と又吉だけだった。一番近くにいたカマソツソはもはや原型が存在しない。

「ここに来ての大技ですって!？」

「不味い、あれが連射されたら……」

「話などしていいのか？」

マタドールは両親の後ろに回り込み斬りかかった。間一髪で母が

反応し、どうにかはじいたもののマタドールは既に『デスバウンド』の体制に入っていた。

「ぐ、しまっ」

「油断大敵と言う奴だよ」

マタドールが放った『デスバウンド』に反応し、避けられないとわかると防御の体制に変えるも、その斬撃は母の左腕を落とし、父に致命傷を負わせた。父はそのまま崩れ落ち、仰向けに倒れた。

「がっ……ごぶっ」

「あなた！」

「よそ見とは余裕だな」

マタドールはさらに追い打ちをかける。父の方に注意が向いていた母が反応できる訳もなく、母もまた致命傷を負った。

「ぐっ、ああ……」

「そろそろ終わりかね。さて、子供の方を……」

マタドールは両親に背を向け、俺を見る。あまりの恐怖に胃の中の物を全て吐き出しそうになる。

「……まだ……死んでないわよっ！」

「！」

ナイフを構え、マタドールに飛びかかる母。後ろでは父が上体を起こし、呪符を取り出して何かを呟いているように見える。

「ちい、少し静かにしている！『デスバウンド』！」

放たれる斬撃破を気で強化したナイフで受け止め、自身の突撃の勢いを殺さずに流す。斬撃破は両親には当たらず、マタドールは特技を撃った為に隙が出来ていた。千載一遇のチャンスだ。

「死ねえええええええ！」

マタドールの体にナイフが突き刺さり、その後すぐに母は後ろに飛び退く。左腕から血を流し続け、胴からは内臓が見えている。早く病院に行かなければならない危険な状態だ。

「ナイフを刺したぐらいで何を……何故体が動かんのだ!？」

「ナイフの柄に結界用の呪符を巻き付けておいたのよ……さようなら」

母がそう言うと、マタドールの上に影が差した。異変に気づいたマタドールが上を見ると、空から底面が尖った巨大な岩が落ちてきていた。その大きさ、優に十数メートルはあるだろう。

「移山、召喚符、急々、如、律令……潰……れろ！」

父が最後の力を振り絞りそう呟く。マタドールがナイフを抜こうとするが時既に遅く、巨岩がマタドールの上に落ち、巨大な音を立てる。橋が音を立てて崩れ落ち、後には巨岩の落下で削れた橋と死

にかけの両親、俺と又吉と少数の鬼だけが残った。父は恐らくあと数分以内に傷を塞がなければ死んでしまうだろう。

俺は両親の勝利を感じて少し心が落ち着いたのか、悪魔全書を出すことが出来た。いきなり出てきた分厚い本を見て又吉が驚くが無視する。すぐに両親の治療をする為に全書の力を使う。悪魔を召喚するのは少々時間が掛かるため、今回は回復用のアイテムを取り出すことにした。今俺が取り出す事が出来る傷を治すアイテムで最も効果が高い宝玉を四つほど出し、さらに念の為に道返玉も五つ出しておく。反魂香や宝玉輪、ソーマなどが使えればもっと良かったのだが。

それらのアイテムを持って両親に駆け寄る。橋に空いた大穴を避けて両親の側に行き、宝玉を使おうとする。

「……ッ！退きなさい仁也！」

いきなり母親が俺を押して吹っ飛ばす。その衝撃で俺は体勢を崩しアイテムを落としてしまう。一体何をするのかと両親の方を見ると……両親の前には先ほど倒したはずのマタドールが立っていた。

「やれやれ、危なかったよ。ギリギリで体をずらさなければ死んでいただろうが……どうにも私は運が良いらしい」

右肩が少し挟れつつもマタドールはまだ健在らしく、俺の恐怖が再発する。体の震えが収まらず、視線をあいつから外すことができない。両親はマタドールを睨み付けるものの、既に限界なのか動く事も声を出すこともできないようだった。

「……もはや虫の息か、情けない。いや、良く持ったと賞賛するべ

きか？」

余裕だと言わんばかりに両親に向かって話しかけるマタドール。一頻り両親に言いたいことを言えたからか、少し満足そうにこちらを見る。虚無的なその目が俺を貫き、俺は恐怖によって足が硬直する。

「さて、君達はもう放置するだけで死ぬだろうから、先に息子の方をやらせてもらおうか」

マタドールがこちらを向き、俺に向かって剣を構える。俺は向けられた殺意に体が動かず、思考が停止する。又吉の体がそんな俺の前に立ち、数体の鬼も俺を守るように立ち上がる。

「……君たちの主はもう死ぬというのに、まだ抗うのかね？」

「それが仕事でしてね」

「美しい仕事意識だな、中々好みだよ。しかし私も暇ではないのでね……死ぬ」

戦場が動いた。マタドールはまた『デスバウンド』を放ち、鬼達がただの肉塊になる。又吉も致命傷を受け、大量の血を吐いた。マタドールは間髪入れず又吉の胸に剣を突き刺す。

「……終わりだな。小僧を渡せば見逃してやったのに」

「……これも作戦ですぜ？」

刺された又吉がマタドールに抱きつく。マタドールは何とかして

振り解こうとするが、又吉は離さない。

「な、何を……」

「坊ちゃん、強く生きるんですぜ。又吉は貴方に会えて幸せでした」

その言葉を聞いた瞬間、俺は我に返り又吉が何をしようとしているのか気づいた。気づいてしまった。

「やめて、やめてよ又吉！」

「……一緒に死のうや、魔人さん？」

又吉が眩しく輝き、次の瞬間大爆発を起こした。昔又吉に教えてもらった。自分は戦闘用じゃないけどそれでもいざというときの為に自爆技を覚えていると。つまりこれは……

「嘘だよな、又吉……すぐに出てくるよね？」

結果のわかつている問い。長い沈黙。爆心地にはボロボロの又吉の体と右腕を失ったマタドールが横たわっていた。又吉は自分を犠牲にして俺を助けてくれたのだ。

「……又吉………そうだお父さんとお母さんを……」

一刻も早く両親を治療しなければと思い、両親の方を向く。近づこうとしたその時、マタドールがゆらりと立ち上がった。頭蓋骨に大きな亀裂が入っているが、そんな事は関係ないと剣を取る。

「そんな、なんで……」

「ハア……ハア……猫又め、やってくれる！だが、詰めが甘かったな！」

マタドールが又吉の遺体を蹴り、下の川に落とした。右腕を失いながらも闘牛士はなお剣を振るい、先ほどより一層強大な恐怖と殺意を振りまきながらこちらを見る。

「う……ウワアアアアアアアアアア！！！」

我を失い、無数の魔法石を展開する。丁度手に収まるように転送し、そのまま魔力を込めて投げつける。それらの魔法石は命中すると込められた魔法として発現し、マタドールを襲う。

「な、ぬお、グウウウウウウウウ！」

無数の魔法石が弾け、極彩色の光を放つ。さすがのマタドールも疲弊しているところに大量の魔法はきついらしく、防御態勢を取り苦悶の声を上げている。

「馬鹿な、こんな子供がこんな……」

俺の予想外の反撃に驚いているようで、一方的に攻撃されている。俺は今が好機とさらに投げ続ける。

「ウオオオオオオオオオオオ！」

「……その本が原因か！図に乗るなよ少年！」

一瞬の隙を見抜き、マタドールが剣を投擲する。それは俺の全書

を狙ったことだったが、偶然にも手からこぼしたハンドグレネードも全書と一緒に貫いた。同時に貫通したためにグレネードが爆発し、全書がバラバラになる。不味い、悪魔全書は破壊されたら一時間は使えなくなってしまう！

「しまっ……がっ！」

爆発に紛れてマタドールの腕が伸びてくる。骨だけの細い指がギリギリと俺の首を締め付ける。

「ぐっ……ぎい……」

「よくもここまで手こずらせてくれた物だ……だが、ここまでだよ少年！」

マタドールの細い指が食い込み、頭に血が上らない。段々と思考が追いつかなくなっていく、数分後俺は意識を手放した。

暖かな物に包まれている様な感触を感じ、俺は目を覚ました。そこは転生前に見たラジエルの部屋で、俺はそのソファに眠らされていたらしかった。

「お久しぶりです、仁也様。ここに来られるのは四年ぶりですかね」

「……ラジエル、俺は死んだんですか？」

今思っていることを率直に言う。ラジエルはただ首を横に振った。

「貴方は死んではいません。ただ死にかけています。もしこのままならば確実に死ぬでしょう」

ラジエルはただそれだけを言っただけこちらに背を向け、すぐに振り向いた。

「しかし貴方を死なせはしない。今ここで私が貴方に力を与えるましよう」

「力……？そちらから制限を掛けておいて何故？」

それは不自然過ぎる話だった。余りにもあり得ない話だ。何故今になってわざわざ制限を外す？しかも自分が掛けた制限を、期限を待たずしてだ。

「……簡単な事ですよ、私は今回のこの戦闘を望んでいない。故に主に逆らい貴方の制限を外そうとしているのです」

それは神への裏切り、それも本来はあり得ない大天使の反逆を意味し、この天使はさりと口にした。

「！？何を言っているんです、なんで貴方がそんな事を……」

「今回のこの一件は一部の反人間派天使が貴方の運命を書き換えた事に因って起こりました。ならば私は責任者としてけじめを着けるべきでしょう。そして今私に出来る唯一の事がこれなのです。貴方の能力制限を外し貴方に力を与えること、それしか出来ないのです」

ラジエルは涙を流しながらそう言った。そこに一切の偽りは無く、彼の謝罪の意思がひしひしと伝わってきた。

「恐らく主は激怒するでしょうが、その辺りは私が何とかします。ですから今はその事は気にせず、どうか貴方自身のことをお考えください」

そう言ってラジエルは手元から22枚のカードを取り出した。

「今回貴方に開放される力は『ペルソナ』です。貴方のペルソナは召喚器や特殊な環境等の条件が無くとも使用できます。詳しいことは後で全書を確認してください。顕現させるには意識を集中して『ペルソナ』と言えば大丈夫です。また今回は緊急時ですので一時的に肉体を強化し、恐怖を和らげておきます」

ラジエルは早口でペルソナ等の説明をして、カードを俺の前に差し出した。

「このカードの中から一枚だけお取りください。それが貴方のペルソナを決定します」

俺は右から三番目のカードを取り、絵柄を見る。そこには何も描かれておらず、ただ空白があるだけだった。ブランクカードでも引いてしまったか？

「……はい、貴方に初期ペルソナを装備させました。あちらの扉から現世へと戻ってください」

「速っ！いくら何でも速すぎるだろ、せめて何のアルカナぐらい……」

「申し訳ありませんが、こちらにも急いで件の天使達の処罰等を決め

なくてはいけないのです。本当はもつとちゃんとした説明をしたいのですが、全然時間が足りないんです」

「わ、わかりました」

とにかく速くとまくし立てるラジエルの必死な姿から、恐らく本当に大変なんだろう。俺はそう思ってラジエルの指した扉を通って進んだ。最後に見えたのはラジエルが「例の件だが……」とどこかに連絡している姿だった。

ミシミシと言う首元からの音で俺は目が覚めた。目を覚ますとそこには俺の首を絞めるマタドールと致命傷を負った両親。状況は何も変わっていないはずなのに、首が痛くない。

「何だ？急に堅く……」

俺を掴むマタドールの腕がミシミシと悲鳴を上げている。これがラジエルの言った肉体の一時的強化の効果らしく、身体能力や肉体強度が上がっているようだ。俺はマタドールの指を掴み、強引に開く。

「な、何い！？」

マタドールから距離を取る。そこで少し体が重くなるが、これだけ距離を取れば問題無いだろう。俺は少し意識を集中させる。

「……『ペルソナ』……！」

一言の言葉と共に俺の分身がその姿を現す。頭蓋を模したような仮面を被り、黒いコートを羽織っている。手に持っている剣はまるで長大なパン切りナイフのようで、その周囲には八つの棺桶が鎖に繋がれ浮いている。それはペルソナ3の看板的ペルソナ、死神タナトスの姿だった。

「な、これは一体!？」

マタドールはタナトスの登場で驚いているらしく、全く動かない俺はこの瞬間を見逃さず、今頭の中に浮かんたタナトスの使えそうな技を放つ。

「『メギドラ』あ!」

瞬間、視界が白く染まり爆発を起こした。爆心地に居るのはもちろんマタドールで、何とか直撃を避けはしたものの左腕を失ったようだ。俺は間髪入れずに走り出す。

「ウワアアアアアアアア!」

ただ突っ込む。ここが恐らく最後のチャンスだと思い、全力で走り抜け、ただ奴の頭に拳を打ち込む。そんな単純な攻撃だが、既に限界を迎えていたマタドールには避けられなかったようだ。ガシャンという音と共に、頭部が碎け、それにつられる様に体が粉末状に変化する。

「勝った……のか? いやそれより速く父さんと母さんを」

恐らく倒しただろうと判断し、今度こそ両親を回復させるために駆け寄る。先ほど落とした道返玉と宝玉を拾い、両親に使う。が、

全く反応が無い。

「あ、あれ、おかしいな？何で……」

再度使用するも、やはり反応が無い。この時、頭の中にラジエルの言葉が浮かぶ。

『死後三分以上経った者には効果がありません』

「あ、うあ、アアアアアアアア！！！！！！！」

現状を理解し、月に向かって吠える。もはやどうにもならない事を理解した俺に、ペルソナの負荷が全身に襲いかかり意識を失う。最後に憶えているのはどこからかきた人達がこちらに向かってくる光景だった。

第8話 覚醒 修正版（後書き）

両親リタイア&仁也ペルソナ覚醒です。

今回はもう少し明るくなっているはずです。

修正点：

- ・位置・距離設定の変更に伴う文章の変更
- ・状況描写の追加
- ・主人公の心情描写の追加
- ・主人公の態度変更による文章の変更
- ・戦闘展開の変更
- ・両親の死の経緯を変更、及びそれに伴う文章の変更
- ・ペルソナの発動までの展開の変更、及びそれに伴う文章の変更
- ・ペルソナの詳細描写の追加

第9話 麻帆良 修正版（前書き）

ようやく原作キャラ登場です！

9 / 2 1、修正版に差し替えました。

第9話 麻帆良 修正版

目を覚ましたとき、俺は見知らぬ場所に眠らされていた……全裸で。

「……」

良くわからないこの状況を認識しつつ、両親のことを思い出す。何故か涙は出ず、ただ悔しさが身を焦がし、体を震わす。どうやら俺は少し冷たい人間らしかった。

悔しさを落ち着け周辺を確認する。何故全裸なのかは保留するとして、あのときの状況からここは麻帆良の敷地内だろう。流石にそんな状況の子供を置いていくような事は無いと思う。周囲を見渡すと和風の寝室と言った所で、近くに碁盤と将棋盤が置いてある。……なんで寝室にあるんだろう？

「おや、起きておったか」

不意に戸が開き、誰かに話しかけられた。声のした方向を向くと不思議な姿の男性を見つけた。後頭部の伸びたその姿はあまりにも特徴的で、一度見両親に仕事を依頼していた記憶がある。

「初めましてじゃな少年、良ければ名前を教えてくださいませんか？」

「……そういう貴方は近衛近右衛門さんじゃありませんか？」

俺の発言に近右衛門と呼ばれた男性は怪訝そうに顔をしかめた。

「……はて、わし自分の名前を名乗ったかのう？」

「両親に仕事を依頼したことがありますよね？」

「おや、憶えておったのか。……何とも賢い子じやのう」

そう言うのと近右衛門氏は部屋の外に出ていった。外で何かを操作する音がしたので何か機械を使ったんだと思う。たぶん電話をしているのだろっ、時々声が聞こえる。

「……じゃから……ああ、本人から……うむ、それで頼む」

ガチャリという音の後、近右衛門氏が部屋に戻ってきた。たぶん通話の相手は部下か病院、または警察だろう。

「失礼、少々電話せねばならん事があつての。……今回の事で少し聞きたい事があるのじゃが」

「大体の事で良ければ」

「……あそこで何が起こったのじゃ？少し詳しく教えてくれるとありがたい」

「……家族で日帰りの旅行に言ったんです。将門塚を見て、デパートに行つて。昼食を食べてお店を出たら何か雰囲気が変わ、両親は車に乗って早く帰ろうとしたんです。けど、うちの車を追ってくる車が来て、銃でこつちを狙ってくるんです。父は麻帆良に行けば安心だと麻帆良の方に車を走らせたのですが、途中でタイヤを撃たれました」

「町中で銃撃戦じゃと？一体誰がそんな事を」

近右衛門氏は興味と不可解さの混じったような表情でこちらを見ている。

「その人達は自分達を神言宗と名乗っていました。神の言葉で神言宗だそうです。一度父に壊滅まで追い込まれたはずですが、残党が両親が混血だからと襲ってきたんです。両親は数の差を埋めるほどの戦いをしていましたし、何か凄い悪魔を召喚していました。……確か又エだったかな」

又エの名前を聞いた瞬間、近右衛門氏は驚きからか目を大きく見開いた。……又エってそこまで驚くほどの悪魔か？

「又エじゃと！？しかも神言宗の残党とは……しかしそれだけではあそこで何をしていたかの説明になつとらんぞい」

「……又エを出した後は一方的でした。しかし敵の最後の一人が切り札を使っただんです。それは剣で、それと自分を生け贄に主上を呼ぶとか言っていました。でもそれは偽物で、彼が思っていたモノとは違う悪魔が出てきたんです」

「違う悪魔じゃと？」

眉の辺りをぴくりと動かして聞いてくる。正直もう少し落ち着いてるイメージがあつたのだが……まだ若いからか？よくわからんな

「彼が言っていたのでたぶん間違いありません。彼はその悪魔に僕たちを殺せと言って死にました。悪魔は契約は果たさなきゃいけないと言って僕たちに襲いかかってきました。又エは一瞬で殺されて、

他の召喚した悪魔もやられていきました。このままでは不味いと思つたのか、父は非戦闘用の猫又に命令して僕を逃がしました」

「馬鹿な、あの又エを一瞬で！？……その悪魔の名前はわかるのか？」

「悪魔は魔人マタドールと名乗っていました。……逃げ出した後、猫又が僕を抱えて全力で走りました。しばらくして麻帆良の街が見えて、最後の橋を渡ろうとしたらその橋が切られました」

「なっ！？」

橋を切られたという発言を聞いておもむろに立ち上がる。……いやだからもう少し落ち着こうぜ？

「マタドールが橋を切って落としたんです。両親も僕たちに追いついてマタドールと戦いましたが、結果はあの通りです」

「……その流れだと君を守るモノはいなくなってしまったようじゃが、どうやって生き延びたのじゃ」

「……猫又が、僕を守るために、自爆をしたんです。その自爆でこれまでの両親の攻撃で疲弊していた奴は死にました」

「……なるほどのう」

一部改竄してあるが、子供の攻撃で倒れたというよりはよっぽど信憑性があるはずだ。何故ああいう所で力が使えなかったのか、もう少し冷静で居ればと後悔の念が後から後から沸いてくる。

「……大体の事情はわかった。もし良ければ君の世話をこちらで見よう。どうかの？」

「……確かにこちらの方がセキュリティは高そうですね。身元引受人と相談してみます」

「む、そんな人がおるのかね」

「隣に住んでる人達で、両親にも許可は取っておきましたから問題は無いです」

両親もそんな事を時々オーディンに言っていたから、嘘は言っていないぞ、嘘は。ただ事実を少し膨らませて表現を曖昧にしてるだけだ。

「うむ、わかった。それではその近くまで送って行ってやろう。子供一人では遠いからの」

「お願いします。ところで、一つ聞きたいのですが……」

「何かね？」

さて、ずっと気になっていたことを聞いてみよう。

「……おいくつですか？職業は？」

「ああ、この口調だからかよく言われるが52じゃ。教員をやっておる。肩書きは……次期学園長じゃ」

五十代で既にぬらりひょんとはこの仁也の目をもってしても見抜

けなんだ。というか自分で次期学園長を名乗るのはだいぶ厚かましい気が……もしかしてもう決まってる？

「はあ。そういえば服がないのですが」

「おっと、忘れておったわい。今用意するから少し待ってくれんか」

こうして俺はようやく全裸の状態から脱却し、オーディン達の住む家へと向かった。……何故裸だったかはもう気にしない事にする。体に違和感とかなかったし。

家に着いた俺を出迎えてのは焼け落ちた我が家だった。なんか放火されたらしいが、恐らく神言宗の奴らのせいだろう。幸い通帳と印鑑はわかりにくい場所の鉄製金庫に入れられていたので燃えても盗まれてもいない。ふと気になって通帳をめくると、最後の残高が十七億八千万……稼ぎすぎじゃないか？つーか現場検証終わったのかここ？

この家の惨状を見た近右衛門教員は気を遣ってくれたのか、「明後日2時にここに来る。今日はゆっくりするといい」と言って帰って行った。……しかし今日の宿も確認せずに行くのはどうかと思う。

俺はオーディン達がいる隣の家の門を開いて中に入る。玄関扉の前に立ちゆつくりとソックをすると疲れ切った顔のシルキーが出てきた。シルキーは俺の顔を見ると驚愕し、俺に抱きついてきた。

「仁也様！一体どこにいらっしゃったのですか！家が燃やされた上に日帰りのはずなのに帰って来なくて……心配していたのですよ！」

「ごめんシルキー、その事は後で話すから、とりあえず中に入ろう」

「ええ、わかりましたわ！皆さん、仁也様が……………」

シルキーは素早く家に入っていた。恐らく俺の帰還を皆に伝えているんだろう。俺はゆっくりと玄関を潜り、静かな足取りで部屋に向かった。

「おお、おおお、坊、よう帰ってきた、よう帰ってきたな！」

「お帰りなさいませ、仁也様！あなた様の安否が確認出来ずこのメルコム、不甲斐なさで身を削る思いでしたよ！」

「Oh、ヒトナリ帰ってきたデース！こんなに嬉しいこと他にありません！」

「仁也殿、ご無事で何よりです」

仲魔達が周りを取り囲むように抱きついてくる。…………とりあえず二スロク、包丁は離そうよ。

「ごめんみんな、心配かけて」

「とにかく仁也様！どうして昨日帰ってこなかったのかしつかりと説明してください！」

「ああ、実は…………」

この後しつかりと全部説明した。別に仲魔に隠すようなことは無

いし、ちゃんと説明しておかないと納得しなそうな雰囲気を出されては説明しない訳にはいかない。」

「……そんな事が……」

「……心中、お察します」

「そういえば何でうちが焼け落ちてるの？」

俺はふと思った疑問をシルキーにぶつけてみた。

「買い物の帰りにふと気づくと、通りに人がほとんど居なくなってます。何かおかしいと思って早足で帰ったのですが、そこで黒い狩衣を着た男達が放火をしましたの！余りの状況に私久々に激怒しまして、その男達を八つ裂きにしてしまいましたわ！」

「わしらも何人かを死んだ方が良くと思える拷問に掛けてやったわ！全く、わざわざ認識阻害の結界まで張っておったぞ！」

憤然とした感じで怒るオーディン以外の仲魔達。そのオーディンは肩身が狭そうにしている。

「なんでオーディンはそんなに元気が無いの？」

「私が帰ってきたときにはもう全て終わってしまってます……」

「ああ……そういえば、ちょっと連絡事項が……」

「連絡……ですか？」

「僕たちはここを離れ、麻帆良に移住します。今後の事を考えると麻帆良の方が便利だし、もうこの地に居る必要は……無くなったから」

「……」

悲しさと寂しさが入り交じった視線をこちらに向ける仲魔達。……そりゃあ俺だって嫌だけど、仕方ないと思うのだから。

「……わかりました。こちらの家は引き払うと言つことですか？」

「はい。あちらに土地を用意してもらい、そこに屋敷を作ります」

「屋敷……ですか？」

「ええ、幸いあちらは土地が少々余り気味ですし、いわゆる魔法的要塞を築こうかと。これから少し家族を増やすならもう少し大きい方がいいと思いますし」

「家族？」

「……一緒に生活するなら、たとえ悪魔でも家族でしょ？」

「……！」

この言葉を聞いた途端、シルキー達は泣き出した。見た感じ感涙といった感じだが、悪魔に涙を流させるとは……恐るべし好感度・忠誠度MAX。

「それに……居候もできるかも知れないしな」

どうにも最後の一言は彼らには聞こえなかったようだ。……俺はこの一件で心に決めた。自分に来ることをしよう。失敗しても何度でも挑戦する。それにはまず自分の力量を確認しないとな。

もう、後悔なんてしたくないから

第9話 麻帆良 修正版（後書き）

ちよつと学園長を驚かせ過ぎですかね？

でも子供がこんな事淡々と言えば驚くと思いましたので。

あとしばらく更新速度を落とす予定です。次回更新は三日後、
22
日の予定です。

最後の一言はいわゆるフラグです。

修正点：

- ・ 状況描写の追加
- ・ 両親の遺体の状態の変更に伴う文章の変更
- ・ 戦闘展開の変更に伴う文章の変更
- ・ 仲魔の行動に付いての捕捉の追加

第10話 変転（前書き）

今回独自捏造設定が出てきますので、

原作主義の方はご注意ください。

第10話 変転

『仲魔は家族』宣言の後、俺はオーデインの火星調査報告を聞いた。今回は今までと違い大きな発見があったのだと言う。

それは、火星に人口の物と思われる洞窟とその中にあった一本の『楔』。洞窟は機械で調べてもわからないほどの強力な隠蔽が成されており、僅かな魔力の流れから偶然そこを発見出来たらしい。中には2m程のやや機械的な尖塔のような形状の物体があったそうで、機械的かつ古めかしい石製のコントロールパネルさえ存在したとのこと。

このパネルを操作して調べた結果、この物体は魔法世界が火星を依り代とするための楔の機能を持ち、この楔が魔力を放出し続ける事で魔法世界に現実世界と同じように魔力が存在していること、この楔によって魔法世界が存在しており、この楔の魔力がなくなると楔の機能が停止し魔法世界が崩壊すること、この楔はよほどの事が無ければ後数千年は稼働し続けること等がわかった、現在は楔の近くに悪魔を数体残して観測している、以上がオーデインの調査報告である。

恐ろしく原作から離れた感じがするが、この世界はこうなっていると考えて割り切るしかないと思う。原作を重視しすぎて原作に無い事で慌てていてはしょうがないし。今のところ問題は無いようだし、放置でいいと思うが……6年後に起こる事を考えると樂觀視はできない。とりあえず観測用の悪魔はそのままにオーデインには日常生活に戻っていいと言っておいた。保護者役がいないと不都合だからな。

翌日、親戚を集めて簡易的な葬式を執り行つた。近右衛門教員が既に用意してくれていたのですぐに執り行えたが、親戚は両親の遺産をどうするか考えていなかった。最終的に俺の元に残ったのは焼けた家と遺産の三割程度だけだった。この一件で俺は何故か少し振り切れた様で、悲しさが少し薄れた気がする。

さらに翌日、近右衛門教員が指定の場所で待っていた。仲魔達の自己紹介に少し驚いた顔をしている。まあ普通の家庭に料理人とかはいないわな。

「この度は彼を保護していただき誠にありがとうございます。私はガグラ・フロフォズル、ただの成り上がりです。家の者を代表してお礼申し上げます」

オーディンは深々とお辞儀した。ちなみにこの名前はそのままオーディンでは少し不味いのではと思ったのでオーディンの偽名をいくつか選んでもじってみた。……ツツコミは無しの方向で。

成り上がりというのは、実はオーディンに株式の許可を与えたら二日で資産が三倍に跳ね上がったのだ。それから恐ろしい利益を出しており、管理が面倒なのでそれらの会社をまとめ一つのグループにしてみた結果、それらの会社が大成功。今や世界有数の巨大グループになっている。その名も仁条グループ。かの南条・桐条に因んで条の字を着けてみた。……安直？そんなこたあない。

「……近衛近右衛門じゃ。何、麻帆良を頼ってきたのならこのくらい当然のことじゃよ」

「そうですね。……さて、本題に入りますが、土地の事ですがどれだけ用意することが出来ますか？」

オーデインが単刀直入に切り出す。やはり住むのなら狭いよりは広い方がいいからな。

「……最大で80坪と言った具合じゃのう。これ以上は学園に影響を与えすぎる」

「十分です。建築は私のところの業者にやらせますので、学園の方々にはご迷惑はかけませんから」

「別にうちの生徒達を使ってもいいのじゃが……」

「それでは学業の妨げになってしまいます。できる限り景観に併せた作りにするよう言っておきますから」

麻帆良の景観に併せるのなら洋館という形になるが、元々洋館風がいいと仲魔達が言っていたからこの点は問題無い。

「まあそれなら……彼は学校はどうするのじゃ」

「6歳からそちらの初等部に行かせようかと考えています。……生前彼の両親もそう考えていましたし」

実際俺が6歳になったらこっちに移住する事も考えていたらしいから嘘は言っていない。

「そうか。ならわしの方から言うことはもう無いし、戻らせてもらおう。工事の日程が決まったら教えてくれんかの」

「わかりました。……それでは」

こんな感じで話は終わった。ちなみにオーディンが言っていた『業者』とは実際にグループに所属している業者の事ではなく、俺の召喚するドワーフの事である。鑄造・建築何でもござれな便利な悪魔である。恐らく今後も結構な頻度でお世話になる種族だろう。

ドワーフを現場に連れて行くとすぐに図面を引き始めた。もの三十分で大体の設計図が出来上がり、早速工事を始めるから出てけと言われてしまった。いつ出来るのかを聞き忘れたが、まあ彼らに任せておけば問題は無いだろう。ドワーフを残して俺たちは家に帰る事にした。

さて、あれから2日が経った訳なのだが……既に屋敷の半分は完成していた。何を言ってるかわからねーと思うが俺も何が起こったのかわからなかった……超スピードだとか『幻術だ』とかじゃあ断じてねえ、もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……あいつら、計画も何も無しに始めやがった。

ドワーフ達は恐ろしい早さで工事を進め、初日に土台をほぼ完成させさらに主な柱を立てていた。俺たちの要望を聞かずにいたのを不味いと思ったのか、翌日どんな家が良いかを聞いて間取りを修正し、柱の位置を直していつて、現在は外壁の素材を何にするかでもめているようだった。一方は断熱、もう一方は防音を重視していて、それぞれの代表がどちらがより有用かの論争を繰り広げている。

「バッカ野郎、この断熱材を使えば多少の防音性も期待できらあ！こいつにすりゃあ既製品をそのまま壁に仕込むだけだから工事の期間がグワツと減るんだぞ！」

「馬鹿はてめえの方だろうが！この断熱材じゃこっちの素材の十分の一しか防音性がねえ事はこのデータが示してるだろう！こいつを壁に詰めりゃあそりゃ時間がかかるがその分この家での会話は外からじゃぜってえ聞こえなくなる！てめえが楽しようがそっちの勝手だがもつとクライアントの事を考えやがれ！」

「そいつは聞き捨てなんねえなあ！俺は旦那達に夏は涼しく冬は暖かい住みやすい屋敷をと思つてこの素材を選んだんだ！断じて俺が楽するためなんかじゃねえ！第一そっちのタイプの素材はこっちの素材よりも劣化が激しい！てめえの使い方じゃあ毎年いくらかかるか考えたくもねえぜ！」

「んだとお！？その力チ力チの石頭たたき割つてやろうか！」

「ああゝん、殴り合いか？受けて立つぞ、おい」

議論は熱を増すばかりで終わる気配がまったくない。このままでは殴り合いの大喧嘩にまで発展してしまいそうなので仲裁に入る。ドワーフだって結構強い種族、このままぶつかれば周辺に被害が出てしまう。

「はい、ストップストップ」

「とと、クライアントの坊主か」

「こりゃみつともないとこを見せちまったな」

俺の顔を出すだけで仲裁になる。好感度・忠誠度MAXは伊達ではない。

「……真剣になるのもいいけど、熱くなりすぎるのはどうかと思うよ?」

「でもよ坊主、やっぱり住むからには快適な方がいいだろ。確かに防音性は大事だがそれだけじゃあダメだと俺は思う訳よ」

「しかしここでは内密な話をする事だってあるだろ? そう言った漏らしちゃならねえ情報を外に聞こえねえようにするのが一番大事なんじゃないか」

「……そういう議論って工事開始前にするんじゃないの? 工事の費用はともかく日程ぐらいは決まってるんだろうね?」

「そりゃ、そのぐらい決まってるさ」

「何日ぐらい?」

「まあ短くて後二日、長くても一週間で出来んだろ」

「ちょっと待て、早いつてレベルじゃねーぞ! そんなスピードじゃ不自然通り越して不可思議クラス、下手すりゃ神業クラス……まあ悪魔だからそのぐらいできるか。」

「まあ、作業工程のことはいいとして……オーディン、断熱とか防音を付加するルーンとか使える?」

「ええ、私に使えないルーンはほとんどありませんから」

「じゃあルーンを刻んだ石を壁に挟めば問題無いと思うけど」

「「……………おお」」

議論していたドワーフ二人が同時に呟き、納得が行ったようにポンと手を叩いた。その動きが完璧に一緒だったのは少し面白かった。

「なるほど……………だったらついでに柱に耐震のルーンも刻んでくれると有り難えな」

「外壁には防火・防弾とかも欲しいぜ」

「ならこのタイプの長所も……………」

「だったらこれも……………」

「いやこれも……………」

「いや……………」

……………この一言で火が付いたのかこの後オーディンは家のあらゆる素材にルーンを刻まされ、さらに予定の一週間を大幅に過ぎることになった。……………最も、近右衛門教員は予定が短すぎると言っていたのでこれぐらいが普通のスピードなのだろう。

後日、屋敷を見に来た近右衛門氏曰く、「麻帆良一快適な住宅で麻帆良一強固な魔法的要塞」という評価をもらったが、その時の彼の顔は完璧に引き攣っていた事を追記しておく。

第10話 変転（後書き）

この作品のルーンは超便利な魔術です。

そう思ってください。

館の位置は大体麻帆帆良の端っこの辺りだと思ってください。

楔の設定は独自の物ですが、一応ある意図があって作った設定です。
無駄では無いですよ？

次回から毎日更新に戻します。

幕間 修行（前書き）

だいぶ短い修行編です。いつもの三分の一しか有りません。

幕間 修行

前回の旅行で自らの無力さを痛感した仁也は、自分の力量を確かめるために悪魔達とペルソナ無しで模擬戦を行った。その結果……

「Lv8程度！？その程度なのか！？」

「……恐らく、制限が掛かっている為でしょう。下級の魔法しか使えず、武器を使うとよるける……これじゃLv十代の悪魔にも勝てませんね。肉体的スペックは高いのですが」

オーデインが淡々と告げる。制限が掛かるとは言っていたが、こんなに下がる物が……いや、常人としては強い方が。運動能力だけは高いし。

「しばらくは修行をしておかないとすぐに死んでしまいますよ？」

「……そうだな、最低でも三十台と渡り合えるようにならないと不味いだろうな」

前回のマタドールのような悪魔がいつ現れても大丈夫なように、最低限鍛えておく様にしないといけない。マタドールは又エとほぼ同Lvで、又エの名を聞いた近右衛門氏の反応から結構上位の存在だと思っし、あのくらい強くなれば多分何とかなるだろう……多分。

「さて、さしあたっての問題は何処で修行するかだが……ダイオラマ魔法球みたいなのが欲しいな」

基本的に超人級の戦いになるだろうから、周辺に被害が出ない様

にするのは必須だろう。

「何体かの悪魔に魔法世界に行ってもらってそれらしいのを買ってきてもらうか」

そう考えた俺はすぐに数体の人間型悪魔を召喚し、魔法世界に行ってもらった。出来るだけ早くと言っておいたから二週間もすれば手に入るだろう。

悪魔達は約一週間で時間差が5倍の魔法球を見つけて来た。本編に出てきた魔法球より時間差が短いが、広さは多分『別荘』とほぼ同じくらいだろう。広大な大地と小さな湖、そして転移用魔法陣のある堅牢な教会があるらしい。

「これでいくら掛かった？」

「三十万ドラクマほどです。一番性能の良い物を買ってきました」

……まあこれでも十分かと考え、早速オーデインと中に入る。中は快適な気候で、教会の中には休憩所のような場所もある。

「さて仁也殿、貴方にはこれから三つの目標を達成してもらいます。武器での戦闘技術の向上、常に平常心の精神状態、そして全書使用の高速化です。この三つさえ習得出来れば、大抵の事ではやられないでしょう」

全書によると、俺の能力制限のほとんどは15歳で解除されるらしい。この15歳は実際に現実世界で経過した時間で考えるため、

魔法球に籠もつてと言う手は使えない。因って後十一年はこのままのため、早急にLvを上げなければならない。

「しばらくはスパルタですが、覚悟は良いですか？」

優しい顔をして聞いてくるオーディンの顔をしっかりと見据え、俺は口を開く。

「ああ、遠慮せず全力でしごいてくれ！」

俺はそう言つて全書を出し、訓練を始めた。

その後、全書を出したり消したりの反復練習や瞑想などを繰り返して、模擬戦でしごかれ過ぎて意識を失ったり、大怪我をしたりしたが余り修行は進まず、目標を全て達成した頃にはもう1年近く経っていた。

「……制限解除しないとただの凡人かよおおおおお！」

魔法球内部に仁也の叫びが響き渡った。

幕間 修行（後書き）

内容？地味すぎるのでカットです！

現状ほぼ全てのステータスに制限が掛かっている状態なので、余りにも強い相手には逃げるしか無いのです。

第11話 学校（前書き）

さて時間がまた飛びますよ、覚悟してくださいね？

今回はあるゲームのあるキャラを元にした人物が出てきます。

第11話 学校

屋敷が出来た年から二年、俺は麻帆良学園初等部に入学した。今は学園長になった近右衛門教員の長い長い話を聞いた後に教室に入ると、いやにテンションの高いクラスメイト達が飛びかかってきた。流石は麻帆良、この頃からこのテンションとは……

「おいお前ら、そろそろ席に座れや」

教室に救いの声が響き、妙なテンションの取り巻きから解放された。自分の出席番号の書かれた席を探して自分の席に座り、救いの声の主を見る。中々に恰幅の良い男性で、少し下顎が大きい。髪はボサボサの黒髪で、身長はそこまで高くない。目がギョロリと出ており、あまり親しみやすい容姿とは言えない感じた。その雰囲気は怖くもあり、また気まずさを感じる高圧的な物だった。

「お前らの担任の中嶋天残だ。好きに呼んでくれっての」

担任の中嶋教員はそう言うと言とポケットから本を取り出して読み出した。……あまり良い先生とは言えないようだ。仕方ないので俺が先導して生徒間で自己紹介をする。この間中嶋教員は特に何もせずただただ本を読んでいるだけだった。

中嶋教員の不真面目さは授業でも発揮された。

「今日は俺の腹が痛いので自習ってことで」

と、このように何か有るとすぐに自習にするのだ。それもほぼ一日中、既に2週間続けてずっとである。しかし彼はどうやら魔法先

生らしく、まずこの教室に記憶改竄の結界が張つてある。方向性は『この教室でちゃんと勉強をした』という記憶を植え付ける為のもので、ここに入った生徒はここでちゃんと勉強したと思い込むのだ。

……もちろん勉強なんてしてないからテストは酷いことになるはずだが、中嶋教員はそのテストをしないから問題が表面化しない。成績をつける時は教室内でどんな風に過ごしているかを見るだけで大体3から4ぐらいをつけておけば当たり障りが無く文句も出ない。また、こんな術式を知られる訳にはいかないので毎日欠かさず学校には来るため、他の教員が来る事もない。

このためうちのクラスはかなり混沌としている。一回他の教員にこのクラスの現状を話したのだが、認識阻害の結界を張つてあるのか何を話しても信じてくれない。この用意の良さには少々意外さを感じ、またここまでするのなら普通に授業をして欲しいと思う。

そんな混沌とした状態から脱出出来ずに二年の月日が経った。相変わらず授業をしない中嶋教員にうんざりしながら、俺は別の事を考えていた。それはそろそろ戦争が始まる魔法世界に対して、自分は介入すべきか否か、介入するならどう介入するか。これはかなり重要な問題でもある。下手に介入すれば両国の軍事バランスを崩し『紅き翼』に攻撃される可能性がある。

かといって何もしないのもまた罪悪感や問題がある。別に罪悪感だけなら問題も無いのだが、グループの一部は魔法世界に本拠がある企業も混ざっているから戦火に巻き込まれる事も考えなければいけない。とすると介入するのは良いとしても軍事的に関わるべきか……

関わる際のメリットはコネが大量に出来ることだ。『紅き翼』を筆頭に元老院・帝国王室・オスティア皇族等の魔法世界関係だけでなく、関東魔法協会等にもコネができるので今後かなり動きやすくなるのだ。

反面、軍事的に関わった際はどちらについても英雄扱いされる事が目に見えているので、限りなく有名になってしまうのが問題だ。英雄クラスの知名度となると一挙一投足まで監視されているのとはほぼ同じでグループの行動に制限がかかる可能性さえある。

関わらない場合のメリットは束縛される事が無くほぼ現状維持に近いことだが、逆に戦争中に何のアクションも起こさないと悪評が広がる可能性があるため、最低でも何かしらのアクションを起こした方がよいのは明白だ。

これらの情報を鑑みて考えると、軍事的には関わらずに他の何かで貢献すると良さそうだ。……だとすると、悪魔で構成した医師団なんかを派遣するのが最良か？

ここまで考えた所で今日の自習が終わった。今日も最初から最後まで自習だったが、クラスメイト達は今日もまったく危機感を持たず遊んでいる。……今は一応授業中なんだがなあ。

二年間何も変わらなかったのかと聞かれればそうではない。何度かクラス替えも行われたのだが、何故かこのクラスだけは全く生徒が出て行かず、逆に増えた生徒を受け入れてどんどん増えている。一年生の時は32人だった生徒が二年生の時には45人になっていて、どんどん増えるクラスメイトとは対照的に中嶋教員の方針は何も変わらなかった。あまりにやばいのでこのクラスの現状に違和感

を持つ生徒は皆に声を掛けて勉強会を始める程である。今は勉強会組とそうでない組で学力がきれいに別れてしまった事を嘆くべきだろう。

三年目の夏休みが終わり、久々に学校へ行こうと玄関に向かうと電話が鳴り出した。こんな中途半端な時間に一体何の用だと憤慨していると、同級生で同じ勉強会組の野田乙女からだった。

「もしもし、本田君のおうちですか？」

「野田さん、どうしたのこんな朝から？」

「あ、良かった本田君だ。……えっと、天残先生からの連絡網で、今日はお休みだって」

「？ 今日から二学期じゃなかったっけ」

「なんか変な病気が流行ってて、クラスの半分が休んじやつたんだって」

「ふうん」

「先生から連絡が来るまではずっとお休みだって」

それだけ言って野田さんは電話を切った。……おかしい、この時期に学級閉鎖なんてまず無いはず。その上期間が先生から連絡が来るまでと言つのもまたおかしい。……俺はそう考え、この先三日間の間に連絡が無ければ調査をしようと決めた。

「今日で三日目か……」

受話器を置いて独り言を言う。三日前に電話がかかってきてから野田さんとは毎日連絡している……と言うかあちらから毎日10時に電話をかけてくるのだ。何で電話をかけてくるのか聞いたところ、

「ずっとお休みで話し相手が居なくて退屈なの」

と言われた。両親に学級閉鎖中なのだから外に出るのは止めるように言われているらしい。最初はぎこちなく話す程度だったが、三回目となると緊張など無くなり、口数がかなり多くなった。ちなみに彼女が連絡できる友達は何人か、病気の仲間になったらしく、電話をかけても話は出来ないとのこと。こちらも同級生のほとんどに連絡を入れたが実に三分の二が例の病気に罹ったという。

そろそろ調べる頃合いだと思い、外出の用意をする。こう言った場合昔から足で調べるのが基本であり王道である。俺は地道に同級生の家を訪ねる事にした。

「あつ、仁也様少しお待ちください」

いざ、と言うときにシルキーに声をかけられた。

「何だいシルキー、どうかしたのかい？」

「いえ、例の医師団の事ですが……何人か護衛を付けた方がよろしいかと思ひまして」

「ああ、確かに……そうだね、護衛はオーデインを中心に何人か見繕っておいてもらって」

「わかりましたわ」

そう言って屋敷の奥に戻って行くシルキーを見送り、自分も出席番号一番のクラスメイトの家に向かう。何があっても良いように懷にペルソナ解禁と一緒に使用制限の解除された黄昏の羽根を忍ばせるのを忘れない。

今日で学級閉鎖七日目を迎えた。そんな俺が今何をしているかと言つと……

「本田君、ここの問題の解き方教えて」

「えつとここは……」

野田さんに勉強を教えている。……五日目に暇が限界に達したのか、電話で

「お父さんが本田君の家なら行っても良いって言われたの。本田君の家に行っても良い？」

と聞いてきたのである。こちらも暇だったし、発症したと言うクラスメイトの家は全て回ったので「別にいいよ」と言つとそのまま毎日来るようになったのだった。ちゃんと勉強用具を持ってくる辺りしっかりしている子だと思う。……帰るとき泣きそうな顔をする

のは止めて欲しいが。

（今日も何も進展無し……もっと勇気を出さないとダメかなあ）

「それじゃ野田さん、また明日」

「うん、また明日（明日こそ……！）」

例の学級閉鎖の方は少し進展が出てきた。中嶋教員も例の病気に罹り、ここ数日ある病院に入院しているらしい。さらに現在発症していない生徒は俺と野田さんの二人だけで、この病院にはどういった偶然かうちのクラスメイト全員が入院している。偶然にしては出来すぎなこの状況はかなり怪しい。明日野田さんに早く帰ってもらって調査に行くことにしようと思う。

その夜、魔法世界にて帝国と連合が開戦したとの情報が届いたため、オーデイン率いる医師団が魔法世界へと旅立っていった。またオーデインと離れるのは少し不安だが、今回はちゃんと他の護衛も居るから大丈夫だろう。

第11話 学校（後書き）

なんかいろいろなフラグが立ちすぎですね。

教師の元ネタが知りたい人は、名前をカタカナにして検索してください。

第12話 悪夢（前書き）

今回は余り筆が乗りませんでした……何でだろう？

第12話 悪夢

学級閉鎖八日目の今日、時刻は2時を回ろうとしている。そろそろ行くかなと思い、野田さんに声をかける。

「野田さん、今日はこの後用事があるんだ。悪いんだけど今日はもう終わりにしよう」

「え……うん、わかった（え、嘘、せっかく勇気を出して今日言おうと思ってたのに……）」

……何か悔しさが伝わってくるが、そこまで急ぐ課題でもないはずなので気のせいだと思う。多分。

「外に出るからついでに見送るよ」

「あ、うん……（今日もダメだった……）」

野田さんを連れて外に向かう。しばらく話しながら歩き、交差点で別れた。これでやっと例の病院を調査できる。そう思うと不思議と足取りが軽くなった。……別に野田さんが嫌いな訳じゃないぞ？

あの後学園長にもいろいろと話してみたが、恐ろしく強力な認識障害が掛かっているのかこの話題——特に中嶋教員に関する——について話しても、しばらくすると完全に忘れてしまう様だった。こうなったら、中嶋教員に直接聞くしかなさそうだ。そう思って俺は中嶋教員が入院している病院に向かった。

この病院は小学生が大量に入院しているはずなのだが、人の声が聞こえてこない。不気味な程に静まりかえっているロビーを覗くと誰も居ない。受付には名簿に名前を記入してくださいと書かれた看板が立ててあるだけで人の気配がしない。蛍光灯が点滅する廊下は見通しが悪く、まるでこっちに來いと誘っているようだった。

頭の中で何かが警鐘を鳴らす。この病院は危険だと、このままでは不味い事になると。俺は念のため数体のペルソナを体に宿らせ、小脇に悪魔全書を抱えながら奥に進む。

中嶋教員の病室はこの本院側には無く、渡り廊下を渡った分院側にあるらしい。二階にある渡り廊下を目指して歩くが、足音以外の音が聞こえない。小さな足音が反響して何倍も大きく聞こえる。

渡り廊下に着くと、自動ドアが破壊されていた。重量のある鈍器で殴ればこんな感じに壊れるのだろう。ふと立ち止まってその惨状を見ていると、『自分のもの以外の足音』が聞こえた。

足音は本院側から俺を追うように近づいてくる。何が出ても良いように身構えていると、現れたのは…

「あれ、本田君？どうして居るの？用事は終わったの？」

人畜無害なクラスメイトだった。小さめのバスケットにいくつかの果物を入れており、誰がどう見てもお見舞いに來たとわかる格好だった。

「……いえ、天残先生のお見舞いが用事でして」

「だったら言ってくれば一緒に来れたのに」

どうやら彼女の予定とブッキングしてしまったようだ。一度戻ろうかとも考えたが、見舞いが目的と言ってしまった以上行くしか有るまい。

「じゃあ一緒にお見舞いに行こう。……それ持とうか？」

「あ、じゃあお願い」

彼女の荷物を持って分院に足を踏み入れる。野田さんは不思議そうに自動ドアを見ていたが、特に何が出来るわけでも無いのですぐに目をそらした。

中嶋教員の病室は分院側の二階・3号室なのだが、その病室に血が散乱している場合どう解釈をすればいいのだろう。中嶋教員は被害者か、それとも加害者か。ついでに言うところの病室には野田さんの一番の親友が居たはずなのだが、そのベッドにも大量の血痕があるのはどうしたことがか。

「嘘……こんな事があるはず無いよ……嘘だよ……」

野田さんはあまりのことに震えている。無理もない、まだ8歳の女の子だ。この状況で取り乱すと言う方が無理がある。俺は彼女の肩をそつと抱いた。

「……一度ここから出よう。今ここでは何かが起きているんだよ」

「……嫌、まだここにはたくさんの友達が居るもの。こんな所にもんなを置いて行くななんてできないわ」

「外に出て、警察に電話した方がよいよ。僕たちじゃ何も出来ない」

「……わかった」

何とか彼女を説得して病室を出ると、今までは居なかった大量の人間がこちらを目指して歩いてくる。数はおおよそ60人程、皆顔に生気が見えない。

「何あれ！？何なの！？」

「たぶん錯乱してるんだと思う……とりあえず逃げよう！」

彼女に適当な考えを言って手を引いて走り出す。本院側からも来ているらしく、渡り廊下を渡ってどんどんこちらに近づいてくる。

俺は迷わず分院一階に降りる階段に走った。分院の非常口からなら外に出られるはずだ。

結果から言うと、この判断は失敗だったと言える。分院一階の口ビ―は地下から上がってくる亡者（？）の群れで一杯になっていた。俺がどうしたものかと考えていると、野田さんが亡者の群れに突っ込んだ。

「ちょ、野田さん！？」

野田さんは亡者の一人に抱きつき、話しかけている。その姿には

見覚えがある。確か同じクラスの間乃文恵さんのはずだが、顔色がとても悪い。

「文恵ちゃん！私だよ、乙女！どうしたのよ一体！」

「……乙女、一緒に来て。みんなも待つてる」

「へ？」

間乃文恵さん（？）は野田さんの首筋に手刀を当てて彼女を気絶させると、担いで地下に降りていった。そこから新しい亡者達がたくさん出てくる。

「やばい、とにかく助けないと……」

俺が言うが早いか、亡者達が姿を変えだした。服がちぎれ、筋肉が増大し、皮膚が緑がかかる。それはまさに幽鬼グールの姿そのものだった。

「……最悪」

俺はそう呟いて全書を開き、ペルソナを装備する。総勢数十体を超すグールの群れが俺に襲いかかる。俺はただ全力を持ってその群れの中を進む。

「邪魔だあああああああ！」

病院全体に響く声を出しながら走り抜ける。

ほぼ全てのグールをいなし、残りを召喚した数体の悪魔に任せ地下に降りたものの、部屋が多く虱潰しに探すしかない現状が恨めしい。所々に結界が張られ、一つ一つ確実に解除しなければならず時間を取られてしまった。

さらにやっかいな事にこの奥から強大な魔力が流れてくる。これはつまり高位の魔法使いか悪魔が此処に居るということだ。悪魔を召喚しておくといきなり攻撃されるかも知れないので、装備しているペルソナを確認する。特に消耗していないし魔王クラスまでなら何とか逃げることも出来るだろう。俺は意を決して重い扉を開けた。

パァーン！

開けた瞬間クラッカーの音が鳴り響く。そこには俺のクラスメイト達が中嶋教員を囲んでパーティをしている光景があった。壁には『クラス全員退院記念パーティ』と書いた看板が飾ってある。中のクラスメイト達が俺を捕まえて文句を言った。

「おい本田、遅刻すんなよな」

「みんなオマエを待ってたんだぞっ！」

「遅れるにしても連絡無いと心配になっちゃうよ」

「もうみんな、本田君が困っているじゃない」

轟田が我が儘なものも骨山が五月蠅いのも鋭才が心配症なものも阿茶倉が良く気が回るのもいつも通りだった。あまりにも、不自然な程にいつも通り。この地下から亡者がうなり声を上げて地上に出てき

たというのに彼らは平然としているのだ。彼らが悪魔が化けている
のでも悪魔に憑かれているのでもないのが、俺を不安にさせる。唯
一中嶋教員だけがいつもの三割増しで目を見開き、顔中汗だくにな
っているのが違うだけ。そんな疑問を俺が浮かべている間に後ろの
ドアが閉められ、鍵を掛けられた。

途端、クラスメイト達の目がギュルンと回った。気が触れている
ようにしか見えない姿のまま、彼らは俺に襲いかかった。俺はいき
なりの事で反応出来ず、ただ彼らの襲撃を喰らうことしか出来なか
った。轟田が泡を吹きながら俺の首を絞め、骨山が短刀で俺を刺し、
鋭才が俺の心臓に照準を合わせライフルを撃った。物理・銃撃・斬
撃無効の魔改造セイテンタイセイを装備している俺には何のダメー
ジも与えられないが、友人に殺そうとされるのは精神的にきついも
のがある。

「死ねえ本田あ」

「アヒヤ、アヒヤヒヤ」

「殺殺殺殺殺殺殺殺」

このままでは不味いと思い、三人に当て身を入れる。轟田が倒れ
た事で解放された俺に銃弾の雨が飛んでくる。女子達は多種多様な
ハンドガンを両手に持ち、俺を撃ち続ける。痛くは無いが、倒れた
三人を庇わないと死んでしまう為、大きく腕を広げて三人の盾にな
る。宙に浮いていた全書が無数の弾丸に貫かれ、消え去った。全書
が破壊された以上、最低でも後一時間は呼び出せない。

「（このままじゃ不味い！）くそ、反撃もできないしどうすれば…
…」

「じゃあ死んで？」

後ろから阿茶倉が軍用ナイフで斬りかかってくる。体に傷が付かないことにムツとしたのか一心不乱に切りつけてくる。彼女は俺の背後に居るため流れ弾を気にしなくて良いのが唯一の救いだった。

一種の膠着状態に陥ってしまった俺は周囲の状況を確認する。クラスメイト達は横になっっている野田さんを除いて錯乱したかのよう
に俺を攻撃しており、鈍器や槍を構えタイミングを伺っている奴も居る。中嶋教員は気絶している野田さんの近くで汗を流しながらこちらを見ている。その顔は何かに脅されているようでもあり、彼自身
が楽しんでいるようにも見える。彼は口元でブツブツと何か呟いている
ようだが、銃撃音の嵐に因ってかき消され聞こえることはなかった。

そして彼の横には、体の半分が焼け焦げ、紅いマントを体に巻いたミイラのような老人が居た。

第12話 悪夢（後書き）

狂気に飲まれた殺し合いが始まりました。

一部の方は嫌いな展開かも知れませんが、しばらくはこれが続きます。

後仁也は鈍感な訳では無く、好意には気づいているけどあり得ないと思ってスルーしてます。

ペルソナについての補足（注意、長いです）：

ペルソナには三つの段階が存在する。保持、装備、顕現である。

保持はいわゆる待機状態。何の効果も及ぼさないが、保持しているペルソナはすぐに装備出来る。

装備は耐性と能力を有効にした状態。各種耐性が付加される戦闘の基本状態。

顕現は攻撃時に装備しているペルソナの姿を現し、その力を解放すること。魔法を放ったり技を使う時の状態。

第13話 狂気（前書き）

今回も少々鬱展開です。

第13話 狂気

それは死にかけていた。体の半分が焼け落ちていながら未だ強大な魔力をその身に秘め、その魔力で死期を伸ばしている。痩せ細ったその四肢はただダラリと垂れ下がり、まるで糸の切れた人形のよくな体勢だ。その顔に表情は無く、ただ空虚な視線をこちらに向けるだけ。その悪魔は、横にいる中嶋教員に何か指示を出しているようだった。冷や汗をかき顔色の悪い中嶋教員はしきりに首を縦に振っている。

女神転生シリーズで幾度も姿を見せ、その強さたるや疑う余地無し。欠点はある少女に固執しすぎている事だけ。実力で言えば魔王級の悪魔、堕天使ネビロス。それがこの騒動の黒幕の名だ。その姿を見て俺は何故学園長すらも天残教員が不審に思われなにかに気づいた。この悪魔の魔力を使って強力な認識障害の結果を張っていたのだろう。……何故俺だけが認識障害を抜けられたのかは今は置いておこう。

その威圧感は死にかけているはずの状態でもなお俺を恐怖させる。実際に戦えばどうなるかはわからないが、少なくとも苦戦は免れない事がたやすく予想出来るし、もし悪魔を召喚していればネビロスは俺のクラスメイト達を皆殺しにしたかも知れない。逃げることに全力を尽くせば逃げられるだろうが、彼らを置いてくなんて事はそもそも考えていないし、クラスメイト達は俺を逃がそうとはしないだろう。現に今も阿茶倉にガンガン切りつけられてるし。

「もう、なんで切れないのよ！イライラするう！」

まあペルソナを装備している間は戦闘力が大幅に上昇し特殊耐性

が付加されるから、この程度の攻撃は全く問題にならないのだが、やはり友人に攻撃されるのは精神的に辛いものがあるな。

「……う、首が痛てえ、今何時だ？」

「ひゃう!？」

阿茶倉の足下で気絶していた轟田がむくりと起きる。起きたときに阿茶倉の太もみに顔を埋めるラッキースケベを発揮しながら段々と意識を覚醒させているようだ。その顔に狂気の色は見えず、至って普通の少年のような顔だった。阿茶倉は今は俺を斬りつけることの方が重要らしく、轟田を無視している。

「……んあ？なんだここ？」

「!轟田、大丈夫か!」

「うつせーよ本田、大声出す……な……」

頭が正常に働き出したら周辺の異常さがしつかりとわかったらしく、段々顔が青ざめ出す轟田。無理もない、この状況は狂ってるって言えない。

「あ、あ、ああああ」

「落ちて轟田!いいか、今動くと危ないから少し待つんだ!今動く……」

「お、お母、ちゃああん!」

動転している轟田は立ち上がり、ドアに向かって走り出した。ドアの鍵を開けようと手を伸ばしたとき、パスンと軽い音が響き、轟田が前のめりに倒れ込んだ。女子の拳銃が轟田の頭を打ち抜いたようだ。

「アハハハ……あ、あれ？私今何を……」

「！？」

轟田の頭から血がトロトロと流れているのを見て一人正気に戻った子が居たようだ。方向等から考えるに恐らく轟田を撃った子だろう。銃を落とし、顔に手を当て震えている。確か彼女は……流宮玲奈だったか？

「あゝ、いい子に戻っちゃった。いい子にはお仕置きだあ」

横に居た曾野崎巳音が流宮の頭に照準を合わせ、そのまま何のためらいもなく引き金を引いた。

「……ん？あたし今何してた？」

流宮を殺したことで曾野崎は正気に戻ったようだった。ここでもまでのことから俺は最悪の考えに至った。それは気を失うか殺すかでしか正気に戻れず、正気に戻ったものを優先的に殺す暗示を掛けられている可能性。それが意味するのは……

パアン！パアン！パパアン！

無数の銃声が部屋の中に響き渡る。流れ弾で友を殺し、正気になり、友に撃たれ、その友もまた正気になり撃たれる。地獄の様な連

鎖が始まりだした。血と硝煙の臭いが部屋を包み、狂気が弾丸と共に飛んでゆく。

「アハハハハハハハ」

「楽しいな♪楽しいな♪」

「う、うわあああああああ」

「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない」

助けに行きたいが、足下の二人の安全を確保しないと動けない。後ろの阿茶倉が二人を無視しているおかげでまだ問題無いが、少しでも手を伸ばせば二人を殺されるのは目に見えている。こうしている間にもどんどん幼い子供の死体が増えていく。悪魔全書さえ有れば……と自分の無力さを噛み締めていたそのとき、ガチャンと重い金属の音がした。

「銃がダメならこれだな！」

その少年が肩に背負っていたのはバズーカ砲だった。旧式の単発装填型だが、人を殺すには十分過ぎる威力を持っている。今あんなものを撃たれたら、後ろの阿茶倉どこるか足下の二人まで吹っ飛ぶ可能性がある。俺は阿茶倉が飛びのいたのを見計らって二人の服の肩口をつかんで壁際に向かって、死なないように注意しながら阿茶倉とは逆の方向に投げた。

「喰らえオラァ！」

少年のバズーカが火を噴き、俺に命中する。鼓膜の破れそうな爆

音と普通の人間ならただではすまないだろう熱量を感じながら、周辺を再確認する。幸いにも今の砲撃は他のクラスメイトには被害が出なかったようだ。上着とシャツがズタズタだが別に気にするほどの事でもないだろう。

先ほど投げた二人の方を見ると鋭才が頭を抱えて起きようとしている。今度こそ助けようと二人に向かって駆け寄る。やはり鋭才も正気を取り戻しているようで、辺りを見回して顔を青くしている。

「何だ……何が起こったんだ？みんなは一体……何をしているんだ？」

「鋭才、大丈夫か！？」

「！……う、うわあああああああ！」

鋭才が俺に向かってライフルを乱射してきた。表情を見れば錯乱しているだろう事がたやすく予想出来る。恐怖と動転に染められた目をこちらに向け、照準もせずになだ引き金を引いている。

「おい鋭才、落ち着け！俺だ、本田だ！」

「嘘だ！人間が……人がそんなに頑丈な訳がないよ！」

「！」

……そうか、鋭才は頭がいいから気づいてしまったのか。クラスメイトがバズーカを抱え、その先に煙の中から出てくる俺が居て、俺がバズーカで撃たれたことを確信した。そして普通の人間ではあり得ない状況にパニックになり、その俺が近づいてきたから手元に

あつた銃を発砲、拒絶の意思を示したのだろう。

……そんな事を考えていると、鋭才の横で寝ていた骨川がモゾモゾと動き出した。

「…う、なんか気持ち悪い……」

「うわあ！」

骨川が起き上がろうとしたそのとき、鋭才が驚いて銃口を骨川に向け発砲した。いきなりの事に骨川は反応出来ずに撃たれ、数秒で蜂の巣になった。

「…あ、ああ……」

鋭才は自分のしたことを理解してしまったのか、顔を青くして震えている。彼は自分の手で引き金を引いて人を殺したのだ、8歳の少年である鋭才には辛すぎる。俺は鋭才を慰め、外に逃がす為に駆け寄ろうとした。しかし次の瞬間、鋭才の居たところで爆発が起きた。誰かが撃ったバズーカの流れ弾だった。

「……」

この光景を見ていた俺の感じた感情は虚無感、絶望、後悔……多数の負の感情。

俺は変わっていないのか？両親が死んだあの日から、何も変わっていないのか？両親を殺されたあの日から？そんな考えが頭の中を駆け巡る。

そんな事を考えている間に銃声は止んだ。辺りに生きている人間は二名しか残っていない。中嶋教員と気絶している野田さんだ。後はネビロスを除けばただの死体しか見えない。

「ホ！まさかてめえも化け物だとは思わなかったっての、本田」

中嶋教員が青いままで引き攣った表情で喚いている。その姿はまるで何かに強要されているようでいて、自分の本心からの行動にも見えた。

「だが、このネビロスのおっさんはもつと強いっての！」

そう言った瞬間、周囲の死体が立ち上がる。あるものは腕を無くし、またあるものは腹をえぐられており、その目に光は見えない。恐らくネビロスの力で死体を動かしているのだろう。そしてその死体はクラスメイトのものだけでは無く、むしろ名前も知らない子供の死体の方が多いぐらいだった。

「ネビロスのおっさんは俺に力を、富を、女をくれた！対価は俺のクラスのガキ共を見せてやればいい！ネビロスのおっさんは俺を裏切らねえ！こんなに楽しい生活を今更手放せるかっての！」

……この世で悪魔に最も近い生物は人間だと言う。そしてその悪魔をも私利私欲の為に利用するものは古来よりこう呼ばれる。

外道、と。

「俺の為にさつさと死ねっての！ヒヤハハハハハハ！」

その言葉が合図だったのか、緩慢に動き出す死体達。だが彼らが

目指した場所にはもはや何も無い。

俺は漫画に書いてあった瞬動の要領を思い出しながらそれを試す。中途半端ながらも速く動く事で中嶋教員の横に行き、気絶している野田さんを抱えて距離を取る。

「ホ！？」

驚く中嶋教員をそのままに扉に向かって走るが、ネビロスがその事に気づき扉を凍結させた。逃げ道を断たれた俺は意を決し、野田さんを床に寝かせ、『敵集団』の方を見る。

「中嶋天残……自分の欲望の為に教え子を犠牲にする外道が！このまま貴様の思い通りに事が進むと思うなよ、この屑野郎！」

そのあまりの迫力に少し後ずさる天残教員。が、すぐに立て直しこちらに攻撃命令を出す。

「やっちまえつての！」

先ほどよりも少し敏捷な動きで死体の群れが突っ込んでくる。だが中嶋教員は彼、本田仁也を見誤っていた。狂気に飲まれた生きた友人ならともかく、変わり果て人外に堕ちた友人を攻撃することに躊躇などするはずがない。

なぜなら彼の目の前にあるのは、もはや救うことの出来ないただの『死体』なのだから。

第13話 狂気（後書き）

次回、反撃開始です。

助けられないのは蘇生用アイテムの入った全書が破壊されたため、蘇生が不可能だと判断したためです。

上に居る悪魔は蘇生魔法を憶えています。ていうかよほど上位の悪魔じゃないと憶えてません。（大体80以上くらい）

今回はグールの相手なのでそこまで強いのは出しませんでした。

第14話 妄執（前書き）

今回で戦闘は一応終わりです。

第14話 妄執

元クラスメイト達が一斉に飛びかかってくる。腕のない少年が、足のちぎれた少女が、顔のえぐれた誰かが、俺を殺すために飛びかかる。

俺は少し体を沈め、跳躍した。身長の三倍程度の高さで上昇が止まり、死体の群れを見下ろす。野田さんを巻き込まないように着弾点に気をつけて『ガルダイン』を放つ。着弾点にいた死体は風圧で潰れ、その周囲にいた者は風で吹っ飛ばされた。ガル系はザン系に比べ殺傷力が低い為、牽制に使いやすい。着弾点に気を付ければ相手を無傷で気絶させることも出来る。

が、ここではむしろ死体を一撃で破壊できる威力・破壊力が欲しいので、ペルソナを交換する。敵は死体を操作するのだから一瞬で灰にするほどの強力な火炎が望ましい。俺はペルソナをスルトに変え、敵集団に向かって『マハラギダイン』を放つ。数十体の死体が火達磨になり、火が他の死体にも燃え移る。やがてほとんどの死体が灰となり崩れ落ちる。

「ば、馬鹿な、冗談じゃねえっての!？」

この光景を見ていた中嶋教員は恐怖の余り叫んだ。まあたかが8歳にこんな力が有るわけ無いので、この反応もいわば当たり前なのだが。なお、全力を出すとこの部屋がなくなるので少し手加減している。

「ホー！そっちがそんだけ強えなら手加減はいらねえっての！
オルガ・キャノリア・ロスマーシャ！炎の精霊301柱、集い来た

りて敵を討て！

『魔法の射手・連弾・炎の301矢』！」

中嶋教員が唱えた魔法の射手が広がるようにこちらに向かってくる。しかし今装備しているスルトは火炎属性攻撃を吸収することができるので、すべて避けずに命中させる。

「ヒヤハハハハハ！たいしたこと無いっての！」

煙でこちらが見えないらしく、勝ち誇った顔で笑う中嶋教員。その横のネビロスは何かを感じたのか、ずっと俺の居る方向を見ている。

「ヒヤハハハ……ハ？何であいつ何ともねえんだっての！？」

俺が煙の中から無傷で出てくるのを見た中嶋教員がうるさく騒いでいる。さっきの戦いを見てまだ実力を過小評価するのはどうかと思う。驚いていたのは一体何だったのか……まあ俺も人のことは言えないか。

「お返しだ……『アギダイン』！」

「な……ギヤアアアア！」

人の胴体ほどの火球が中嶋教員を焼き尽くす。ネビロスは回避したが、人間が喰らえば骨も残らない程の高熱を受けた中嶋教員は恐らく助からないだろう。そう思っていたのだが。

「死ぬかと思っただっての！『治癒』！」

中嶋教員は自らの魔法障壁を最大まで展開、受ける熱量を火傷程度に軽減し、さらに自分に回復魔法を掛けている。……地味にしぶといな。

「ホ！てめえも炎系魔法の使い手とはな、だが俺様はもつと強力な呪文も使えるつての！」

なんか妙な対抗意識を持たれた。別に今装備しているペルソナが炎系なだけなのだが……

「これで終わりだつての！オルガ・キャノリア・ロスマーシャ……
——『紅蓮蜂』！」

中嶋教員が『紅蓮蜂』を発動させ、無数の蜂がこちらを狙う。避けるのは簡単だが、今避ければ後ろの野田さんにも被害が出てしまう。なので、全ての蜂を迎撃することにした。

装備ペルソナをタナトスにし、その力を顕現させる。足下にあった阿茶倉の使っていたナイフを拾い、腰を低く構える。

「奥義・『空間殺法』！」

瞬間、蜘蛛のように跳躍する。その速度は達人でも残像しか捕らえられない程だった。

ただか数瞬、しかしその間に全ての蜂を切り裂く。これだけの動きをしたせいか、足の筋肉が悲鳴を上げる。しかし今ここで倒れる訳にはいけないので足に発破をかけ持ち直す。

中嶋教員は顔から生気を失い、心の底から絶望しているような表

情をしている。

「う、嘘だったの…俺がこんな小僧に負けるはずが無え……」ブツ

少し錯乱気味の中嶋教員を無視していると、ネビロスが前に出てきた。俺は即座に戦闘態勢を取るが、ネビロスは俺にこんな事を尋ねてきた。

「ア……リス……を知ら……ない……か？」

アリス。それは失意のうちに死んだ少女の名。その魂の純粹さ故に魔王級悪魔二人の心を射止め、魔人として蘇生され、愛を注がれ生きた少女。死を呼ぶ呪詛の使い手にして高位の悪魔。

そして彼女を愛した魔王級の片割れ、それがネビロスなのだ。…しかし、彼の様子はどこか変だった。

「ア……リス……どこに……居る……心ば……いだ……守れ……なかった」

その一言で俺は推測する。恐らく彼は何者かに襲われ、敗北し、アリスと離ればなれになってしまったのだ。アリスの安否を確認するため、肉体が朽ちていく恐怖と痛みに耐えてまで現界しているのだろう。だから中嶋教員に協力し、彼の教え子から探そうとしたのだろう。

だが、彼は既に精神が壊れてしまったようだ。もはやアリスと他の子供の区別が付かないほどに。彼はアリスを捜すことを優先する余り、アリスの姿を忘れたのだ。故にもはや彼の行為に意味など無

く、ただいたずらに犠牲者を増やすだけ。そう考えて俺は彼の命を一度魔界に帰す事にした。

「おいネビロス！さっさとそいつを殺せつての！」

中嶋教員はネビロスに命令しているが、死にかけているとは言え魔王級、そんな事知ったことかと無視を決め込んでいる。

「ネビロスさん、貴方はもう休んでもいいですよ」

「ア……リ……ス……助……け……ない……と」

そう言つて手を伸ばしてくるネビロスの目には濁った光しか見えない。仕方がないから切り捨てようとしたその時、ネビロスの体を太い手が貫いた。

「……俺を無視しやがつて、てめえ何ざまういらねえ！俺の糧となりな！」

「アガアアアアア！」

中嶋教員は手を引き抜き何か呪文を唱えた。その力かネビロスが中嶋教員に吸い込まれてゆく。恐らく擬似的な悪魔合体をしようとしているのだろう。

「ヒヤハ、ヒヤハハハ！力が溢れてくるぜ、最高だつての！ヒヤハハハハハハ！」

全身が甲殻類を思わせる鋭利な外殻に包まれ、膨大な魔力をその身に宿し、肉体を肥大化させる。無機質な翼や俺の頭よりでかい拳。

2 m超の巨躯の姿は、まるで前世で見た究極ロボのよう。そこに居たのはもはややる気のない欠陥教師中嶋天残ではなく、強力な力を持った魔人テンザンだった。

「第2ラウンドと行こうか、本田仁也！」

強力な魔力によって性格までもが変わってしまったようで、どこか威厳を感じさせる口調になっている。恐らくこいつの実力は全力のネビロスほどでは無いだろうが、それでもこのまま生かしておいたら確実に人類に仇なす存在となるだろう。

「……いいだろう外道、人々の平和の為に、オマエはここで殲滅する！」

ナイフを構え警戒態勢に入る。どんな攻撃にも対処できるよう野田さんの方を注意するのも忘れない。

「ほざけ小童！『紅蓮蜂』！」

テンザンが吠えると無詠唱で先ほどの数倍の数の蜂が襲いかかってくる。この部屋天井高いけど狭いんだから余り大火力の技使うと自滅するぞ。

「面倒だな、『空間殺法』！」

俺は再び『空間殺法』を仕掛ける。先ほどより数が多い為時間がかかったが、何とか全部消すことが出来た。ついでにテンザンにも斬りかかってみたが、外殻に傷も付けられない。この堅さでは恐らくナイフでは切れ味が足りないのだろう。先ほどより足に負担が掛かっているので、ペルソナを魔法主体のロキに交換しておく。

「やはり効かんか……ならばこれならばどうだ！『燃える天空』！」

膨大な魔力を惜しみなく使い、この世界の火炎系魔法の中でも上位の魔法を使ってきた。少々予想外だったが、この口キには秘策がある。

「『マカラカーン』」

メガテン系においてほとんどの魔法を反射するシールドを張る魔法、『マカラカーン』。この世界の魔法を反射出来るかは不安だが、無いよりはましだろう。

目の前を炎が覆う瞬間、キンという音が部屋に響いた。本来なら俺を襲うはずの炎は反射され、ある境界線を境にその熱量をテンザンに向けていた。

「ぐ、グオオオオオ！」

自分が放った火炎魔法に全身をくまなく焼かれているテンザン。これでこの世界の魔法でも反射出来ることが証明されたわけだ。

「まだまだ！『ニブルヘイム』！」

絶大な冷気がテンザンを覆い尽くす。本来は氷柱が発生するほどの威力なのだが、俺が力をセーブしている為そこまでの威力は出ない。しかし、熱された外殻を急激に冷やすことが出来た。

「ガアアアアアア！」

「これで終わりだ！ペルソナチェンジ・ツール！『ゴッドハンド』」

氣とペルソナを纏った拳でテンザンを殴る。外殻が円形に陥没し、衝撃が亀裂となって全身の外殻を走る。全身の亀裂から一斉に外殻が崩れ出す。

「が、アアアアアアアアアアア……」

外殻の中から血まみれの中嶋教員がずりりと落ちる。恐らく亀裂が肉体まで切り裂いたのだろうが、あの出血量ではもう助からないだろう。四肢はズタズタでもはや動かすこともできないと思う。

野田さんかというと今も起きる気配が無いが、傷等はないようだ。これで少しは安心出来る。俺は野田さんを抱きかかえ、この部屋を後にする。扉が閉まる前に今まで何とか人の形を保っていた外殻が崩れ落ちるのが見えた。

俺はもう両親を失ったあの夜の頃とは違う。たとえ一人でも、助けることが出来たのだから。腕の中の命を確かめながら、悪魔に後処理を任せ俺は病院を後にした。

第14話 妄執（後書き）

とりあえずこれで『外道！テンザン編』が終わります。

次回は後日談と魔法世界についてです。

第15話 戦い（前書き）

後日談 + 『紅き翼』編です。

第15話 戦い

病院から出た後、俺は学園長の元へ向かった。今回の一連の騒動をどう隠蔽するかを聞きに行くためだ。恐らく真実が表に出ることは無いだろうが、それにしても同じクラスの子供が40名以上が居なくなれば何かと問題が多い。

学園長から返ってきた答えはこうだ。中嶋教員は普通は感染しない伝染病を偶然にも発症、それに気づかず子供達に授業をしていた。教室内はその伝染病の菌が蔓延した状態となり、一部生徒を除き全員が感染、その後感染者は病院に運び込まれた。その生徒達は抗生物質を投与されるも衰弱が激しく、結局全員死亡した。もう菌に対する特効薬は出来ているのでこれ以降は感染しても命の危険は無い等の事を表向きに発表するらしい。

明らかに不自然だが、中嶋教員の掛けた認識阻害の結界は恐ろしく強力らしく、被害者の関係者はその子が居たことすら憶えていない程だそうだ。魔王級の悪魔の魔力を使った為かも知れない。学園側は何とか記憶を戻せないかと手を尽くしていくとの事。

ネビロスの侵入を許した事から学園結界の強化案を出すことにしたらしい。もし次に強力な悪魔が来ても強化した結界ならば能力を半分程度にすることが出来るそうで、完成には最低でも二年程作業が必要らしい。うちの悪魔にはフェイクリングを着けさせており、アレを装備していると人間と同じ波長になるだとかで悪魔に判定されないようになるらしく、この結界によって悪魔と判定される事は無いだろう。……次にラジエルと会ったらもっと多く貰えないか聞いてみよう。

また、野田さんには軽い記憶操作を掛けるらしい。まあ最後の方はずっと眠っていたとは言え、あんな事を覚えている必要は無いだろう。ちなみに俺は既に魔法を知っていると言い、俺自身が忘れたくないと言ったらそのままにしてくれた。正直今回の事は忘れてはいけない気がする。

中嶋教員が受け持っていたクラスは解散となり、俺と野田さんはそれぞれ別のクラスに編入される事になった。まあ生徒2名じゃクラスと呼べないだろうし。

事情聴取や記憶操作等を済ませた俺達は、それぞれの家の帰路についていた。野田さんはもう病院でのことは憶えておらず、お見舞いに行ったことぐらいしか憶えていない。それでも俯いているのは友人の現状を悲しんでいるからだろうか？

しばらく歩くと、十字路にたどり着く。俺はこのまま真っ直ぐに進めばいいのだが、野田さんの家はここから右に曲がる必要があるので、ここで別れなければ行けない。

「じゃあ私こっちだから……」

「うん、また今度」

少しずつ離れていく彼女の姿を見送っていると、彼女はくるりと半回転してこちらを向いた。彼女は大きく息を吸い、大声でこんな事を言った。

「私は、本田君が、ずっと前から好きでしたー！ー！」

言い終えた彼女はぱつと背を向け走り去った。その顔は真っ赤に

なっているのだがそんな事は俺にはわからず、ただ夕日を背に固まるだけだった。

それから一年経った。急に来た俺は余りクラスになじめず、それほど親しい友人が出来ずにいた。最初の頃はいじめ紛いな事もあったが、すぐに雲散霧消してしまった。何とかギリギリで切れずに居られたのだが、どうにも少し殺氣が出てしまったようだ。これのせいで避けられているのもあるだろう。

野田さんとはクラスが違うが、交換日記をやっている。今の状態を一言で表すなら、友達以上恋人未満と言った所だろう。一部では付き合っていると言う噂も出ているが、まだそこまでは行っていない。それは一重に俺がヘタレだからだ。前世で告白なんてされたことが無く、正直混乱している。とにかく今は付き合う事はできないと野田さんを説得し、今の状況と相成った。ちなみに野田さんはこんな関係でもかなり喜んでいいる。本人曰く、

「振られるより全然良いよ」

との事。こんな心の広い回答を貰ったのだから、何とかこの状況に慣れてもう少し先に進みたいものだ。やはり恋人が居るか居ないかは大きいし、野田さんは結構好みだしね。

俺が学校に通っている頃、魔法世界では一大決戦を始めようとしていた。連合の重要拠点、グレートブリッジを帝国から奪還する為に連合が拳兵、現在はそれぞれが牽制しあい小康状態となっていた。

その連合の兵の中核にはかの英雄、『紅き翼』が集結していた。青山 詠春、アルビレオ・イマ、フィリウス・ゼクト、ジャック・ラカン等の錚々たるメンバーを率いる僅か14歳の少年、ナギ・スプリングフィールド。一部からは反感を持たれている者も居るが、それでも彼らの力により連合が持ち直したのも事実故、彼らが居るだけで友軍の兵士は士気をどんどん上げている。

「なあアル、今回の戦いはどう見る？」

慎重派な詠春はパーティの頭脳たるアルビレオの意見を聞いていた。

「そうですね、連合は私たちの参戦で士気が上がっていますからね。普通なら連合が勝つでしょう」

飄々とした感じのアルビレオはもうすぐ戦場となるグレートブリッジの方向を見つめている。

「ふむ、普通ならと言うのはどういうことじゃ？」

ナギが師匠と呼ぶ少年（？）ゼクトは怪訝そうにアルビレオを見る。

「あちらの方を見てください。恐らく旗が見えるでしょう」

アルビレオはグレートブリッジの方を指さし、そう言った。そこには宿り木の円の中に十字架の刻まれた盾が描かれた旗が風で揺れているのが見えた。

「ありや一体何のマークだ？帝国にあんな隊章の部隊なんてあったか？」

赤毛の少年ナギは思い当たるものが無く、良くわからないという顔をしている

「いえ、あれは帝国ではなく中立部隊の旗ですよ、ナギ」

「はあ？何で中立部隊が戦場のご真ん中で旗立ててんだよ？」

中立部隊の意図がわからず混乱するナギだが、詠春は何か気づいたのか顎に手を当てブツブツと何か言っている。

「なあアルよお、俺あのマークに見覚えあんだけど」

最強の剣闘士ラカンがアルビレオにそう言うが、その顔は少し引き攣っている。

「それはそうですよ、ラカン。何せあれは日用品から魔法具まで取りそろえる『仁条グループ』のマークですからね、知らない人はそこまで居ないでしょう」

アルビレオはそう言っていつものように微笑しているが、その笑い方はどこかいつもより堅かった。

「ムッ……その何とかグループがどうしたんだよ」

言外に無知だと言われたナギは少し不愉快そうだが、それでも何故二人が緊張しているのかわからずにいた。彼は経済や流通・物流等の事は余り興味が無い為、こういった事では会話についていけな

かつたりする。

「『仁条グループ』はこの戦争では双方に対して中立を保っているんだ。派遣しているのも医師団とその護衛部隊だけだしな」

「！医師団つてまさか例の……」

詠春の説明を受けやっと納得したナギは驚愕の表情でもう一度旗を見る。その言葉を続けるようにしてアルビレオが話す。

「ええ、『鉄壁の医師団』です」

『鉄壁の医師団』……あらゆる戦場に出てきては連合・帝国がまわすに助け故郷に帰すという、兵士達の間で噂になっている集団。攻撃した正規の部隊を一方的に蹂躪する程の戦闘力を持つ部隊が護衛についているらしく、たとえ戦場で彼らに出会っても、手を出すことだけはしてはいけないと言うのが前線の兵士の常識になっている。

「マジかよ……あいつらのせいで戦場で広域殲滅魔法使う奴が激減するほどの奴らだぞ」

「あやつらを巻き込んだら不味いからの」

『紅き翼』の戦い方は主に広域殲滅魔法等による電撃戦だが、今回の作戦では彼らを攻撃しないよう気を付けないといけないようだ。下手に攻撃して友軍に被害を出されてはたまらない。どうにも面倒な戦いになりそうだ。そんな事を話していると、一人の兵士が声を張り上げた。

「指令部より入電！『紅き翼』は帝国に味方する仁条グループの特
殊部隊、通称『鉄壁の医師団』を殲滅せよ！繰り返す、指令部より
……」

「……マジかよ、冗談じゃねえぞ」

「覚悟を決めましょう、ラカン」

この命令を聞いたラカンはズーンと頂垂れている。彼は一度『鉄
壁の医師団』に世話になったので余り戦いたく無いらしい。ついで
にその護衛部隊の恐ろしさを直に見たのもあるようだ。

「まあここで何を言ってもしょうがないじゃろ」

「出来るだけやってみるか」

ゼクトと詠春は特に思うところが無いのか準備をしている。詠春
が愛刀・夕風を持つ。

「しゃあねえなあ……いっちょ頑張るか」

「フフフ……」

自らのアーティファクト『千の顔を持つ英雄』を発動させ、手頃
なサイズの剣にするラカン。いつもより少し血の氣の少ないラカン
の顔につい笑いがこぼれるアルビレオ。

「……しゃあ！用意は良いぜ、いつでも行ける」

ナギが白いローブを羽織り、杖を掲げる。その動きを見た一般兵

は大地が震える程の雄叫びを上げ、天に剣を掲げる。これほどの土気の高さは中々見られるものではない。

そこに居るのは紛れもない英雄達。神話の中に名を連ねる英霊達に勝るとも劣らない現代の英雄。彼らはただ戦う。己の望むがままに、他に望まれるがままに。ただ英雄は剣を振るう。

「行くぜ……『紅き翼』、出陣ってな！」

だが彼らは知らない。この戦場には英雄を超える者が介入していることに。彼らを支えとする者の心を折る者が居ることを。されど幕は切って下ろされた。

グレートブリッジ奪還戦線、開幕

第15話 戦い（後書き）

またしばらく戦闘シーンだ……

なんかどんどんフェイクリングが万能便利グッズに……効果は能力ダウンなのに……

それとそろそろ書き溜めが無くなりつつあるので不定期更新になります。

第16話 英雄（前書き）

どうも遅くなりました。 ちょっと書き溜めがたまったのでしばらくは定期的な更新が出来そうです。

今回はオリキャラ視点で開始です。

第16話 英雄

戦況は今のところ連合側が優勢のようだ。まだ『紅き翼』の英雄達が控えているが、このままなら彼らに頼らなくても奪還出来そうだ。連合の魔法使いはそう思った。

だが帝国も手段を選んでいられる程余裕が無いのか、鬼神兵を投入してきた。普通は良い判断だと思うのだが、事この戦場においては悪手でしかないだろう。鬼神兵は知性を持たない為、細かい判断は難しい。味方はともかく中立の部隊を判別できないだろう。もし『鉄壁の医師団』を攻撃すれば……余り考えたくないな。

しかしそれはこちらでも考えられる事だ。連合の英雄『紅き翼』の戦法は広域殲滅による電撃制圧戦、もしこの余波が『医師団』に届いたらこちらに矛先を向けてくるかも知れない。……とにかく彼らの力を信じて戦うしかないか。

敵艦隊の精霊砲が隣の部隊に命中する。魔法障壁で軽減ぐらいはしているだろうが、やはり戦闘続行は不可能だろう。そんな事を考えて居ると、彼らは『医師団』の奴らに連れて行かれた。基本は良い奴らだから気にしなくて良いと判断して攻撃を再開する。

帝国の戦艦を魔法の集中砲火で落とす。これでうちの隊は合計十五隻落とした事になる。これだけ落とせば十分活躍したと言えるだろう。

部下達に撤収命令を出す。これから『紅き翼』が攻撃を始めるらしいから、前線に居るのは危険以外の何物でもない。彼―オルス・バーグマンはそんな事を考えながら、率いる部隊を下げ英雄の戦い

を後方で見ることにした。

「オラア！」

『雷の斧』が帝国の駆逐艦の右翼を破壊する。片翼を失った艦は制御を失い落ちていった。

「ラカン流必殺、斬艦剣！」

巨大な剣を振るい戦艦を切り裂くラカン。出撃前の暗い顔は何処へやら、喜色満面で戦っている。

「ナギ！鬼神兵が来ます！」

ナギに注意を促しながら重力魔法で鬼神兵を攻撃するアルビレオ。その後ろには奥義を放つ詠春の姿が見える。

「しゃらくせえ、マンマンテロテロ……『雷の暴風』！」

あんちよこを見ながらこの世界の雷撃系魔法の中でも高位に位置する広域殲滅魔法を放つ。今はとにかく帝国からグレートブリッジを奪還するのが先決なので、『医師団』に当たらないように気を付ける。もし今当ててしまえば、最悪挟み撃ちの形になってしまう。そのため、出来る限り気を付けて魔法を撃つ。

「むう、きりが無いのう。余りここで消耗するわけにはいかんのじやが」

「仕方有りませんよゼクト、本来はこちらが目的なのですから」

艦隊を前にして言う台詞ではないが、この後に控えている任務を考えるとあながち間違いではない。何せ今まで負けた事のない『鉄壁の医師団』が相手なのだ、下手をすればこちらが壊滅する可能性さえ有りえる。出来れば最高の状態で挑みたい。

「よつと、これで十二隻！……やっぱこっちの方が気が楽だな」

少し問題の有りそうな発言だが、ラカンの本気でそう思っている。一度とは言え助けられたこともあり、正直戦いたく無い相手だろう。

「おいおいジャック、ビビってんのかよ？俺たちは無敵の『紅き翼』だぜ？」

「無敵って言ってもあいつらとは戦ったこと無いだろ」

珍しく弱気なラカンを激励しようとするナギだが、ネガティブになっているラカンにはさほど効果が無いようで、血の気を失い顔を青くしている。

「……しかし、一大拠点の防衛艦隊にしては少し数が少ないような……」

「む、詠春もそう思うか」

怪訝そうな顔をする詠春とゼクトは、これだけの施設を守るにはあまりにも戦力が少ないと感じている。本来グレートブリッジには駐留している艦隊がこの三倍はあるはずなのだが、何故かこれだけしか出てきていない。普通はまずあり得ない状況が二人に漠然とし

た不安を宿らせる。

「ナギ、この戦況をどう見ますか？」

「そうだな……もしかしたら帝国は隠し球を持つてるかも知れないぜ」

「隠し球……ですか？」

「ああ、例えば対軍用広域魔法地雷とか固定型大出力精霊砲とかな」

現在このグレートブリッジには連合の戦力の大多数が集結している。もし固まった所でそんなものを使われたらほぼ壊滅するだろう事が目に見える。

「それを使ってから全軍での総力戦、とかはあるかもな」

「しかし広域用のものでは『医師団』を巻き込んでしまうのでは？」

「けどあいつら鬼神兵を出してきてるし、そこまで気にしてねえのかもよ」

実際帝国は『医師団』を攻撃するのを承知で鬼神兵を戦場に投入している。ここで広域殲滅魔法を使ってもほとんど変わらないだろう。

「ふむ……確かにあり得ない訳ではないのう」

「むっ！？おいナギ、敵本陣で何か動きがあるぞ！」

ゼクトがナギの意見について考えていると、詠春が叫んだ。驚いて敵本陣を見ると、そこには無数の魔方阵が空中に浮かんでいた。

「召還陣！？まさか奴らが狙っていたのは……」

「魔族を召喚してこつちとの戦力差を埋める気か！」

直後、召還陣を潜って大量の悪魔達が姿を現した。魔王級の悪魔は居ないが、大きいものは十数mを優に超える程で、鬼神兵程大きくはないが十分脅威になり得る。小さなものでも人間よりも大きいものがほとんどで、そんな集団が空を黒く染めていた。

「おいおい、これはちつとやり過ぎじゃねえか？」

「ビビってんなよ、ジャック！こんなもんコウモリかなんかだと思えば良いんだ！」

そう言ったナギもフルフルと震えている。それもそうだろう、何せ今まで戦っていた敵艦隊の約十倍の数があると思われる悪魔の軍勢だ。これを恐怖するなと言う方が無理がある。

だが彼らは引かない。ここで引けば味方がただ蹂躪されるだけだ。自分たちを頼りにしている彼らを見捨てる事なんて出来るはずがない。彼らは心の底から英雄だった。

「こつからは出し惜しみは無しだ！行くぜ！」

ナギが詠唱を始める。ラカンが剣を持つ。詠春が夕風を振るう。アルビレオが、ゼクトが魔法を放つ。その姿は前線の戦士達を奮い立たせ、後方支援の魔法使い達の心の支えになった。

「——『千の雷』！」

ナギの放つ『千の雷』が悪魔の集団に穴を開ける。倒すことの出来た悪魔は全体の数％に過ぎないが、その数％に彼らは一筋の光明を見出す。より多くの同胞を救うために、彼らは戦い続ける。

「オラァ！」

彼らの戦いは始まったばかりなのだから。

窓の外で雷光が弾ける。ベッドの上で横たわった魔法使いはただそれを見つめることしかできない。それが歯痒くて、悔しくて、彼は自分が情けなかった。

今の彼は酷い重症を負っていた。何せ彼には下半身が存在しないのだから。普通ならもう既に死んでいるはずだが、彼は『医師団』の関係者に見つけられ、適切な処置を受けた。故に今の彼は生きている。

「畜生……ちくしょう！何でこんな時に俺は動けねんだよ……ちくしょう」

悔しそくに歯を食いしばり、手から血が出るほど握りしめる。その目は戦場を見つめ続け、涙を流す。

何故俺は戦えない。同胞は今でもあの戦場で命を危険に晒しているだろう。

何故俺は立てない。死ぬのならせめて同胞の盾になるのだ、こんな所で寝ている場合か。

悔しさに身を焦がす彼の元に、一人の男が現れた。顔に布を巻き、白いマントに身を包んだ男。彼を助けたのもこの男だった。

「そう腐るんじゃない、傷に響くぞ」

「あんたか……俺の傷なんかどうだって良い、俺の命で仲間達が助かるなら喜んで捨てるさ」

この男になら本音を言っても良いと感じた彼は、本心をぶちまけた。彼の言葉に何の嘘偽りが無い事を悟った男は少し優しい目をして笑っていた。

「そういう心意気は嫌いじゃないが、せつかく助かった命なんだ、大事にするべきだろう」

「そんな事行つてられるか！俺達は戦争しているんだ！同胞の為、家族の為にな！」

彼はただ吠えるように言う。自ら戦いに身を投じ、帝国の侵攻で家族が傷を負った。ならば今更引き下がるはずが無かった。

「……あんたらに頼みたいことが有る」

「ほう、何かな？」

「あの戦いに介入してくれ！せめて同胞達だけでも逃げる時間を稼

いで欲しいんだ!」

それは本来なら無理な願い。中立を守る彼らにそれを破れと言っているのだから、普通は通るはずのない懇願だった。だが。

「……君もそういう内容か。全く、中立の私たち『医師団』に言うことじゃないだろうに」

「頼む!帝国の奴らなら条約を守って捕虜を殺したりはしないだろうが、あんな悪魔じゃ同胞が皆殺しにされちまう!せめてあの悪魔共だけでも……」

「……君、名前は?」

「……オルス、オルス・バーグマン」

彼―オルス・バーグマンは少し困惑しながらも言い切った。男は手元の書類に何かを書き込んだ様だ。

「私はこの『医師団』の護衛部隊の指揮官、スリジ・ブレイグだ。さて、君の願いのことだが私はだいぶ前に一つ約束をしていてね」

「約束……?」

「『連合・帝国問わずに千人以上の人間から同意を得られたらあの戦いに介入する』という、半ば賭のような物なのだが」

オルスの顔は未だ困惑の表情を見せている。

「今まで病室を回っていたらみんな同じことしか言わなくてな……」

君で丁度千人目だ」

スリジはそう言って病室を出て行った。残されたオルスはしばらく呆然としていたが、すぐに嬉しさで泣き出した。彼はただ「ありがとう」と繰り返していた。

第16話 英雄（後書き）

私が出すキャラは基本どこかに名前の元ネタがあります。検索したら正体がわかるかも？

次回は多分十月九日日曜日になると思います。

第17話 医師団（前書き）

筆が全然進みません……なのでしばらくは週一回、日曜日に更新となります。

今回はちょっと名前で暴走してしまったかも知れません。

第17話 医師団

主戦場であるグレートブリッジから約1kmの地点に有る仮設テント、それが『鉄壁の医師団』の拠点だ。大型のテントは千人近くを収容可能で、現在は約千二百人を収容している。

そのテントの一角でスリジ・ブレイグは書類に目を通していた。内容はグレートブリッジへの武力介入、署名が連合・帝国問わず合計千二十五人。これだけの署名が有るのなら『第三者からの要望』で通せば問題無いだろう。

書類を机に置き、念話で部隊に指示を出す。立てかけておいた自分の槍を持ち、副官を呼ぶ。

「クルス、ちょっとこちらに来てくれ」

「どうかしましたか？」

白いコートに黒い長髪の男性、クルス・タルボシュがこちらに歩いてくる。彼はこの部隊の副官で、優秀な魔法使いでもある。

「何、少し悪魔退治でも思ってたね。この書類を見てくれ」

「これは……なるほど、介入するんですか。しかし仁也様の許可は取りましたか？」

「仁也殿には『第三者からの要望』には出来るだけ応える様にと言われている。これは『第三者からの要望』と取ることが出来るだろうし、千人以上の署名が有るものを無視する訳にもいくまい」

「……それは屁理屈では？」

微妙な理屈をこねる指揮官に呆れるように言うクルスだが、悪魔を退治すること自体には異論が無いようで、自前の剣を用意して戦闘準備をしている。

「して、敵の規模は？」

「総数十五万の大軍勢だな。八割ほどは下級魔族なので問題無いが、残り二割が問題でな」

「その二割の内訳は？」

「爵位級の悪魔を数体に、大型・中型の魔獣が多数。これほどの悪魔は帝国の想定外だったそうでな、一部の帝国兵が生け贄として殺されたそうだ」

実際帝国側の署名のほとんどがこの悪魔の暴走を止めて欲しいと言う動機だった。ちなみに上層部はこの時悪魔共に皆殺しにされ、現在の帝国軍は爵位級悪魔が操っているらしい。

「なるほど、わかりました。では行きましょうか」

「おや、止めないのか？」

「敵の規模を聞いておいて今更引くわけ無いでしょう。それに……」
言いながら腰の剣に手を置き、ニヤリと笑うクルス。

「悪魔退治は私の専門ですよ？悪魔が悪事を働くのならそれを止めるのが私の役目ですから」

「そうだったな、オマエはそういう奴だった。……さて、行くか」

槍を担いで外に向かう。既に一部部隊は戦っているのだ、指揮官が遅れては笑われる。

英雄を助ける為に隻眼の槍兵と十字架の狩人は走り出す。

「喰らえ、『雷光剣』！」

詠春が敵集団中央に奥義を放つが、下級魔族が十数体消えただけで敵の勢いは止まらない。

「ちい、こいつらちよつと多過ぎねえか！？」

そう言うラカンの元には数十体の魔獣が集まっている。いかに魔獣退治の専門家といえどこれだけの数の魔獣を相手にするのは困難だ。

「そろそろ魔力が尽きてきたのう」

「これほどの戦いになるとは思いませんでしたよ」

アルビレオとゼクトは無数の下級魔族に囲まれている。的確に『魔法の射手』を当てて凌いでいるものの、既に魔力がほとんど残っていない二人は防戦一方だった。

「この、『雷の斧』！」

まだ少し余裕のあるナギの元には爵位級悪魔を中心に数十体の下級魔族が押し寄せている。大技を出さないようにしながらなお善戦するその姿はまさに英雄のものだった。

既に一万を超える悪魔を殲滅したが、敵は止まることなく進軍してくる。こちらの部隊はほぼ壊滅に近くこのままではいつ前線が崩壊するかわからない。

「おいナギ、少し後方に下がるぞ！」

「応、わかったぜジャック！」

傷が深くなってきたラカンが後ろに下がり、彼が抑えていた魔獣がこちらに向かってくる。牙をむいて突っ込んでくる魔獣達を『雷の斧』でなぎ払う。何体かは倒せたものの、それでも数はほとんど減らない。

「ちい、面倒くせえ！——『千の雷』！」

広域殲滅魔法で敵の数を減らそうとするも、魔獣達の数はほとんど減らない。既に七割近く魔力を使っているのでもっとも威力が出ないようだ。

魔獣の牙がナギに迫る。虚空瞬動を駆使して回避するも、今度は無数の魔法が飛んでくる。障壁で防いだら魔獣の前足で殴られた。

「っ、この野郎——『魔法の射手』！」

無数の矢が魔獣達に襲いかかる。……何体かは倒したがそれだけだった。魔獣達は未だ数百を超え、こちらは全滅寸前。撤退しようにもこの状況では背中から撃たれて終わってしまう。

（打つ手無しって奴か。このままじゃ不味いな）

既にこちらの半数が戦闘不能となっている。死者が出てないのは『医師団』の奴らが逐一回収して適切な処置を執っているからだ。悪魔共はあいつらに仕掛けたりもしているが、『医師団』の奴らは迎撃するだけで積極的に攻勢に出たりはしない。

ナギがそんな事を考えていても悪魔達は止まらない。下級魔族には『魔法の射手』を使い、魔獣に対しては『雷の斧』で確実に倒すことを心がける。少しでも魔力消費を抑えるためだ。

「こんな所で、死ねるかあ！——『雷の暴風』！」

大技を撃って穴を作ろうとするも、敵の魔獣を一体倒したところできき消えた。疲労で威力が落ちているようだ。大技を撃つたせいで少しの隙が生まれてしまい、そこを魔獣達が逃すわけが無く、今まさに魔獣の爪がナギを引き裂こうとしていた。

（ここまでかよ……畜生）

「ナギ！」

アルビレオがフォローに入ろうとするがもはや間に合わない。ナギは死を覚悟し、目を閉じた。

その時、何か硬いもの同士がぶつかる音がした。

「目をつぶる様ではまだまだヒヨッコだな、ナギ・スプリングフィールド」

「は？」

思わず目を開けたナギがまず見たのは、顔。白く長い布で覆われた顔で、左目に眼帯をしている。右手に持った槍で魔獣の爪を受け止めている。

次に見たのは白いコートを着た長い黒髪の男。手には剣を持ち、今まさに魔獣を斬ろうとしているところだった。さらにその後ろには青銅の鎧を着た巨体の戦士達が武器を手に悪魔達に襲いかかっている。

「まあよく頑張ったと言ったところだろうな」

「誰だテメエ？」

「……仁条グループ派遣医師団、通称『鉄壁の医師団』護衛隊隊長のスリジ・ブレイグだ。よろしく」

軽く挨拶をするとスリジは魔獣の爪を受け流し、そのまま頭を槍で貫いた。魔獣はしばらくビクビクと動いていたが、やがて動かなくなかった。

「……何で『医師団』の奴らが介入すんだよ、テメエらは中立じゃねえのか？」

「連合と帝国、両軍の兵士からの要望でね。会長から助けたものの要望は出来るだけ聞くように言われているのさ」

飄々とした感じで受け答えるスリジに少し拍子抜けするが、すぐに気持ちを切り替える。

「援軍……てことか？」

「そういうことだ、まあ戦力になるかは知らんが」

そんな事を言いながら槍で悪魔を蹴散らすスリジ。明らかに言動と行動が一致していないが、その姿はどこか頼もしい。

「下がっていると良い。少し休めば魔力も戻るだろう」

「へっ……頼むぜ、二十分で戻ってくるからな！」

これだけの部隊なら二十分は持つと考え、魔力を回復するために後方に下がる。

「詠春！アル！お師匠！少し下がって休むぞ！」

「しかし、良いのかナギ！彼らは……」

「今はとりあえず魔力を戻すのが先決だ」

とにかく魔力が戻らないときついからな、魔力が回復したらすぐに戻ってこよう。そう思って『紅き翼』の面々は後退した。

「さて、始めるか」

『紅き翼』を見送ったスリジは敵悪魔達を見る。余り強力なものは居らず、精々Lv20〜30と言った所がほとんどだ。爵位級悪魔や魔獣でさえ強くて40台と驚くほどに弱い。が、それでもこの数は十分脅威になり得るものだ。何せ空が黒く染まるほどの数、これと戦い続ければ疲労するのは当然だ。

「全軍進撃！魔獣には最低でも二人以上で当たれ！」

青銅の鎧を着た戦士、ティタンの部隊に指示を出す。ティタンは最低でもLv35あるから下級魔族には遅れは取らないだろう。後衛部隊の青いローブの女性達、ローレイは皆簡単にだがこの世界の魔法を使うように訓練してある。これで無闇に疑われることは無いはずだ。

「クルス、ガッツは私と敵陣に乗り込む！ヴァティは援護を！」

「わかりました」

「さて、やるか」

「任せてください！」

俺を中心に護衛部隊の幹部を引き連れ敵陣に突っ込む。クルスとクルースニクもガッツことベルセルクもLv50越の強者、この程度の相手に遅れを取ることは無い。後衛のヴァティことサラスヴァティでさえLv48もあるので、たとえ彼女が狙われたとしても問題無い。

「オラア！」

黒い熊の毛皮を被ったガッツが剣を振るう。振り終わるとそこには十数体の悪魔が真つ二つになっていた。切れ味の悪い剣で切っているからか、傷口がズタズタだった。

「受けなさい、『マハブフーラ』！」

ヴァティが曲を奏で、強力な冷気が魔獣を凍らせ、砕く。バラバラに砕け散った魔獣のなれの果てを見て悪魔達は後ろに下がる。

「邪魔です、『天扇弓』！」

クルスが一言唱えると、無数の矢が光を纏いながら扇状に飛んでいく。貫かれた悪魔はもがき苦しみながら光に包まれ消えていく。

「さて、私も頑張るか」

槍を手に走り出すスリジはすれ違いざまに悪魔を切り裂いていく。

戦いはもうすぐ峠を迎える。

第17話 医師団（後書き）

スリジの理論が屁理屈臭いですが、そこは目を瞑っていただきたいです。

次回更新は十月十六日の予定です。

第18話 戦場（前書き）

ユニークアクセス50000突破！皆さんありがとうございます！
今後も頑張って行こうと思います。

第18話 戦場

戦局は確実に連合側が優位になった。『医師団』の護衛部隊が介入した結果、『紅き翼』が後退したにも関わらず連合側が押し返している。

これを受けて後方で士気を取る爵位級悪魔達是对策を立てる会議を始めた。

「……この戦況、どうなされますかオセ殿？」

「ふむ……敵部隊は主に重装歩兵、固まった所に氷結魔法で動きを止めるべきかと」

「なるほど、では私が『ブフーラ』を撃とう。他には……」

三体の悪魔が話し続ける。そこに居るのはこの集団のトップの悪魔達。豹の頭と人の体のオセ、コウノトリの頭を持つシャックス、そして無数の人の頭を持つダンタリアン。彼らは今回呼び出された爵位級悪魔達の中でも特に上位の悪魔だった。Lvはバラバラ且つ差が激しいが、それでも彼らは自由と勝利の為に作戦を練る。

彼らの後ろにはそれぞれの直属の部下がついており、その中には角のねじれた無機質な顔の悪魔も居た。

「ではこの作戦で行きましょうか」

「ええ、このままやられ放しでは終わりませんよ」

そう言って悪魔達はそれぞれの目的地に散っていった。

「ハッ！」

スリジが槍を振り、悪魔達を蹴散らす。魔法を使っても良いのだが、主人から出来る限り使わない様にしろと言われている。今は部下の三人から離れ一人で数百体の魔獣を相手にしている。

指揮官から離れた三人はそれぞれをフオローしながら敵を倒し続けている。

「オオオオオオ！」

一人で数百体の悪魔を切り裂いて進むガッツの姿はまさに伝承の『ベルセルク』そのもので、敵はその姿に萎縮しているようだ。

「『天扇弓』！」

クルスは得意の『天扇弓』を使い効率よく悪魔を消していく。元々は吸血鬼ハンターだったからか、その手際の良さは目を見張るものがある。

「『マハガルーラ』！『マハラギオン』！」

ヴァティは潤沢な魔力で広域魔法を撃ち続けている。彼女は複数の属性魔法を習得しており、相手に応じて使い分けるオールラウンダーだ。

大型の魔獣が飛びかかってくるが、ガッツに切り裂かれ、ヴァテ
イに焼かれ、クルスに蜂の巣にされる。どうにもこのLv差では楽
勝ムードが漂ってくる。

「どうしたどうしたあ！まだまだ始まったばかりだぜ！」

「落ち着きなさいガッツ、私達の目的は飽くまでも時間稼ぎですよ
？」

「別に私達が倒してしまっても良い気がしますけどねえ」

あまりにも余裕なせいか雑談を始めるクルスとヴァティを尻目に、
ガッツは悪魔を切り続ける。『技』を使わず、ただ純粹な『力』で
切るため、苦痛に顔を歪める悪魔達。

「……正直拍子抜けだな、弱すぎて話にならねえ」

「仕方ないでしょう、私達と比べる事自体が間違っています」

ただでさえLv差が激しい上に、彼らは全員歴戦の勇士。この程
度の悪魔にやられるはずが無い。

「じゃあねえ、次は……何だありゃ」

ガッツの目に映ったのは、一塊になった所へ氷結魔法の雨に晒さ
れているティターン達の姿だった。氷結魔法を撃っているのは鳥の
頭の悪魔で、奴だけ別格に……そう、別格に『弱い』。明らかにテ
イターン達よりも弱いのだが、恐ろしく早い速度で動き一方的に攻
撃している。攻撃が来ると届かない場所に動き、死角について魔法
を放つ。それはまさに『死なない』為の動きだった。敵を倒すため

では無く、自分が生き残る為の行動。ティターンは自ら仕掛けてきてのその動きに意味がわからないのだろう、全く動きを捉えられていない。

「マジかよ、こんな所であんな奴に会えるとはな」

「あれは補助魔法を使って限界まで回避力を高めていますね」

「精々Lv十代後半なのによくやるわねえ」

こんな状況を見ても談笑している三人の心には、もはや余裕どころか油断が出来ていた。それは戦場では致命的なものだ。もしスリジが居れば彼らに注意をして隙を無くすだろうが、指揮官である彼は今はただ一人で魔獣の群れに立ち向かっている。……そして、こんなチャンスを逃す馬鹿は居ない。

「……受けよ、『ベノンザッパー』！」

「……！」「……」

不意を突かれた三人だが、間一髪のタイミングで回避に成功する。毒気を纏った斬撃波が地面を抉り、腐らせる。もし直撃していればただでは済まなかっただろう。

「……あの状態でこれを避けるか。やはり規格外だな」

そこに居たのは豹頭と双剣の戦士、堕天使オセ。今回呼ばれた悪魔の中で最強の存在。だがそれでもなお一回り近くの実力差がある。

「はっ、ようやく気骨のある奴のお出ましか。クルス、ヴァティ！」

「こいつは俺がやるぞ！」

「別に良いですが……相手は限界まで補助魔法を掛けていますよ？」

「上等！」

剣を構え、戦闘態勢を取るガッツ。それに呼応するかの様に構えるオセ。二人の間に不思議な空気が流れている。

「全く、気を付けるのですよガッツ！私はティターン達の援護に回ります！」

そう言いクルスは一方的な攻撃を受けているティターン達の元へ向かった。そろそろ不味い事になってきているようだ。

「……私だけ相手が居ないわ」

「では、私がお相手いたしましょうか、レディ？」

「あら、こんな所にもう一人いたのね」

一人手持ちぶさたなヴァティの後ろに無数の首を持つ堕天使、ダンタリアンが現れる。やはりLv差が激しいのだが、ダンタリアンはどこか余裕そうな顔をしている。

「残り物同士、仲良くしませんか？」

「……随分と失礼な人ね。良いわ、遊んであげようじゃないの」

ヴァティが楽器を構え、ダンタリアンが本を開く。二人の間に魔

力が渦を巻き、一触即発の状態だ。魔力にも甚大な差が有るはずだが、何故か二人から立ち上る魔力は拮抗している。

「……貴方もドーピング済みなの？面倒ね」

「何と言われようと、私達が貴女方に勝つにはこれしか無いのですよ」

ダンタリアンの余裕の裏には自らに掛けた無数の補助魔法という存在があり、実際に彼とヴァティの間には出力的な差がほぼ無くなっている。これだけのドーピングをすれば肉体に掛かる負担も相当だろう。

「それだけの覚悟をしているのなら、手を抜いては失礼ね。……最初から全力で行くわよ」

「結構、私も余り時間が残っていないのですよ。始めましょうか」

今、激戦が始まろうとしている。

「……ここって外周部とは言え戦場だよな」

「そのはずですが……これでは信じられませんね」

今、ナギ達『紅き翼』は『医師団』の拠点である仮設テントで休憩しているのだが、そこはあまりにも平和だった。帝国・連合構わず自分達の事を話し、笑い合っている。それは戦時下においてあまりにも異常な光景だった。

「なんだこりゃ？何でこんなに和気藹々としてんのこいつら？」

「落ち着けジャック、まずは飯をだな」

「貴方も落ち着いてくださいナギ」

あまりに非常識的な光景に驚いて混乱する一同。正直何が起きているのか良くわからない。

「すみません、『紅き翼』の方々ですか？指揮官のスリジより案内を任されたものですが」

青いローブで頭まで隠した女性が、申し訳なさに近づいてくる。

「あ、どうも。……少し聞きたいのですが、この雰囲気は一体？」

「？……ああ、実はある兵士さんがスリジ隊長に『千人以上の同意が合った場合、悪魔達を殲滅する為に戦場に介入する』という賭を持ちかけまして。その条件が奇跡的に通ってしまったんです。その後同意した人達が泣き出すほど盛り上がってしまい、お酒が入ってしまったてからはもう帝国も連合も無しで騒いでたんです。ここに居る人達はもうみんなお友達みたいな感じですね」

「……」

あまりの理由に何も言えなくなり、ただ疲れた目で遠くを見ている『紅き翼』の面々。戦争もこんなに簡単に和平を結べたらどれだけ良いことか。そんな考えが彼らの脳裏を全速力で走り去った。

「とりあえず私についてきてください。休憩室へお連れします」

そのまま女性に連れられて行く英雄達。半ば放心状態の彼らは端から見ればただの間抜けだろうが、これだけ普通ではあり得ない状況にたたき込まれれば誰だって放心するだろう。

「こちらになります。魔力を回復する為の魔法薬も有りますが、まずは心を落ち着けなければ魔力が有っても戦えませんかね」

案内されたのは必要最低限の物しかない簡素だが広い部屋だった。しばらくはここで疲れを癒し、心を落ち着けるといいう事らしい。小さなベッドが五つ置いてあり、そのうち一つに早くもラカンが倒れ込んだ。

「おいラカン、少しは警戒をだな」

「大丈夫だろ、俺は一回ここに世話になったけど特に何も無かったぜ？」

不用心なラカンに注意するように言う詠春だが、ラカンは一度世話になってから安全に関しては全幅の信頼を置いているらしく、気にするつもりはなさそうだ。

「とにかく休みましょう、あまり彼らに任せ過ぎるのも不味いですし」

「そうだな。あの数は援軍有りでもきついだろうから、早く戻つてやらないとな」

そう言ったナギは目を閉じ、心を落ち着ける為に瞑想を始める。

今も戦場で時間を稼いでくれているスリジ達の事を考えながら、意識を少しずつ落ち着ける。

彼らの参戦まで後十三分。

第18話 戦場（後書き）

……なんか敵の方が強敵に立ち向かって感じになってしまっなあ

Lv差酷いから仕方ないのかも知れないけど

次回更新は十月二十三日の予定です。

第19話 激戦(前書き)

皆さんご迷惑お掛けしました。何とかPCの調子も戻り、このまま週一回更新で続けられそうです。

第19話 激戦

音が聞こえる。金属を打ち合わせる様な重厚な音が、肉が裂け血が吹き出すような音が聞こえる。戦場にふさわしきその音は、ただ一人の男が作り出していた。男の名はスリジ・ブレイグ、部隊の指揮官である。彼が手に持つ槍を振るって、音を出していた。

魔獣の爪を槍で払い、その勢いを使って切りつける。それだけなら槍の達人達には造作もないだろう。だが。それが数百を超える魔獣の猛攻の中で行われているのならば、話は変わってくる。完璧で無駄のない動きでなければ、魔獣に隙を突かれて傷を負うだろう。本来ならばそれが普通だ。しかし、彼にそれは許されない。

指揮官を失えばいかに無敗無敵の部隊といえど総崩れとなる。だからこそ指揮官はどんなに強くても前線には出てこないのが常識だ。だが彼は戦いで「指揮官だから」という理由で自分だけ安全な場所に居るのが我慢出来なかった。それ故に彼は部下に慕われ、この部隊の代表者を任されているのだから。

故に彼は傷一つ無く、最小限の被害で勝たなくてはならない。指揮官が負傷すれば誰かが気に病み、迷いで動きが鈍くなるだろう。それは新たな負傷者を生み出し、関わる者に迷いを伝染させる。最後には誰も動けなくなり、部隊は機能しなくなるだろう。それだけは避けなくてはならない。

「鬱陶しい数だな、少し手札を切った方が良いか」

あまりの猛攻にうんざりしながら――しかしそれでも全てを槍で払っている――気怠そうにスリジは言う。瞬間、魔獣の包囲網から抜け

出す。

「……ムウン！」

槍に気をありったけ込めて、先程まで自分の居た辺りを貫通するように投げる。槍はすぐに音速を超え衝撃波を出しながら突き進む。槍に貫かれた悪魔が何もわからずに消え、次いで衝撃波を喰らった下位の魔獣が消し飛ぶ。それは圧倒的な破壊を撒き散らしながら何処かに飛んでいった。しばらくすれば摩擦熱で燃え尽きるだろう。

だが、魔獣達はまるで待っていましたと言わんばかりにスリジに飛びかかる。今まで自分達を阻んでいた槍をわざわざ相手の方から捨ててくれたのだ、これほどのチャンスは無いだろう。

それが彼らの命運を分ける行為だと気づかず、魔獣達はスリジに向かって突撃する。彼らは、スリジが『魔法使い』だと言うことを知らなかったのだ。

「——『魔法の射手 連弾・雷の1001矢』！」

それは魔法使いならほとんどが使える初歩の魔法。だが、これだけの数を扱うとなると高位の魔法使いでも至難の技だ。当然制圧力は比べものにならず、眼前の魔獣達は無数の矢に貫かれ消えていく。一瞬躊躇した魔獣や様子見をしていた悪魔達は何とか致命傷を免れたが、それでも流れ弾を喰らってダメージを受けている。残ったのはおおよそ四割と言った所だろう。

「……さて、残党狩りといこうか」

魔力を滾らせるスリジは残った悪魔を見て、一言そう言った。

英雄の帰還まで、後十分。

「オラア！」

「ちい、『ベノンザッパー』！」

力の限り剣を振るうガッツの猛攻をギリギリで凌ぎ、オセが『ベノンザッパー』を放つ。毒気を纏った斬撃はガッツの一振りで切り払われる。

「馬鹿な！我が奥義『ベノンザッパー』がこんなに簡単に！？」

「はっ！こんなもん慣れりやあなんてこたあ無え！さっさと次の手を出さなきゃ死ぬぜ？」

「……！」

自らの誇る大技をいとも簡単に無効化され驚きを隠せないオセとは裏腹に、まだまだ余裕なガッツは軽い挑発をする。挑発されて頭に來たのか、怒り心頭といった風に氣と魔力を全開にするオセ。

「どうした、早くしねえと……こっちから行くぞ！」

相手が全力を出したことを確認し、歡喜の表情を浮かべるガッツ。彼は元々狂戦士、強い相手との戦いを何よりも望むバトルジャンキーが彼の本質。この任務も定期的に戦えるからという理由で彼自身が志願して参加した。そして、目的のものは今、目の前にある。

「骨の髄まで……斬り合おうぜ！」

英雄の帰還まで、後七分。

「くお、ぶ、『ブフーラ』！」

無数の杭のような矢を避けながら、得意の魔法を撃つシャックス。だが、それはあまりにも無意味。

「……流石にこの程度では脅威にはなりませんね」

Lvの開きが40近く有り、敏捷性に全てを掛けた彼の魔力は一般魔法使いとほぼ同じ程度しかない為、どんなに頑張っても彼ではクルスに致命傷を与えることができない。

かといってクルスが圧倒しているのかと言うとそれも違う。彼の得意とする技『天扇弓』はシャックスに擦りもしない。元々敏捷性の高いシャックスが、補助魔法によってさらに機動力を上昇させており、その動きはまさに風そのもの。

「どうにも相性が悪いようですね、お互いに」

「そ、そのよう、だな」

ちなみに会話中にも『天扇弓』は放たれており、端から見たらどう見てもクルスが優勢である。実際はお互い相手を倒せない悲しい戦いなのだ。

英雄の帰還まで、後六分。

「『ブフーラ』！『ジオンガ』！『アギラオ』！」

「『ザンマ』！『ガルーラ』！『マグナス』！」

冷気が衝撃波とぶつかり、雷が竜巻を貫き、業火が岩石に潰される。無数の魔法のぶつかり合いは辺りを焦土に変え、さらに激しさを増してゆく。

「……意外にやるわね、実力差はかなり有るはずなのだけれど」

「こちらは命をかけてますから。……それでも互角以下というのは流石に理不尽だと思えますがね」

そう言うダンタリアンの口から血が流れる。無茶苦茶な補助魔法が彼の体を蝕んでおり、あまり長時間は戦えない。肉体的な限界も近いのだろつ。

「……あまり時間を掛けるのは不味いですし、少しペースを上げますか」

「まだ上げられるとは……恐ろしい人だ。なら私も切り札を切りましょう」

ヴァティが楽器を構え、ダンタリアンが魔導書を開く。魔導書の名は『メルキセデクの書』、最高の魔導書の一つである。

「なんで墮天使の貴方が大天使の魔導書を!?」

「何、墮ちる前に写本を一冊いただいていただけです。許可は取りましたしね」

メルキセデク本人から許可を得てもらっておいた、まさに切り札である。下手に使えば魔力の暴走で死んでしまう程の危険物だが、そのリスクに見合うだけの力を手に入れる事が出来る。

「これだけの力が有れば貴女にだって勝てますよ、ヴァティさん」

「……良いわ、そう思うなら勝手に思ってなさい。まずはそのふざけた考えから『調律』してあげるわ!」

ヴァティが楽器に手を掛け、複数の魔法を同時に放つ。命中したかと思われたその時、障壁がその全てをかき消した。膨大な魔力で編まれたその障壁は恐ろしく強固なモノで、恐らく大抵の魔法ならば簡単に弾いてしまうだろう。

「ハハハ、どうにも立場が逆転したようですね! 受けなさい、『ジオダイン』!」

それは悪魔の使う電撃魔法でも高位の魔法。五つの魔法を一瞬でかき消し、極大の雷がヴァティの顔をかすめ、一拍置いてから轟音を響かせる。

「アハハハハ! なんて素晴らしい力だ! これほどの力があれば、神にだって勝てる! 勝てるんだ!」

自らの力に酔いしれ狂喜乱舞するダンタリアン。だが彼は自らが血涙を流している事に全く気づいていない。自らの器以上の力を強引に流したためか既に全身がズタズタになり、そこかしこから血を流しながら笑い続けている。既に彼は力と狂気に取り込まれ、自我が崩壊しかけているようだ。

「……力に飲み込まれるなんて馬鹿みたいねえ」

「!? 貴様、今私を愚弄したな! 許さない、ユルサナイユルサナイイイイイ!」

適当に思った事を口にしたら全速力でこちらに向かってきた。そもそも魔力特化の彼は格闘戦の技術は素人同然なのにこちらに突撃してくる所を見ると、もはや冷静な思考を持っているとは言えないだろう。

「この程度の速度なら回避は余裕よ、もっと頑張るのね」

「ウガアアアアアアアアアア!」

段々と肉体が崩れだしているが、目の前の敵以外は眼中に無いのかただ突っ込み続けるばかりだった。もはや彼はただ敵を打倒する為の機械のようになってしまった。既にメルキセデクの写本は持つて居らず、どこかに落としたようだ。

「力にばかり気を取られ過ぎたのね……紳士的な態度は割と好印象だったのに」

そう言ってヴァティは突撃を回避しながら楽器を奏でる。奏でるのは滅びを司る万魔の旋律。それは彼女に許された最高の魔法。

「――『メギド』!」

辺りに極光が広がり、次いで膨大な衝撃が走る。中心地にはダンタリアンが居り、この理不尽な破壊の衝撃を最も強く受けていた。

「……!」

極光の魔力が臨界まで輝いたとき、ダンタリアンは笑っていた。次の瞬間、光が弾け後には何も残らなかった。純粹な破壊は後に何も残さないのだ。

「ふう、やっと終わったわ。魔法使いすぎて魔力無くなっちゃたし、戦線復帰は無理そうね」

ダンタリアンとの戦いで彼女が放った魔法は数え切れないほどで、さらに魔力を大量に消費するメギドを撃った事で魔力を使い切ってしまったのだ。既に意識を保つだけでも辛いのだろうが、彼女はまだ倒れる訳にはいかない。

「さて、例の魔導書を探そうかしら。下手するとあれで戦争起きかねないし」

魔導書といえど大天使が書いたモノの写本となれば、宗教団体・魔法国家の両方から狙われる可能性がある為、最低でも回収する必要がある。回収したら自らの主に丸投げすれば良い。

「頑張つて探すわよ」

英雄の帰還まで、後五分。

第19話 激戦（後書き）

今回はちょっとアンケートをとります。

仁也からネギに『力』を与えようと思っており、その内容の候補も大体決まったのですが、どれにするか迷っています。もしネギに与えるとしたら次の内どれが良いですか？

- 1 バランスの良い光
- 2 雑魚に強い闇
- 3 広域殲滅の王
- 4 一点突破の兵

最も得票数の多いものを採用します。

締め切りは次回更新の十月三十日までです。

第20話 復帰（前書き）

アンケートの方は結局どれも選ばれませんでしたね……

仕方ないので一番話を作るのが楽な「光」で行こうと思います。

第20話 復帰

無数の矢が空を切る。一本一本に必殺の威力を宿し、空を舞う鳥を射貫かんと迫るも、常に紙一重で避けられる。既にこのやりとりが十五分近く続いていた。

「埒があきませんね、どうしたものか……」

クルスが無数の矢を放ちながら考える。どうすれば相手を倒せるか、命中さえすれば問題無いのだが相手は補助魔法で極限まで敏捷性を高めている。生半可な攻撃は恐らく擦りもしないだろう。

「ぐ、が、ぎ」

一方シャックスはと言うと、飛来する矢を避けながらどうすれば良いかを考えていた。明らかにクルスの方が楽なのだが、その点には突っ込まない。

シャックスが得意とするのは主にその敏捷性を生かしたヒット＆アウェイ戦術だが、これだけの弾幕を張られていては避けることに手一杯だ。この上でさらに早く動くのならばより強力な補助魔法が必要だろう。自らを犠牲にすれば手傷を与えることも出来るかも知れないが、それで倒せるかと考えると不安がどうしても残ってしまう。だがそれ以外でこの状況を打破する方法はない。

「こうなれば、一つ、賭をするしか、無いか」

彼は自らの命を賭けた大博打を打つことにした。彼は自らの限界を超えて加速する。空気抵抗と無茶な機動に肉体がミチミチと悲鳴

をあげる。

(！……何をするつもりだ？)

『天扇弓』を放ち、剣を抜いて迎撃態勢を整える。既にシャツクスの動きは彼自身の限界に近づいており、その速度で矢の弾幕に突っ込む。

「まずは、『ブフーラ』あ！」

先ほどから使い続けている得意の氷結魔法を放つ。それは目の前の弾幕に命中し霧散するが、十数本の矢の軌道を変える事に成功していた。それにより出来た空間を利用し減速せずに弾幕を突破しようとする。軌道の変わらなかつた矢が彼に襲いかかるが、着弾点を咄嗟に見極めて自ら肉体を切り離す。

「な……！？」

クルスの驚愕も仕方がないだろう、先ほどまでの『死なない為の動き』を捨て弾幕の中を突っ切つて来たのだ。しかも自らの肉体を切り捨てながらなお加速し続けている。腕を、脚を失いながら確実に近づいてくる。その動きはまるで慣性を無視したかのごとく不規則な軌道を描いていた。

「ちい！『残影』！」

ほぼ接触すると言う瞬間、影を切り裂く無常の剣技『残影』をたたき込む。本来は新月時に使うべき技だが、彼にはこれ以外の接近戦用の技が無い為に使った。

乾坤一擲の一撃を受けたシャックスは既に袈裟懸けに切り裂かれており、今までの負傷も合わさり今正に消えようとしていた。だが、その瞳は憎しみの他にまだ何かを隠しているようだった。

「まさか私に剣を使わせるとは……恐ろしい執念ですね」

「……なめるなよ十字架の戦士よ……まだ終わりではないぞ」

シャックスが小さく呟き、その口が何かの呪文を紡ぎ出す。やはり死にかけているのだろう、声が小さく聞こえない。

「……汝に……呪い……あれ」

シャックスが血涙を流しながら消えていく。最後の言葉を聞いたとき、クルスの肉体に見えない鎖が巻き付いた。それは最後の力を振り絞り紡いだ最悪の呪詛。

「ぐ、ガアアアアアアアアア！」

対象の力を吸収し、その力により魂に激痛を与える魔の絶技。完全な拘束と無慈悲な拷問を掛け合わせた外道の法。そして力を奪われたクルスは橋の上で転げ回っている。

「やられましたね、こ、れだけの、拘束力、では、しばらく抜けられそうに無いっ」

全身に流れる激痛に顔を歪めながら一人愚痴るクルス。恐らく四十分もすればこの呪詛は効果を失うだろうが、今の彼には一般魔法使い程度の能力しか無く、この状態ではただの足手まといだ。

「ハハ、どうにも格好つきませんね……隊長、後は任せますよ」

何処に居るのかもわからない自分の上司に向かってそう呟くと、クルスは意識を手放した。

英雄の帰還まで、後三分。

橋の中央部で二人の戦士が戦っている。重厚な刃を振るうガッツと双剣による連撃を得意とするオセの二人が、全力で打ち合っていた。近くの魔族はそのプレッシャーに耐えられず近づけない。

「やるな手前え、久々の良い勝負だ！」

「限界まで強化した私とここまで戦えるとは……やはり貴様は規格外だな！」

「ハッ、俺らの隊長は俺の数倍強えぞ？」

「ッ、この化け物共が！」

適当に雑談をしているように聞こえるが、この間も刃は走り敵を切り裂かんと動き続けている。剣がぶつかるたびに衝撃波が発生し、運悪く近くに居た下級魔族はズタズタに引き裂かれた。

（『ベノンザッパー』が効かない今、私には奴を倒す方法が無い……どうすれば）

オセは誇りとする奥義を剣圧で防がれた為に、決定打と呼べる技

が無くなってしまった。それは戦闘の長期化を意味し、今はまさに降着状態と言ったところだ。肉体の限界を超えた補助魔法に身を蝕まれながら決定打も無くこれほどの強敵と戦うのは無謀の極みだろう。

「どうした、もっと楽しもうぜ！この楽しい戦いをなあ！」

既に全身傷だらけのはずなのにほとんど応えていない様子のガッツ。その顔は喜色満面と言った風で犬歯をギラつかせながらこちらの様子を伺っている。確実に遊ばれている。

「……遊ばれている今しかないか」

何かを決意したのか、距離を取り剣を下段に構え目を閉じるオセ。恐らく次の一撃に全てを込めるつもりだろうと当たりをつけ、腕に力を込めるガッツ。

「……参る！ハアアアアア！」

「来いオラア！」

前方に跳躍し斬りかかるオセに対し、ガッツはただ最高の速度で剣を振り下ろす。袈裟懸けに切り裂かれ勝利を確信するガッツとは裏腹に、オセの顔は斬撃を流されたにもかかわらず目的を果たしたとでも言いたげだった。

「終わりだな……中々楽しかったぜ」

「何を言っている、私はまだ生きているのだぞ？」

足下から少しずつ消えていくオセが剣を構える。それは彼の自慢の大技の構え。

「なっ……てめっ、抜けねえ!？」

オセの意図を理解したのか素早く剣を引き抜こうとする。しかし剣は筋肉の圧迫により動かず、その驚きで体を動かすのが一瞬遅れた。そしてその一瞬が有ればオセには十分だった。

「『ベノンザッパー』アアアアアアア！」

グチャリと言う音がする。視界が紅く染まり、頬にドロリとした感触が伝わる。二の腕の辺りに激痛を感じて初めて自分が腕を失ったと気づいた。

「フフ、いかに貴様とて……毒に蝕まれ……両腕を失って……しまえば……何も出来まい」

「ッ！てめえ、この魔族共に俺を殺させるつもりか！」

血涙を流しながらニヤリと笑うオセを見てその企みに気づくガッツ。

「精々……足掻け……そして……死……ね……」

オセが完全に消えた。後に残されたのは両腕を失い毒を受けたガッツと、周辺で様子見をしていた大量の魔族だけだった。魔族達はここで手柄を上げようといきり立っている。

「……ハハハ、確かにこれはきついかもな」

口の端から血を流し正面の敵集団を見る。なめられたモノだ。あの才せならともかく手前えら程度に遅れを取ると思うか？そんな事を考えながら、愛用の剣の柄を歯でがっちり固定する。

「来いよ雑魚共、何度でも相手になるぜ？」

その顔に浮かべるのは絶望でも諦めでもなく、ただ純粹に、子供のような微笑みだった。

英雄の帰還まで、後二分。

無数に蠢く黒い影、これが全て虫ならどれだけ良いものか。空を覆うほどの悪魔が今スリジを囲んでいた。さすがのスリジも槍を失い疲労困憊と言った様子で、周辺の悪魔はニヤニヤしている。これから自分達が殺す獲物をせめて少しぐらいは憶えておこうとしているのかも知れない。

「チィ、流石に疲れたな。魔力もそろそろ不味いし、これは少々やばいか」

今彼にはほとんど魔力が残っていない。これでは『魔法の射手』も撃てない。せめて槍があればまた違っだろうが、投げてしまった以上仕方がない。

「……まあ、過ぎたことは仕方がないか」

その一言を諦めと認識したのか、一斉に襲いかかる悪魔達。スリ

ジに出来るのは後ろに飛び退くだけ。

「ギイイイイイ！」

悪魔達が逃げた獲物を捕らえる為に雄叫びを上げて追撃する。牙をむき、爪をうならせ猪の様に突っ込んでくる。だがスリジは何かに確信を抱いているのか、涼しい顔をしてこう言った。

「流石、時間ぴったりだよ『英雄』」

「——『雷の暴風』！」

轟音と共に雷を纏った竜巻が悪魔達の中心部を穿つ。スリジに気を取られていた悪魔達はなすすべ無くかき消される。

「下がらせてもらえるかな、ナギ・スプリングフィールド？」

「——ああ、もう帰っても良いぜ、スリジ」

スリジは空に撤退を意味する閃光弾を投げ、撤退を始める。残りの悪魔の数・質なら恐らく普通の兵士でも倒せるだろうから、もうこの戦場で戦う必要はなさそうだ。それに既に敵勢力の約80%を倒したのだから、後で文句を言われることも無いだろう。彼はそう判断し、少し後方に下がってこの戦いを見届けようと思った。

その後、『紅き翼』の面々の参戦によりグレートブリッジ奪還作戦は連合側の圧勝となった。既に帝国兵のほとんどは拠点に居らず、ほぼ素通りで奪還することが出来た。今作戦はこの作戦における連合側の死傷者はゼロ、帝国側でさえ十数人と有史以来最高の生存率を記録した。また、この作戦でグレートブリッジを奪還したのは公

式によれば『紅き翼』だけの力だとあるが、実際はその裏に『鉄壁の医師団』の姿があつたと言われている。しかしこの事実は隠蔽され、一部の人間に知られるに留まつた。

なお、今回の一件で上層部は『紅き翼』に与えた『医師団』殲滅命令を取り下げた。彼らは連合に仇為す者では無いと判断したのだろう。これを聞いて前線の魔法使い達、とりわけ『医師団』に助けられた者は胸をなで下ろした。

第20話 復帰（後書き）

グレートブリッジ奪還作戦決着！

……しかしこのペースだと原作入るまで一体何話使うのだろうか。

味方がインフレ過ぎて怖いここ最近、次回更新は十一月六日の予定
です。

第21話 序曲（前書き）

今回はいつもよりも少し長めです。

いろいろと飛ばし飛ばしで進んでいきます。

第21話 序曲

グレートブリッジ奪還作戦からしばらくの時間が経った。あれから『医師団』は『紅き翼』とは遭遇していない。『紅き翼』は今も戦場を飛び回っているはずなのだが、一向に戦場で姿を見ない。風の噂では、数名メンバーが増えたいが、会うことができない以上確かめる事ができない。

「今頃何をしているのやら……」

書類を片付けながらスリジが呟く。あの後勝手に介入したことを会長に怒られ、共に戦った戦友に何も言えず別れてしまった為に、地味に不機嫌になっている。せめて何か一言言えれば良かったのだが。

奪還作戦からだいぶ経過した最近、『紅き翼』はこの戦争に違和感を覚えていた。繰り返される不毛な争い、終わる兆しの無いこの戦争は何か裏から手を引いているとしか思えない。そう考えたナギの言葉を裏付ける様に、新しく仲間になった元捜査員のガトウが秘密結社の名を述べる。

その名は『完全なる世界』。裏から世界を操り、この世界を『破壊』させようとする組織。

彼らはしばらくこの組織について調べることになった。ウェスペルタイア王国王女アリカからの依頼で、この戦争を終わらせる為に。後に彼らはこの組織と長きにわたる戦いをすることになるのだ

が、長くなるので割愛させていただく。

「……暇になったなあ」

オーデインから送られてきた報告書を読みながらふと思ったことを口に出す。現在彼は麻帆良で平和に、それはもう平和に暮らしている。『メルキセデクの書』は既に学園長に渡し、図書館島に封印処理を受けて保管されている。時々戦闘訓練をしたりはするし、悪魔が出現したときのための備えもちゃんと取っている。

しかし、何も無いのだ。これでは前世と大して変わらない。何か有るのも困るが、何も無いのも精神衛生的に良くない。何かが起こるのではと神経をすり減らしながら生活するのは胃が痛くなるばかりだ。一応ポルターガイストなどの目に見えないようにすることが出来る悪魔でパトロールなども考えたが、すぐ魔法先生に消されてしまうので意味は無く、一日一回散歩がてらに見回りをするので精一杯だった。

「さて、今日も見回りに行きますか」

体を伸ばし、財布と保険として黄昏の羽根を懐にしまつ。この羽根さえ有れば一回死んでもすぐに生き返れるので、出かけるときにはいつも持つようにしている。

外に出てしばらく歩く。所々で買い物をしながら、何か異変は無いかを注意深く観察する。特に異変は起こっていないようで、街は平和そのものだった。いつも通り世界樹に向けて歩きだした。

「平和だなあ、平和過ぎて怖いよ」

これまで定期的に何かが起こっている俺はここまで平和だと、逆にこれから何か有るんじゃないかと不安になる。そんな事を考えていたとき。

「うつ、ぐす……ひぐ……」

何処からか少女の鳴咽が聞こえてきた。周辺を見渡すとその声は路地裏から聞こえて来ていた。

「こつちか？……何かあったのか？」

泣いていたのは7、8歳程の金髪の少女。どこか気品溢れる雰囲気だが、服はぼろぼろになり髪も汚れ放題だった。俺はその少女に何かあったのかを聞いてみた。

「……お兄ちゃん、誰？」

「！？」

顔を上げた少女を見て俺は驚愕した。彼女こそ、二人の大悪魔を虜にした純粹無垢なる魂の持ち主、魔人アリスその人だった。しかし本来彼女はマタドールより強いはずなのだが、感じられる魔力は一般人程度しか無い。泣きはらしたのか目が真っ赤になっている。

「？ アリスの顔見てどうかしたの？」

「あ、いや、何でもないよ。僕は本田仁也。それで、何でこんな所で泣いているんだい？」

努めて優しく聞こえるように聞いてみる。下手に機嫌を損ねたら殺されてしまうかも知れない。

「あのね、黒おじさんが戻ってこないの」

「!……戻ってこないって、どこかに行ったのかい？」

「黒おじさん、ちょっと用事ができたから、アリスにここで待ってるって言ったの。赤おじさんと一緒に待ってるって」

ネビロスだけでなく、ベリアルもここに居ると言うことが判明した。正直に言えばまだ会いたくない。とにかくベリアルの居場所を特定して、そこにアリスを連れて行こう。それが一番問題が少なそうだ。

「……その赤おじさんは、何処に居るの？」

「……」

アリスは足下に置いてある小さなフラスコのような瓶を指していった。中央に五芒星が描かれており、栓がしてある。いわゆる『封魔の瓶』なのだが、ベリアルがこんな物で封印出来るのだろうか？

「……えっと、これの中に赤おじさんが居るの？」

「うん。怖いおじさん達がアリスにこれを向けてきたの。おじさん、アリスを庇ってこの中に入っちゃったの。赤おじさんはしばらく待てればすぐに出てくるって言ったけど、全然出てこないの」

目に涙をためて説明するアリス。……その黒おじさんの末期を知っている身としては少々辛い。

「……ねえお兄ちゃん、アリスのお願い聞いてくれない？」

「……何だい？」

涙目＋上目遣いは卑怯です。死んでくれるとか言われたら即退避だけだな！

「アリスそろそろ行かなくちゃいけないの。だから……赤おじさんを預かってくれない？」

「……」

アリスは瓶をこちらに渡そうとしている。何故いきなり俺に渡す事に？

「どうして、俺なのかな？」

「もうほとんど時間がないの！絶対戻ってくるから、それまで赤おじさんを守って欲しいの！」

よくよく見るとアリスは端から少しずつ光となって霧散しつつある。服の背中に紅いシミが有ることから背中に致命傷を負っているのかも知れない。蘇生することも考えたが、アリスの服のシミが黒ずんでいることや切羽詰まった表情から、既に死が確定してしまっているのだらうと推測する。だが悪魔ならまだ何とか出来るかも知れない。

「その怪我のせい？もしかしたらまだ治療出来るかも知れないよ？」

「ダメだよ、もう『契約』しちゃったの！黒おじさんを助ける『契約』を……だから……」

彼女は既に『何か』と『契約』を結んでしまったらしく、それによつて死から逃れられないようだ。……これは受けるしかなさそうだ。もし受けなければ半永久的に祟られるかもしれない。

「……戻ってくるのにはどれくらい掛かる？」

「ふえ？」

「預かってあげるから、どのくらい掛かるか教えてくれないかな」

「！……ありがとう、お兄ちゃん！」

満面の笑みを浮かべるアリスを見ると、少しだけ罪悪感を感じた。正直に言った方が良かったのだろうが、俺にはこの笑顔を曇らすことは出来そうに無い。

「多分とっても時間が掛かると思ふの。もしかしたら何年も掛かっちゃうかも知れない」

「そのぐらいなら全然大丈夫だよ。この瓶の中に居る赤おじさんを匿ってればいいのかい？」

「うん、もし瓶から出てもここに居るように言つてね。アリスのお願いだって言えばきつと聞いてくれると思ふから」

彼女からもこんな評価で良いのかベリアル。……足下の瓶からなんか凄い幸せな空気が漂ってくるから別に良いのだろう。

段々顔色が悪くなっていくアリス。恐らく傷が痛むのだろう。

「……そろそろ時間みたい。またね、お兄ちゃん。絶対戻ってくるから、待っててね！」

その笑顔を崩さぬまま、足下から消えていく。足下に置いてあった瓶を俺に渡し、念を押すかのように約束の内容を繰り返して、最後にこう言った。

「約束だよ、お兄ちゃん！」

言い切った時、彼女は完全にこの世界から消えた。……そういえばどうして追われていたのかとか聞いてなかったな。まあ、今俺の腕の中に居る赤おじさんことベリアルが出てきたときにも聞けば良いか。

しばらく街道沿いに歩いていると、恐らく教職員だろう男二人がこんな会話をしていた。

「……例の少女はまだ見つからないのか？」

「ああ、何でも弱りすぎて探知出来ないんだと。全く、まだ仕事が残ってるのにこんな事に駆り出さないで欲しいぜ」

「仕方ないだろう、退魔師やデビルサマナーも動員しているらしいが人手が足りないんだ。……数年前までは一組で数十人分の働きをした退魔師も居たらしいがな」

「何だよ、そいつらに任せりゃ良いじゃねえか。俺たちが出張る必要ねえじゃん」

「その退魔師の夫婦は死んだんだ。学園長も頼りにしていただけに死んだと聞いたときはかなり愕然としたらしい」

あの学園長がそこまで両親を気に入っていたとは少々予想外だった。俺の中で少し学園長の株が上がった様な気がする。

「……定時連絡だ。少女の反応は消失、封印された悪魔は行方がわからないそうだ」

「マジかよ……あの悪魔恐ろしく強いんだろ、大丈夫だろうな？」

「流石に『封魔の瓶』をもろに喰らったら自力での脱出は不可能だろう。誰かが封印を解かない限りは復活はあり得ないはずだ」

「大丈夫かねえ……来年からは学園結界も強化されるし、もう少し楽になると良いんだが」

二人の男はどこかに向かって歩き出した。……安全が確認出来たら、学園長にこの瓶のこと話してみるか。約束は匿う事だから何処に居ようが問題無いだろうし。

一週間後に世界樹の発光を控えながら、俺の一日はこんな風に平和に過ぎていった。

仁也がアリスと出会って約一年後、魔法世界では『紅き翼』の状況が変化していた。連合に追われることになった彼らは囚われたアリカ・テオドラ両皇女を助け、連合・帝国問わず地道に仲間を増やし一大勢力を築き上げていた。しかしまだ『完全なる世界』と真っ向から戦うには戦力が足りない。敵の召喚魔等を抑える為には後一手、切り札と呼べる何かが必要だった。

そこでナギが提案したのが『医師団』への接触だった。あれだけの部隊ならば十分戦力になるし、ダメで元々でとにかく接触してみよう、と言うのがナギの意見だ。最初は笑い話だったのだが段々余裕が無くなってきた為、結局実行してみることとなった。早速ナギと詠春、アルビレオの三人は『医師団』の拠点に向かった。奪還作戦で共同戦線を取った事から、今回は顔パスでスリジの元に行くことが出来た。

「ようスリジ、久しぶりだな！」

「ほう、ナギか！一体どうした？」

年相応の笑顔で話しかけるナギにこれまた笑顔で応対するスリジ。既に長年連れ添った友人のようなやりとりだった。

「少し真面目な話があるんだ。今良いか？」

「ふむ、言ってみたまえ」

「俺たちに力を貸してくれないか？」

あつさりと率直に言い切るナギ。その様子を見て頭を抱える詠春とクスクスと笑うアルビレオ。

「……それは正式な依頼かね？」

「まあ、そうだな」

「では報酬は何をもらえるのかね？それを聞かねば協力することは出来ないな」

ナギは予想外の言葉だったのか少し驚いた表情をしている。詠春は既に諦めているようでどこか宙を見ている。アルビレオは出されたお茶を飲みながら乾いた笑いを上げている。

「報酬……報酬なあ、確かに俺たちが『医師団』に協力出来る事は少ないな」

「ふむ、報酬が出せないのならこの話は無かったことに……」

スリジの言葉は言外に「報酬を出せば協力する」と言っているようなものだ。それがわかつているナギは何とか頭を捻って良い答えを出そうとしている。

（……仁条グループがバックにある以上金では動かないだろうし、やはりどう考えても無理だ！）

詠春はこちら側から出せる物など何も無いと判断し、そろそろ引き上げようと準備をしようとしたその時。

「……俺たちがお前達『医師団』に渡せる物が一つだけ有ったぜ！」

ナギが大声でそう言った。詠春が驚いて動きを止める。

「……それは一体？」

興味深そうなスリジの視線を受け、ナギはしっかりとこう言った。

「『平和』だ！」

途端、場が静まる。静寂がしばらく場を支配し、数秒間時が止まったようだった。

「あ、あれ……ダメか？」

「ナギ、まだ手に入れて無いものを交渉に出すのは詐欺と言って……」

「プツ、ハハハハハハ！面白い、我々が手伝えば平和を掴めると言いたいのか！」

詠春が失敗したと判断してナギに説教しようとした時、スリジが笑い出した。腹を抱える様に笑うその姿に否定の意思は見受けられず、ただ本当に面白いから笑っているようだった。

「……良いだろう！今日すぐに返事をする事は出来んが、協力出来るように会長に話を付けようじゃないか！」

「ほ、本当か！助かるぜ！」

かなり機嫌が良くなったのか、笑いながら協力を約束するスリジ。その姿を見て成功したことを悟ったナギは嬉しそうに笑った。後ろに控えていた詠春とアルビレオは普通はあり得ない状況に驚いている。

「じゃあ、よろしく頼むぜ！俺たちはこれから他のところにも根回しをしなきゃなんねえから、もう出なくちゃなんねえんだ」

そう言っただけで去っていくナギを追うように出て行く二人を送り、スリジは会長に何と報告するか考える。

「……そういえば最近グループで作った『アレ』があつたな。『アレ』の機動試験とでも言っておくか」

そう言っただけでデスクに向き直り、会長に嘆願する為の書類を作り始める。恐らく今回も会長に怒られるだろうが、戦友の頼みならば断るのも忍びない。それに『アレ』の機動試験と言えば喜んで許可してくれる様な気がする。とにかくまずは書類を通そう。そう考えて書類仕事に精を出すスリジだった。

第21話 序曲（後書き）

みんな大好きアリス登場です！ついでにいろいろフラグを立てておいたり……

サマナーは居ますが、葛葉では無くフリーの者を雇っています。そちらの方が安上がりですし、通常出てくる悪魔はLv10行くか行かないか程度ですから。

最後に言っていた『アレ』は悪魔でなく機械です。ただしメガテン関係です。

次回更新は十一月十三日の予定です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6320w/>

真チート転生～麻帆良学園戦争～

2011年11月6日20時40分発行